

茨城県教育財団文化財調査報告第296集

薬師入遺跡 2

阿見吉原土地地区画整理事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

下 卷

平成 20 年 3 月

茨城県竜ヶ崎土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第296集

薬師入遺跡 2

阿見吉原土地区画整理事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

下 卷

平成 20 年 3 月

茨城県竜ヶ崎土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

— 下 卷 —

5	中世の遺構と遺物	225
(1)	掘立柱建物跡	225
(2)	地下式坑	227
(3)	溝跡	243
(4)	道路跡	247
(5)	火葬土坑	248
(6)	墓坑	250
(7)	土坑	251
6	近世の遺構と遺物	255
(1)	塚	255
(2)	溝跡	265
(3)	墓坑	265
7	その他の遺構と遺物	266
(1)	溝跡	266
(2)	道路跡	283
(3)	炭焼遺構	286
(4)	土坑	294
(5)	ピット	302
(6)	不明遺構	303
(7)	遺構外出土遺物	303
第4節	まとめ	310
付章		
1	薬師入遺跡出土炭化材の樹種同定	326
	野村敏江 (パレオ・ラボ)	
2	薬師入遺跡の放射線炭素年代測定	329
	パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ	
	小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫	
	Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・藤根 久・野村敏江	
3	薬師入遺跡第78号住居跡の土壤に係る自然科学分析	336
	バリノ・サーヴェイ株式会社	

5 中世の遺構と遺物

今回の調査では、掘立柱建物跡3棟、地下式坑10基、溝跡4条、道路跡3条、火葬土坑2基、墓坑1基、土坑5基が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

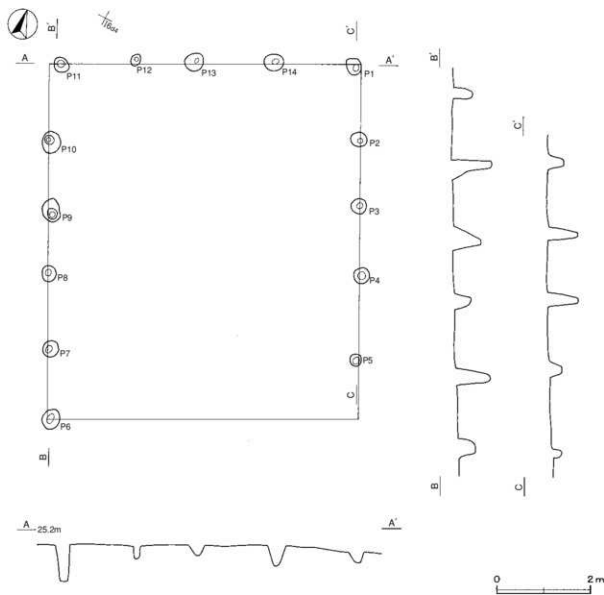
(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第194図）

位置 調査区南東部のI6d4区、標高25.0mほどの台地平坦部に位置している。

規模と構造 桁行5間、梁行4間の掘立柱建物跡で、桁行方向はN-27°-Wである。規模は、桁行7.5m（25尺）、梁行6.6m（22尺）と考えられ、面積は49.5㎡である。柱間寸法は東・西桁行とも1.5m（5尺）で、梁行は北妻が1.35m（4.5尺）～1.8m（6尺）である。また、桁行・梁行ともに柱筋の通りが悪い。

柱穴 14か所。平面形は円形を基調とし、深さは30～89cmである。各柱穴の覆土は、P5が3層に分層でき、



第194図 第1号掘立柱建物跡実測図

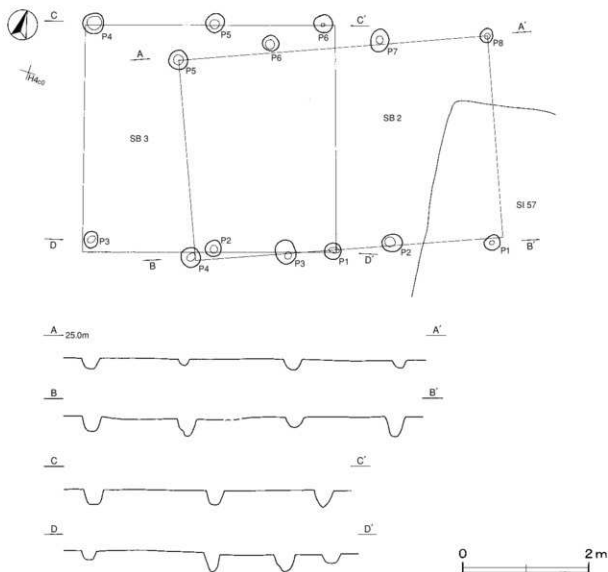
他の柱穴は2層に分層できた。ローム粒子を基調とし、若干の炭化粒子も含まれており、色調は褐色と暗褐色である。土層断面の観察から柱抜き取り後の自然堆積と考えられる。底面は皿状で、あたりを確認することはできなかった。

所見 南東角と南東側の柱穴の位置を想定して確認面を精査したが柱穴は確認できなかったことから、礎石を使用していた可能性がある。柱穴の規模と建物跡の形状から倉庫としての機能は想定しにくく、居室として機能していたと考えられるが明確ではない。時期は、中世と考えられる。

第2号掘立柱建物跡 (第195図)

位置 調査区中央部のH4b0区、標高24.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第57号住居跡を掘り込んでいる。第3号掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴の切り合いがないため新田は不明である。



第195図 第2・3号掘立柱建物跡実測図

規模と構造 桁行3間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向はN-70°-Eである。規模は、桁行4.8m（16尺）、梁行3.3m（11尺）で、面積は15.84㎡である。柱間寸法は桁行は東から1.65m（5.5尺）、1.65m（5.5尺）、1.5m（5尺）である。

柱穴 8か所で、平面形は円形を基調としている。深さは、耕作による削平を受けているため11~28cmと浅く、掘り方の断面形はU字状である。P1・P3が2層に層別でき、他の柱穴は単一層である。ロームブロックやローム粒子を含んでおり、色調は暗褐色と極暗褐色である。掘り方が浅いために判別が困難ではあるが、土層断面に版築されたような固い面などが認められないことや覆土がおおむね単一層であることなどから柱抜き取り後の自然堆積と考えられる。

所見 東・西妻側の柱穴の位置を想定して確認面を精査したが柱穴は確認できなかった。柱穴の規模と建物跡の形状から倉庫と考えられるが明確ではない。時期は、中世と考えられる。

第3号掘立柱建物跡（第195図）

位置 調査区中央部のH4b0区、標高24.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴の切り合いがないため新旧は不明である。

規模と構造 桁行2間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向はN-75°-Eである。規模は、桁行3.6m（12尺）、梁行3.3m（11尺）で、面積は11.88㎡である。柱間寸法は桁行が1.8m（6尺）である。

柱穴 6か所で、平面形は円形を基調としている。深さは、耕作による削平を受けているため12~28cmと浅く、掘り方の断面形はU字状である。各柱穴の覆土は単一層で、ロームブロックやローム粒子を含んでおり、色調は暗褐色と黒褐色である。掘り方が浅いために判別が困難ではあるが、土層断面に版築されたような固い面などが認められないことや覆土が単一層であることなどから柱抜き取り後の自然堆積と考えられる。

所見 東・西妻側の柱穴の位置を想定して確認面を精査したが柱穴は確認できなかった。柱穴の規模と建物跡の形状から倉庫と考えられるが明確ではない。時期は、中世と考えられる。

表8 掘立柱建物跡一覧表

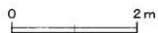
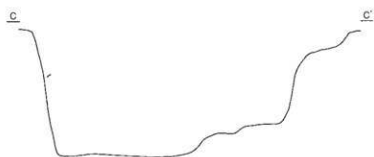
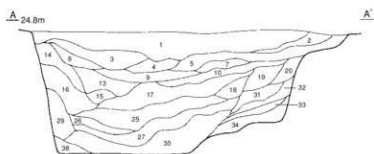
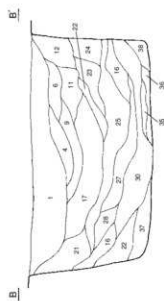
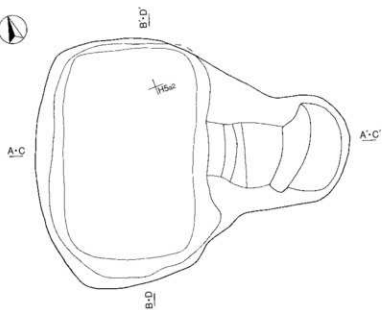
番号	位置	桁行方向	柱間数 桁×梁(間)	規模 桁×梁(m)	面積 (㎡)	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴				主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
								構造	柱穴数	平面形	深さ (cm)		
1	I 644	N-27°-W	5×4	7.50×6.60	49.50	1.50	1.35-1.80	側柱	14	円形	30-89		
2	H 440	N-70°-E	3×1	4.80×3.30	15.84	1.50-1.65	—	側柱	8	円形	11-28		S157→本跡 SB 3 (新旧不明)
3	H 440	N-75°-E	2×1	3.60×3.30	11.88	1.80	—	側柱	6	円形	12-28		SB 2 (新旧不明)

(2) 地下式坑

第1号地下式坑（第196図）

位置 調査区中央部のH5a1区、標高24.6mの台地平坦部に位置している。

壁坑 主室東壁の中央部に位置し、長軸2.28m、短軸1.80mの隅丸長方形である。壁高は159cmで、外傾して立ち上がっている。底面は主室に向かって階段状を呈している。



第196图 第1号地下式坑实测图

主室 長軸3.98m、短軸2.75mの隅丸長方形で、主軸方向はN-65°-Wである。確認面からの深さは196cmで、壁は外傾して立ち上がっている。天井部は遺存していないが、北東コーナー部には天井崩落の痕跡が確認されたことから、底面から天井部までの高さは120cmほどと推定される。底面は平坦である。

覆土 38層に分層される。第33・34層は堆積状況から堅坑から流れ込んだ自然堆積層で、第36・38層は天井部遺存時に天井部と主室壁が自然崩落した層と考えられる。第16・27・29・30層は含有物から天井部の崩落層と考えられる。その他の層はブロック状の堆積状況を示し、粘土ブロックなども含まれることから人為的な埋戻しと考えられる。第1層は人為的に埋戻された後に自然堆積した層である。

土層解説

1	極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	20	褐色	ロームブロック少量
2	褐色	ロームブロック・炭化粒子少量・焼土粒子微量	21	暗褐色	ローム粒子中量・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	22	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4	褐色	ローム粒子中量・焼土粒子・炭化粒子微量	23	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子少量・炭化粒子微量	24	褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
6	暗褐色	炭化粒子少量・ローム粒子・焼土粒子微量	25	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
7	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	26	褐色	ローム粒子多量
8	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	27	褐色	ローム中ブロック多量
9	黒褐色	粘土ブロック少量・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	28	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
10	褐色	ローム粒子少量・炭化粒子微量	29	褐色	ローム中ブロック多量
11	暗褐色	炭化粒子少量・ローム粒子微量	30	明褐色	ローム大ブロック多量
12	褐色	ローム粒子中量・炭化粒子少量	31	暗褐色	ロームブロック微量
13	褐色	ロームブロック少量・炭化粒子・炭化粒子微量	32	暗褐色	ローム粒子少量・粘土ブロック・炭化粒子微量
14	褐色	ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量	33	褐色	ロームブロック中量
15	黒褐色	ローム粒子微量	34	暗褐色	ローム粒子微量
16	褐色	ローム中ブロック中量	35	暗褐色	炭化粒子中量・焼土粒子少量・ロームブロック微量
17	暗褐色	ロームブロック少量	36	褐色	ロームブロック中量・粘土ブロック微量
18	褐色	ローム粒子中量	37	褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量
19	褐色	ローム粒子少量	38	灰褐色	粘土ブロック中量・ロームブロック少量

遺物出土状況 混入した古墳時代の土師器片8点、平安時代の土師器片2点が出土している。

所見 時期は、遺構に伴う遺物は出土していないが、遺構の形状から中世と考えられる。

第2号地下式坑 (第197図)

位置 調査区南部の14j8区、標高25.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4号溝跡を掘り込んでいる。

堅坑 主室南壁の東寄りに位置し、長径2.36m、短径1.69mの楕円形である。壁高は165cmで、やや外傾して立ち上がっている。底面にはピットがある以外は平坦で、主室との段差は認められない。

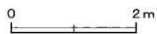
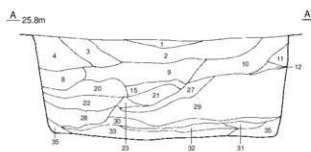
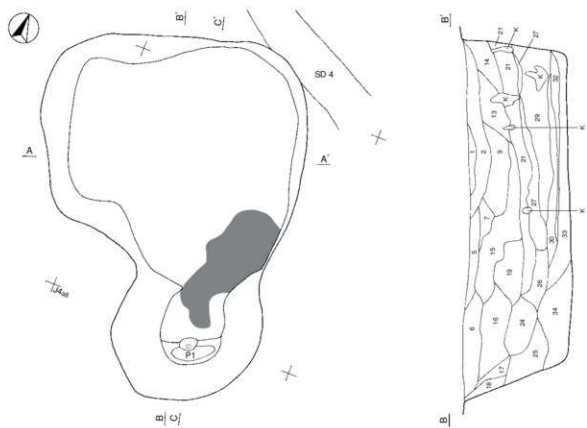
主室 長軸4.08m、短軸4.02mの隅丸長方形で、南壁は屈折している。主軸方向はN-15°-Wで、確認面からの深さは167cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面は平坦で、堅坑から主室にかけての底面に茅材と思われる炭化材が確認された。天井部は遺存していない。

ピット 深さは13cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 36層に分層される。第30・32・33層は天井部崩落以前に流れ込んだ自然堆積層、第29層は含有物から天井部の崩落層と考えられる。その他の層はブロック状の堆積状況を示すことから人為的な埋戻しと考えられる。第1・2層は人為的に埋戻された後に自然堆積した層である。

土層解説

1	暗褐色	炭化物少量・ローム粒子・焼土粒子微量	6	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2	暗褐色	炭化粒子少量・ローム粒子・焼土粒子微量	7	暗褐色	ロームブロック微量
3	暗褐色	ローム粒子・炭化物微量	8	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
4	暗褐色	ローム粒子少量	9	暗褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量
5	褐色	ローム粒子微量	10	暗褐色	ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量



第197图 第2号地下式坑·出土遗物实测图

11	褐	色	ローム粒子少量、炭化物微量
12	灰	褐色	ローム粒子少量
13	暗	褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
14	暗	褐色	ローム粒子微量
15	黒	褐色	ロームブロック微量
16	暗	褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
17	暗	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
18	暗	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
19	明	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
20	暗	褐色	ローム粒子少量
21	暗	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
22	極	暗褐色	ロームブロック微量
23	灰	褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
24	褐	色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
25	褐	色	ローム粒子少量
26	明	褐色	ロームブロック多量
27	褐	色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
28	暗	褐色	ローム粒子中量
29	褐	色	ロームブロック多量
30	灰	褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量
31	明	褐色	ロームブロック中量
32	灰	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
33	褐	色	ローム中ブロック中量
34	に	ふい褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量
35	褐	色	ロームブロック少量、炭化物微量
36	暗	褐色	ロームブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師質土器片4点(小皿)、石器1点(茶臼)のほかに、混入した古墳時代の土師器片24点、平安時代の土師器片3点が出土している。659~661は覆土中からの出土である。同じく覆土中から出土した茶臼片は、第5号地下式坑と第19号溝跡の茶臼片と接合している。

所見 炭化した茅材の出土は、遺構内で茅材を燃やしたことを想定させるが、意図は明確ではない。時期は、出土土器と遺構の形状から中世と考えられる。

第2号地下式坑出土遺物観察表 (第197図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
659	土師質土器	小皿	6.7	2.1	3.2	長石・石英・雲母	にふい・黄褐色	普通	底部回転糸切り	ロクロナデ	覆土中 100% 油質 PL-48
660	土師質土器	小皿	6.8	2.1	3.5	長石・石英	にふい・褐	普通	底部回転糸切り	ロクロナデ	覆土中 95% 油質 PL-48
662	土師質土器	小皿	6.4	2.2	3.4	長石・石英・雲母	にふい・黄	普通	底部回転糸切り	ロクロナデ	覆土中 95% PL-48

第3号地下式坑 (第198図)

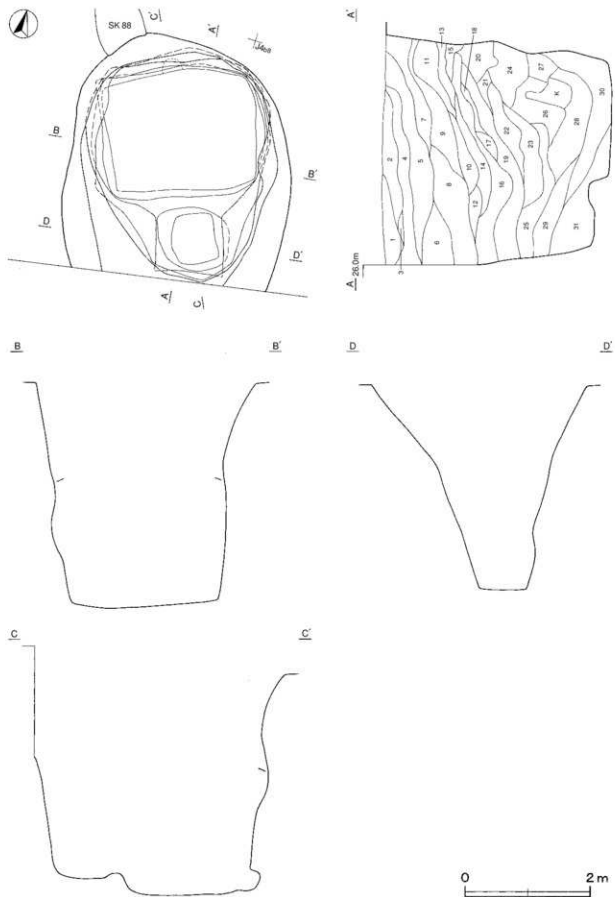
位置 調査区南部のJ4b7区、標高25.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第88土坑に掘り込まれている。

堅坑 主室南壁の中央部に位置している。南側は調査区域外へ延びているため堅坑全体の確認はできなかったが、長軸3.56m、短軸1.30mほどが確認された。壁高は332cmで、下位は直立しているが、東西の壁の上部は崩落の影響により大きく外傾して立ち上がっている。長軸断面の形状はV字状である。崩落以前の平面形は、底面からの立ち上がりや堅坑下位の形状から隅丸長方形と想定できる。底面は皿状で、主室に向かって段差がついている。

主室 長軸3.98m、短軸2.64mの隅丸長方形で、主軸方向はN-26°-Wである。確認面からの深さは357cmで、各壁ともほぼ直立しているが、東・西・北壁には天井崩落の痕跡が確認されたことから、底面から天井部までの高さは190cmほどと推定される。崩落以前の平面形は、底面からの立ち上がりや主室下部の壁の形状から隅丸長方形と想定できる。底面は平坦で、北壁の底面近くに横穴状の凹みがある。

覆土 31層に分層される。第29・31層は堆積状況から堅坑から流れ込んだ自然堆積層、第30層は天井部遺存時に天井部や主室壁が自然崩落した層と考えられる。第20~24・26~28層は含有物から天井部の崩落層と考えられ、自然に流れ込んだと思われる第25層が間に入っていることから段階的な天井崩落が想定される。その他の層はブロック状の堆積状況を示し、粘土ブロックなども含まれることから人為的な埋戻しと考えられる。



第198图 第3号地下式坑实测图

土層解説

1	にぶい褐色	砂粒中量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量	14	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	灰褐色	砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土ブロック微量	15	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
3	灰褐色	砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土ブロック微量	16	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
4	にぶい褐色	炭化物中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	17	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
5	灰褐色	細礫・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	18	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量
6	黒褐色	粘土ブロック・細礫・ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	19	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
7	灰褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	20	褐色	ローム粒子少量、ローム中ブロック少量
8	黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	21	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
9	にぶい褐色	粘土ブロック中量、細礫・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	22	褐色	ローム粒子中量
10	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	23	褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック中量
11	灰褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・細礫・砂粒・炭化粒子微量	24	褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、ローム大ブロック少量
12	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	25	暗褐色	ローム粒子少量
13	暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量	26	褐色	ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック中量
			27	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
			28	褐色	ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
			29	褐色	ロームブロック中量
			30	灰褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
			31	黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量

所見 時期は、遺物が出土していないため判断は難しいが、遺構の形状から中世と考えられる。

第4号地下式坑 (第199図)

位置 調査区中央部のH4a0区、標高24.7mの台地平坦部に位置している。

竪坑 主室南壁の中央部に位置し、長径1.62m、短径1.04mの楕円形である。壁高は124cmで、外傾して立ち上がっている。底面は踏み固められて硬化しており、主室に向かって段差がついている。

主室 長軸3.76m、短軸2.82mの隅丸長方形で、主軸方向はN-16°-Wである。確認面からの深さは178cmで、壁は外傾して立ち上がっている。天井部は遺存していないが、北東コーナー部に天井崩落の痕跡が確認されたことから、底面から天井部までの高さは130cmほどと推定される。底面は平坦である。

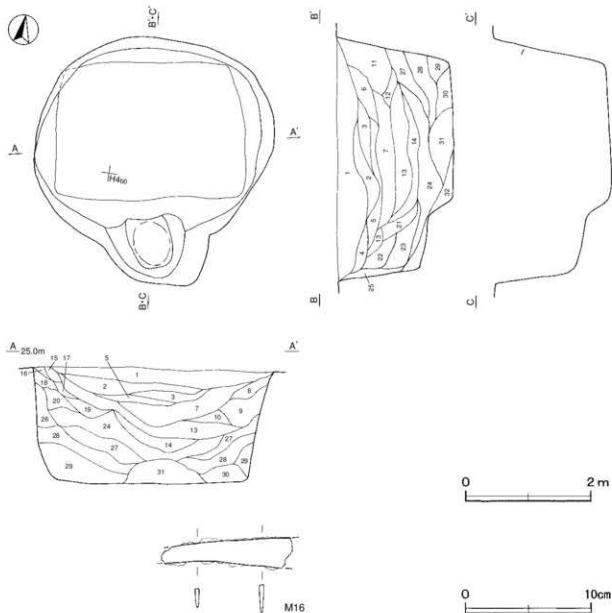
覆土 32層に分層される。第32層は堆積状況から竪坑から流れ込んだ自然堆積層である。第29～31層は含有物から天井部の崩落層と考えられ、まず、天井部中央の第31層が崩落し、次いで第30層、第29層と続いたと考えられる。第14・24・27・28層も天井部の崩落層と考えられ、第21～23層が流れ込んだり、第26層のような内壁崩落層が入り込んだりしていることから天井部は数次にわたり崩落したことが想定される。第11・25層も含有物と堆積状況から主室内壁崩落層と考えられる。その他の層はブロック状の堆積状況と含有物などから人為的な埋め戻しと考えられる。第1～7層は人為的に埋め戻された後に自然堆積した層である。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック微量	17	黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	18	褐色	ローム粒子中量
3	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	19	褐色	ローム小ブロック中量
4	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	20	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
5	黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子微量	21	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
6	黒褐色	炭化物・ローム粒子微量	22	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
7	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	23	暗褐色	ロームブロック中量
8	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	24	褐色	ローム中ブロック少量
9	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	25	褐色	ロームブロック少量
10	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	26	褐色	ローム大ブロック少量
11	黒褐色	ローム小ブロック中量	27	褐色	ローム粒子少量
12	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	28	褐色	ローム大ブロック中量
13	褐色	ロームブロック中量	29	明褐色	ローム小ブロック中量
14	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	30	褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック少量
15	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	31	明褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
16	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	32	褐色	ロームブロック少量、炭化物微量

遺物出土状況 混入した須恵器片1点と刀子1点が出土している。M16は覆土中からの出土である。

所見 時期は、遺構に伴う遺物が出土していないため判断は難しいが、遺構の形状から中世以降と考えられる。



第199図 第4号地下式坑・出土遺物実測図

第4号地下式坑出土遺物観察表 (第199図)

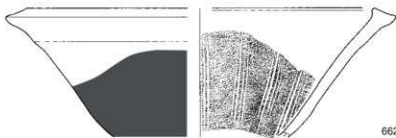
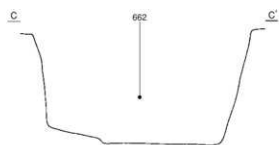
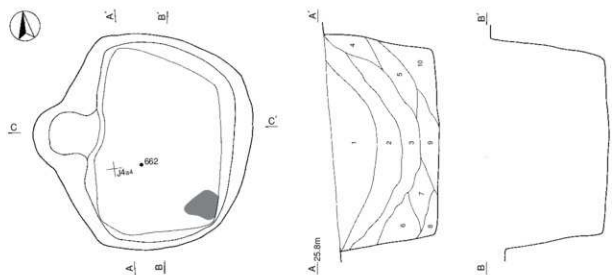
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M16	鏃	(10.4)	(2.4)	0.3	(24.4)	鉄	弓状に彎曲 断面三角形 両端欠損	覆土中	PL55

第5号地下式坑 (第200図)

位置 調査区南部のI 4j4区、標高25.7mの台地縁辺部に位置している。

竪坑 主室西壁の中央部に位置し、径1.00mほどの円形である。壁高は154cmで、ほぼ直立して立ち上がり上部で外傾している。底面は主室に向かって段差がついている。

主室 長軸3.42m、短軸2.42mの隅丸長方形で、主軸方向はN-96°-Eである。確認面からの深さは177cmで、壁は外傾して立ち上がり、天井部は遺存していない。底面は平坦で、南東コーナー部の底面から茅材と



第200图 第5号地下式坑·出土遗物实测图

思われる炭化物が確認された。

覆土 10層に分層される。第1～3層はレンズ状の堆積状況を示すことから天井部崩落後の自然堆積と考えられる。第4～6層は含有物から天井部の崩落層と考えられる。その他の層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説					
1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6	褐色	ローム中ブロック中量
2	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	8	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
4	褐色	ローム粒子中量	9	暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量
5	褐色	ローム小ブロック中量	10	褐色	ローム中ブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片6点（擂鉢1、鉢5）、石器1点（茶臼）のほかに、混入した縄文土器片4点、古墳時代の土師器片7点も出土している。662は主室の竪坑寄りの覆土中層から出土している。663は覆土中からの出土である。覆土上層から出土した茶臼片は、第2号地下式坑と第19号溝跡から出土した茶臼片と接合している。

所見 炭化した茅材の出土は、遺構内で茅材を燃したことを想定させるが、意図は明確ではない。時期は、出土土器と遺構の形状から中世と考えられる。

第5号地下式坑出土遺物観察表（第200図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
662	土師質土器	擂鉢	[25.8]	[10.2]	-	長石・石英・雲母 にお・油粘	普通	4条1単位の張り目	片口	覆土中層	10%
663	土師質土器	鉢	-	[4.3]	[14.0]	長石・石英・雲母 にお・黄粘	普通	内・外周及び底部ナデ		覆土中	5%

第6号地下式坑（第201図）

位置 調査区中央部のH4a7区、標高25.0mの台地平坦部に位置している。

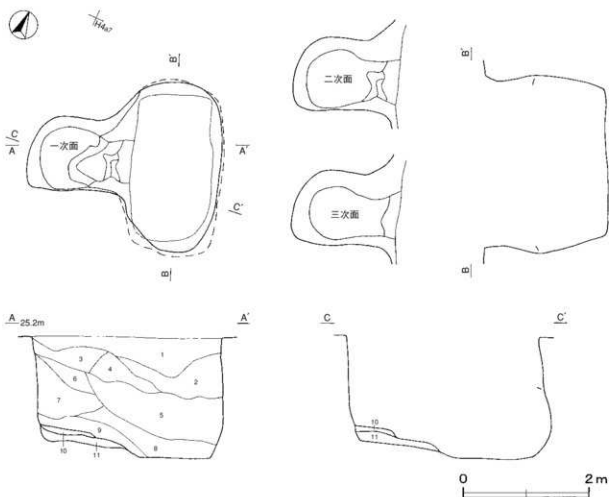
竪坑 主室西壁の中央部に位置し、長径1.69m、短径1.19mの楕円形である。壁高は168cmで、外傾して立ち上がっている。底面は3次面まで確認された。各面とも主室に向かって階段状になっており、それぞれに踏み固められて硬化している。

主室 長軸2.73m、短軸1.29mの隅丸長方形で、主軸方向はN-70°-Eである。確認面からの深さは192cmで、壁は外傾して立ち上がっている。天井部は遺存していないが、東・南・北の各壁には天井崩落の痕跡が確認されたことから、底面から天井部までの高さは110cmほどと推定される。底面は平坦である。

覆土 11層に分層される。第5層は含有物から天井部の崩落層と考えられる。第10層は竪坑最終使用時（第1次面）の硬化した層、第11層は第2次面の硬化した層である。その他の層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積で、第1層は人為的に埋め戻された後に自然堆積した層である。

土層解説					
1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	8	暗褐色	ローム粒子少量
3	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	9	暗褐色	ロームブロック中量
4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	10	褐色	ロームブロック少量
5	褐色	ロームブロック中量	11	褐色	ロームブロック中量
6	黒褐色	ロームブロック微量			

所見 竪坑底面の使用痕跡が3次面まで確認されたことから、長期にわたって使用されていたと想定できる。時期は、遺物が出していないため判断は難しいが、遺構の形状から中世と考えられる。



第201図 第6号地下式坑実測図

第7号地下式坑 (第202図)

位置 調査区中央部東寄りのH6c3区、標高24.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4号溝跡を掘り込んでいる。

堅坑 主室西壁の中央部に位置し、長軸1.56m、短軸1.44mの隅丸方形である。壁高は130cmで、外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、主室に向かって段差がついている。

主室 長軸3.61m、短軸2.56mの隅丸長方形で、主軸方向はN-63°-Eである。確認面からの深さは172cmで、壁は外傾して立ち上がっている。天井部は遺存していないが、東壁の南寄りに天井崩落の痕跡が確認されたことから、底面から天井部までの高さは90cmほどと推定される。底面は平坦である。

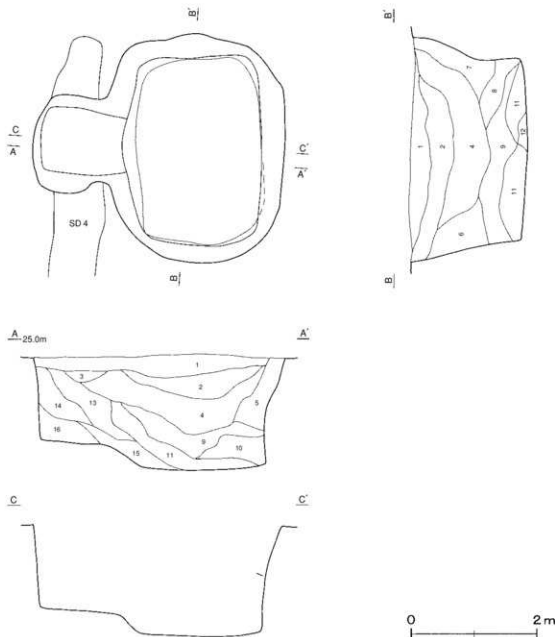
覆土 16層に分層される。第15層は、堆積状況から堅坑から流れ込んだ自然堆積層で、第5・7・10・11・16層は天井部の崩落層と考えられる。はじめ、堅坑付近の天井部が剥がれ落ちるように第16層が崩落し、次に天井部中央の第10・11層が崩落したと考えられる。第8・9層は天井崩落後に自然堆積した層で、その後に壁際に残っていた第5・7・9層が崩落したと考えられる。また、第13・14・15層が崩落層の間に流れ込んでいることから天井部は数次にわたり崩落したことが想定される。第12層は天井部遺存時に堆積した層で、第1～4層は天井部崩落後の自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	9	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	10	褐色	ローム大ブロック少量
3	暗褐色	ロームブロック微量	11	褐色	ローム中ブロック少量
4	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	12	黒褐色	ローム粒子少量
5	明褐色	ローム小ブロック少量	13	暗褐色	ロームブロック少量
6	褐色	ローム小ブロック中量	14	明褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
7	褐色	ローム中ブロック中量	15	明褐色	ローム小ブロック中量
8	暗褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量	16	暗褐色	ローム中ブロック少量

遺物出土状況 混入した古墳時代の土師器片4点が出土している。

所見 時期は、遺構に伴う遺物が出土していないため判断は難しいが、遺構の形状から中世と考えられる。

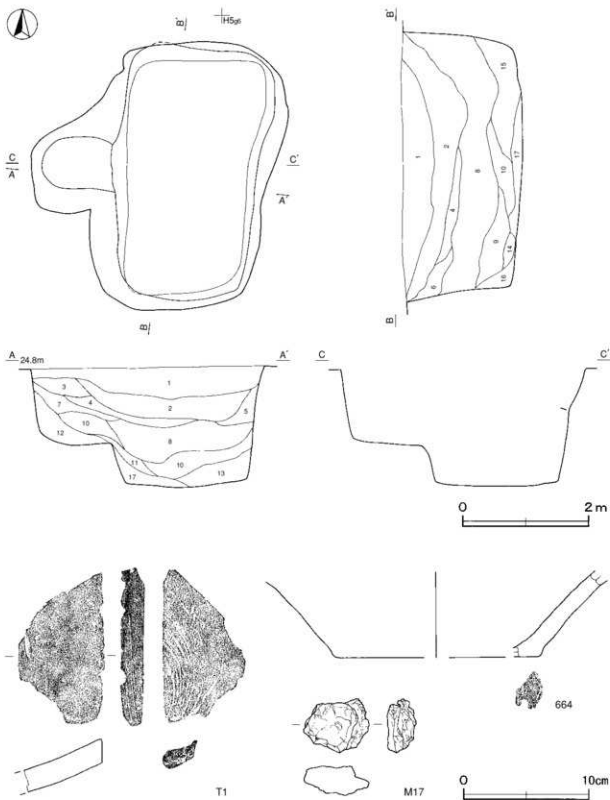


第202図 第7号地下式坑実測図

第8号地下式坑 (第203図)

位置 調査区中央部南東寄りのH5g5区、標高24.7mの台地平坦部に位置している。

竪坑 主室西壁の中央部に位置し、長軸1.44m、短軸1.29mの隅丸長方形である。壁高は119cmで、外傾して



第203図 第8号地下式坑・出土遺物実測図

立ち上がっている。底面は平坦で、主室に向かって段差がついている。

主室 長軸4.22m、短軸2.74mの隅丸長方形で、南側の主室幅が北側よりやや狭い。主軸方向はN-91°-Eである。確認面からの深さは185cmで、壁は外傾して立ち上がっている。天井部は遺存していないが、南西コーナー部と北壁の北西コーナー部寄りに天井崩落の痕跡が確認されたことから、底面から天井部までの高さは120cmほどと推定される。底面は平坦である。

覆土 17層に分層される。第9～12・17層は、堆積状況から堅坑から流れ込んだ自然堆積層で、第8・13～16層は含有物などから天井部の崩落層と考えられる。まず、第17層が堅坑から流れ込んだ後に第13～16層が崩落し、再び第9～12層が堅坑から流れ込んだ後に一気に第8層が崩落したと想定される。第1～7層は天井部崩落後の自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック少量
2	黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	11	暗褐色	ロームブロック微量
3	暗褐色	炭化物・ローム粒子微量	12	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
4	暗褐色	ローム粒子少量	13	明褐色	ローム中ブロック少量
5	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	14	暗褐色	ローム中ブロック少量
6	暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	15	暗褐色	ローム小ブロック中量
7	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	16	暗褐色	ローム中ブロック中量
8	明褐色	ローム中ブロック多量	17	暗褐色	ローム粒子中量
9	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量			

遺物出土状況 陶器片6点(大甕)、瓦片1点、椀状洋1点のほかに、混入した縄文土器片1点、古墳時代の土師器片60点も出土している。664・T1・M17はいずれも覆土中からの出土である。

所見 664は、焼成・胎土・調整などから常滑産の大甕と判断され、時期は、出土土器から中世後半と考えられる。

第8号地下式坑出土遺物観察表(第203図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
664	陶器	大甕	-	(6.8)	(18.0)	長石・石英・燧石	青	普通	粘土緑色き上げ成形 体部下塌ナデ 内面滑潤調整不明	覆土中	40% 常滑産
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M17	椀状洋	(4.2)	(5.3)	2.3	(59.4)	鉄	表面は暗赤褐色 凹凸有り		覆土中		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T1	平瓦	(12.8)	(7.1)	2.0	(182.9)	土(長石・石英)	にがい黄鉄	普通	端部・縁部へう崩り 特製 転用破カ	覆土中	5%

第9号地下式坑(第204図)

位置 調査区中央部南東寄りのH5g7区、標高25.0mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第13号溝跡を掘り込んでいる。

堅坑 主室南東壁のやや南西壁寄りに位置し、長軸1.68m、短軸1.22mの隅丸長方形である。壁高は178cmで、外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、主室に向かって段差がついている。

主室 長軸2.68m、短軸1.74mの隅丸長方形で、主軸方向はN-41°-Wである。確認面からの深さは192cmで、壁は外傾して立ち上がっている。天井部は遺存していないが、北コーナー部や南西壁に天井崩落の痕跡が確認されたことから、底面から天井部までの高さは120cmほどと推定される。底面は平坦である。

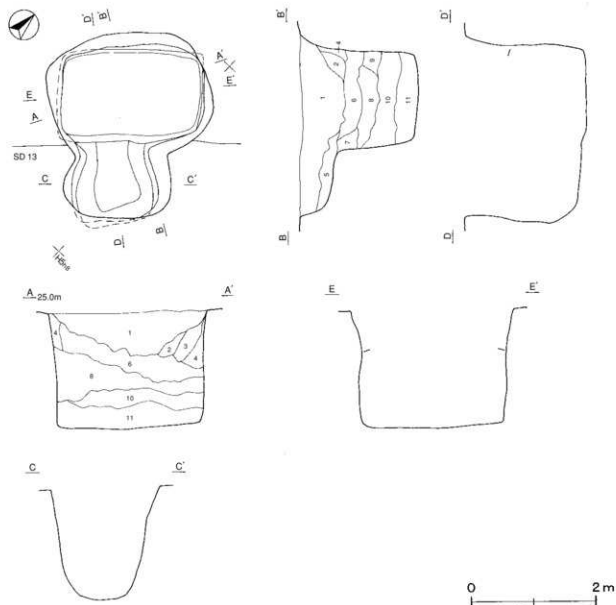
覆土 11層に分層される。第8～11層は含有物や堆積状況から天井部の崩落層で、第2～7層はブロック状の堆積状況を示すことから人為的な埋め戻しと考えられる。第1層は人為的に埋め戻された後に自然堆積した層である。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	8	褐色	ローム小ブロック多量
3	暗褐色	ロームブロック少量	9	褐色	ローム小ブロック中量
4	暗褐色	ロームブロック中量	10	明褐色	ローム小ブロック中量
5	暗褐色	ロームブロック微量	11	褐色	ローム中ブロック少量
6	無暗褐色	ローム粒子微量			

遺物出土状況 混入した古墳時代の土師器片11点が出土している。

所見 時期は、遺構に伴う遺物が出土していないため判断は難しいが、遺構の形状から中世と考えられる。



第204図 第9号地下式坑実測図

第10号地下式坑（第205図）

位置 調査区南部の15f5区、標高25.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4号溝跡を掘り込んでいる。

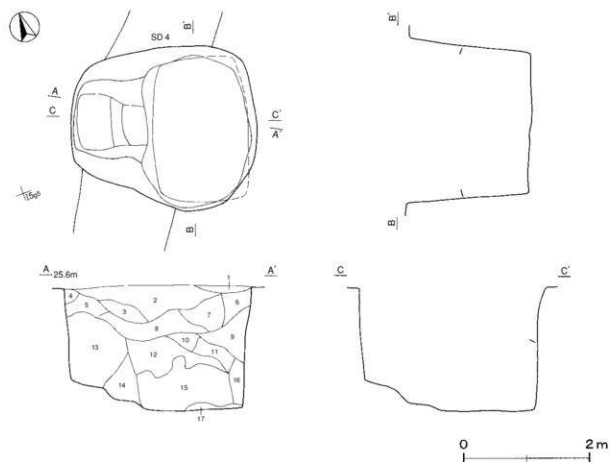
竪坑 主室北西壁の中央部に位置し、長軸2.20m、短軸1.19mの隅丸長方形である。壁高は150cmで、外傾して立ち上がっており、北東・南西壁の上部は崩落の影響で大きく外傾している。底面は平坦で、主室に向かって階段状になっている。

主室 長軸2.59m、短軸1.76mの隅丸長方形で、主軸方向はN-111°-Eである。確認面からの深さは195cmで、壁は外傾して立ち上がっている。天井部は遺存していないが、南東壁及びその両端のコーナー部に天井崩落の痕跡が確認されたことから、底面から天井部までの高さは110cmほどと推定される。底面は平坦である。

覆土 17層に分層される。第15・16層は含有物や堆積状況から天井部の崩落層で、第4～14層は天井部崩落後に人為的に埋め戻されたと考えられる。第1～3層は人為的に埋め戻された後に自然堆積した層である。第17層は堆積状況から天井部遺存時に堆積した層である。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子少量	8	黒褐色	炭化物少量、ロームブロック微量
3	暗褐色	ローム粒子少量	9	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック微量	10	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
5	黒褐色	ローム粒子少量	11	暗褐色	ローム粒子微量
6	暗褐色	ローム粒子微量	12	黒褐色	ロームブロック微量



第205図 第10号地下式坑実測図

13	暗褐色	ロームブロック少量	16	褐色	ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・
14	にぶい褐色	ロームブロック少量			ローム粒子少量
15	褐色	ローム中ブロック多量、ローム大ブロック・	17	黒褐色	ロームブロック少量
		ローム粒子中量、ローム小ブロック少量			

所見 遺構に伴う遺物が出土していないため判断は難しいが、時期は、遺構の形状から中世以降と考えられる。

表9 地下式坑一覧表

番号	位置	主軸方向	規模 (m)								覆土	主な出土遺物	備考 遺構関係 (古→新)
			竪坑			主室							
			長径×短径 (長軸×短軸)	壁厚 (cm)	平面形	底面	長軸×短軸	深さ (cm)	平面形	底面			
1	H 5a1	N-65°-W	2.28×1.80	159	隅丸長方形	段状	3.98×2.75	196	隅丸長方形	平坦	自然・人込	土師器	
2	I 4j8	N-15°-W	2.36×1.69	165	楕円形	平坦	4.08×4.02	167	隅丸長方形	平坦	自然・人込	土師器、土師質土器、石器	SD4→本跡
3	J 4b7	N-26°-W	3.56×(1.30)	332	隅丸長方形	段状	3.98×2.64	357	隅丸長方形	平坦	自然・人込		本跡→SK88
4	H 4a0	N-16°-W	1.62×1.04	124	楕円形	段状	3.76×2.82	178	隅丸長方形	平坦	自然・人込	須恵器、金属製品	
5	I 4j4	N-96°-E	1.04×1.02	154	円形	段状	3.42×2.42	177	隅丸長方形	平坦	自然・人込	縄文土器、土師器、土師質土器、石器	
6	H 4a7	N-70°-E	1.69×1.19	168	楕円形	段状	2.73×1.29	192	隅丸長方形	平坦	自然・人込		
7	H 6c3	N-63°-E	1.56×1.44	130	隅丸長方形	段状	3.61×2.56	172	隅丸長方形	平坦	自然	土師器	SD4→本跡
8	H 5a5	N-91°-E	1.44×1.29	119	隅丸長方形	段状	4.22×2.74	185	隅丸長方形	平坦	自然	縄文土器、土師器、陶器、瓦、金属製品	
9	H 5g7	N-41°-W	1.68×1.22	178	隅丸長方形	段状	2.68×1.74	192	隅丸長方形	平坦	自然・人込	土師器	SD13→本跡
10	I 5f5	N-111°-E	2.20×1.19	150	隅丸長方形	段状	2.59×1.76	195	隅丸長方形	平坦	自然・人込		SD4→本跡

(3) 溝跡

中世と考えられる溝跡が4条確認されている。以下、遺構の特徴について記述し、併せて一覧表を掲載する。平面図は遺構全体図で紹介する。

第1号溝跡 (第206図、付図)

位置 調査区北部のE 5b2区を中心に、標高23.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第94号住居跡を掘り込み、第1A号溝・第629号土坑に掘り込まれている。第17号溝跡と接しているが新旧関係は不明である。

規模と形状 北側は調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、北西から南東方向の長さ45.2mが確認され、全体は緩やかに彎曲している。上幅0.63~1.08m、下幅0.34~0.64m、深さ8~17cmである。断面形は逆台形で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

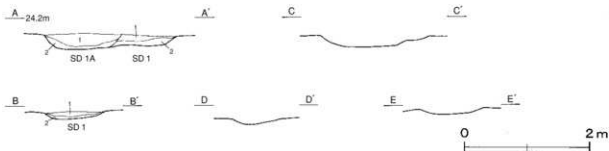
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量 2 褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片33点と平安時代の土師器片16点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。

所見 『業師入道跡1』で報告されている第1号溝跡に続く溝で、「覆土の様相などから、中世を遡ることはない」と報告されている。時期は、今回の調査でも前回と同様の覆土の様相を示しており、中世を遡らないと考えられる。



第206図 第1・1A号溝跡実測図

第1A号溝跡 (第206図、付図)

位置 調査区北部のE 5a1区を中心に、標高23.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第94号住居跡、第1号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北側は調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、北西から南東方向の長さ21.1mが確認され、全体は緩やかに彎曲している。上幅0.78～1.22m、下幅0.30～0.88m、深さ17～25cmである。断面形は逆台形形で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 褐色 ロームブロック少量

所見 第1号溝跡を掘り込んでおり、走行する方向や緩やかな彎曲具合なども同様であることから、第1号溝跡と同様な掘削目的があったと考えられる。時期は、重複関係から中世と考えられる。

第2号溝跡 (第207図、付図)

位置 調査区北西部のD 2c5区を中心に、標高22.0～24.0mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第1号道路跡と重複関係にあるが新旧関係は不明である。

規模と形状 D 2c5区を中心に、東西方向を軸にしてほぼ直線的に長さ26.1mが確認された。上幅1.08～1.62m、下幅0.57～1.12m、深さ4～18cmである。底面には僅かな凸凹が見られ、西側へ緩やかに傾斜している。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、西側部分に硬化面が確認された。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

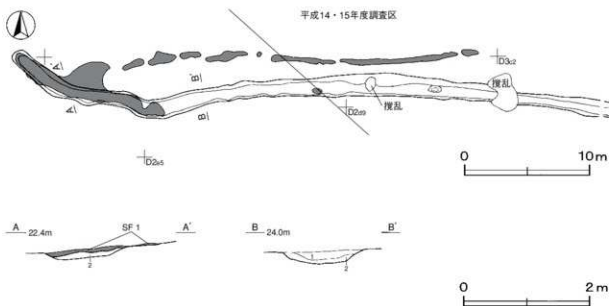
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量 2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片7点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。

所見 『業師入道跡1』で報告されている第2号溝跡から続く溝で、「覆土の様相などから、中世を遡ることはない」と報告されている。今回の調査分を合わせると63.5mが確認されている。西側部分には硬化面が確認され、第1号道路跡と重複していることから、当初は溝としての機能を有していたが、後には道路としての機

能も果たしていたと想定される。時期は、今回の調査でも前回と同様の覆土の様相を示しており、中世を遡らないと考えられる。



第207図 第2号溝跡・第1号道路跡実測図

第19号溝跡 (第208・209図, 付図)

位置 調査区南部のJ 4b5区を中心に、標高25.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南側が大きく攪乱されているため全体を確認することはできなかったが、南北方向を軸としてほぼ直線的に長さ8.3mが確認された。上幅0.65~1.10m、下幅0.21~0.43m、深さ20~23cmほどである。底面は皿状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

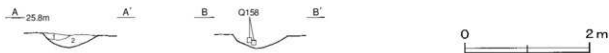
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

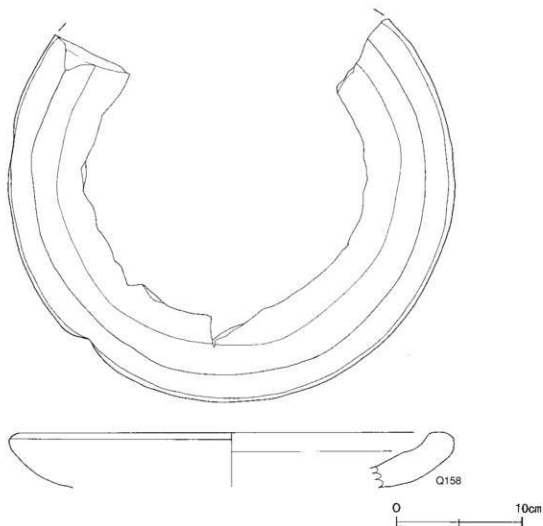
2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 石器2点(茶白)のほかに、古墳時代の土師器片9点も出土している。Q158は覆土下層から出土しており、第2・5号地下式坑から出土した茶白片と接合している。

所見 茶白片は、本跡では覆土下層、第2号地下式坑では覆土中、第5号地下式坑では覆土上層からそれぞれ出土しており、出土状況や遺存率などから本跡の遺物として掲載した。時期は、接合関係にある地下式坑が中世に比定されており、茶白片は本跡が溝としての機能を終えてまもない時期に投棄されたと考えられることから中世と考えられる。



第208図 第19号溝跡実測図



第209図 第19号出土遺物実測図

第19溝跡出土遺物観察表 (第209図)

番号	器種	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q158	茶臼	35.4	(4.3)	(1790.0)	安山岩	凸帯部残存	覆土下層	綜合調査IP-2-5

表10 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m)				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				確認長	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	D 4g8-E 5g1	N-15'-E N-25'-W	くの字状	(45.2)	0.63 ~ 1.08	0.34 ~ 0.64	8 ~ 17	緩斜	平坦	自然	土師器	SI94→本跡 →SD1A, SK 629
1A	D 4g8-E 5a2	N-25'-W	曲線状	21.1	0.78 ~ 1.22	0.30 ~ 0.88	17 ~ 25	緩斜	平坦	自然		SI94 →本跡 SD 1
2	D 2b2-D 2c8	N-82'-E	直線状	26.1	1.08 ~ 1.62	0.57 ~ 1.12	4 ~ 18	緩斜	凹凸	自然	土師器	SF 1 (新旧不明)
19	J 4a5-J 4c5	N-169'-E	直線状	(8.3)	0.65 ~ 1.10	0.21 ~ 0.43	20 ~ 23	緩斜	皿状	自然	土師器、石器	

(4) 道路跡

中世と考えられる道路跡が3条確認されている。以下、遺構の特徴について記述し、併せて一覧表を掲載する。平面図は遺構全体図で紹介する。

第1号道路跡 (第207・210図, 付図)

位置 調査区北西部のD2b6区を中心に、標高22.8～24.0mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号溝跡と重複関係にあるが新旧関係は不明である。

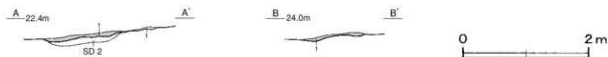
規模と形状 東西方向に長さ20mほどにわたって掘り込みのない硬化面が部分的に確認された。確認された硬化面の幅は0.34～0.98mである。

覆土 単一層で、硬化面の層である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック散在

所見 「薬師入遺跡1」で報告されている第1号道路跡から続く道路である。前回の報告では第2号溝跡の硬化面を含めて2条の硬化面を想定して轍と推定したが、今回の調査で第2号溝跡の硬化面は西側部分で本跡と重複していることが確認されたことから、2つの遺構がほぼ同時期に道路として機能していたことも想定される。時期は、「薬師入遺跡1」で第1号道路跡は「覆土の様相などから、中世を遡ることはない」と報告されており、中世と考えられる。



第210図 第1号道路跡実測図

第6号道路跡 (付図)

位置 調査区北西部のD2h0区を中心に、標高23.0mほどの台地縁辺の南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第7号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東西方向に長さ30.0mにわたって硬化面が確認されている。確認された硬化面の幅は0.22～0.54mである。

所見 本跡の北側には谷部へと続く現代の道路があり、それと平行した状態で確認されていることから西側の谷部へ降りるための道路と考えられる。時期は、重複関係から中世と考えられる。

第7号道路跡 (第211図, 付図)

位置 調査区北西部のE2a6区を中心に、標高20.0～23.0mほどの台地縁辺の南緩斜面部に位置している。

重複関係 第9・27号溝跡、第5号道路跡を掘り込み、第6号道路、第2号墓坑に掘り込まれている。

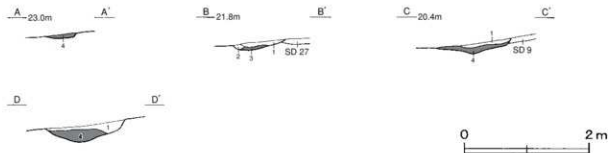
規模と形状 E 2a6区を中心に、南北方向に長さ43.7mにわたって確認され、D 2j6区付近で緩やかに彎曲している。部分的に掘り込みも確認されており、上幅0.47~1.30m、下幅0.26~0.86mで、深さ16~25cmである。また、確認された硬化面の幅は0.30~0.94mである。断面形は逆台形で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。覆土の第1・2層は、レンズ状の堆積状況と含有物から自然堆積と考えられる。第3・4層は硬化面の層である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-----------|---|-----|---------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック微量 | 3 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子微量 | 4 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |

所見 谷部に向かってほぼ直線的に延び、底面もかなり強く踏み固められていることから、頻繁に台地上と谷部とを往來していたことが想定される。時期は、覆土の様相が中世を遡らないと考えられる第1・2号溝跡と類似しており、また、17世紀に比定されている墓坑に掘り込まれていることから中世と考えられる。



第211図 第7号道路跡実測図

表11 道路跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m)				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				確認長	上幅	下幅	深さ (cm)					
1	D 2c1-D 2e8	N-85°-E	直線状	20.1	—	0.34-0.98	—	—	平坦	—		SD 2 (新旧不明)
6	D 2h5-D 3h3	N-5°-E	直線状	30.0	—	0.22-0.54	—	—	平坦	—		SF 7 → 本跡
7	D 5f5-E 2e9	N-32°-W N-15°-W	曲線状	43.7	0.47-1.30	0.26-0.86	16-25	緩斜	平坦	自然		SD 9・27・SF 5 → 本跡 → SF 6、 第2号墓坑

(5) 火葬土坑

第2号火葬土坑 SK 139 (第212図)

位置 調査区南部の1 4c8区、標高25.4mの台地平坦部に位置している。

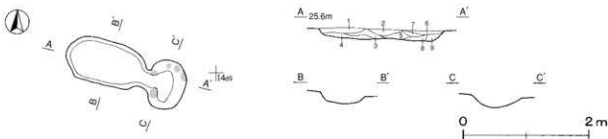
開口部 西側に位置する。長軸1.36m、短軸0.72mの隅丸長方形である。深さは17cmで、底面は平坦で焼焼部に向けてわずかに傾斜している。

燃焼部 長径0.79m、短径0.64mの楕円形である。深さは18cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、火を受けて赤変している。

覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説	
1 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
2 暗 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
5 暗 褐色	炭化粒子中量、焼土粒子少量、ロームブロック微量
6 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
7 暗 赤褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子微量
8 黒 褐色	炭化粒子多量、焼土ブロック・ローム粒子少量
9 黒 褐色	炭化粒子多量、焼土粒子中量、ロームブロック微量

所見 覆土に多量の焼土粒子や炭化粒子が含まれていることや、遺構の形状などから火葬土坑と判断したが、骨片や骨粉などは検出されなかった。本跡の東部及び南西部には4基の地下式坑があり、北部に土坑群が位置することから本跡を含む地区は墓域の可能性が想定できるが、墓坑が確認できないことから明確ではない。時期は、遺物が出土していないため判断は難しいが、遺構の形状から中世と考えられる。



第212図 第2号火葬土坑実測図

第3号火葬土坑 SK 611 (第213図)

位置 調査区南部の14b1区、標高25.6mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第42号住居跡を掘り込んでいる。

開口部 西側に位置する。西側は攪乱を受けているが、長軸1.80m、短軸1.14mの隅丸長方形である。深さは54cmで、底面は平坦で燃焼部に向けてわずかに傾斜している。

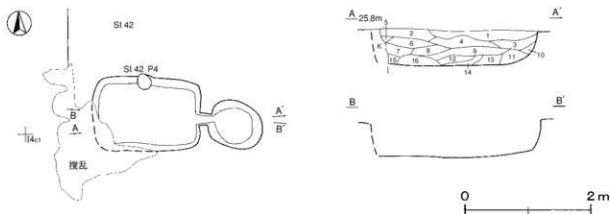
燃焼部 長径0.89m、短径0.73mの楕円形である。深さは58cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 16層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説	
1 暗 褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
2 暗 褐色	ロームブロック微量
3 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
4 暗 褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
5 暗 褐色	ローム粒子少量
6 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
7 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
8 暗 褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量
9 極暗褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
10 暗 褐色	ロームブロック・炭化物微量
11 極暗褐色	ロームブロック・炭化物少量
12 極暗褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量
13 暗 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
14 暗 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量
15 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量
16 暗 褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 混入した古墳時代の土師器片4点が出土している。

所見 古墳時代の土師器片は第42号住居跡のものと考えられる。覆土に焼土ブロックや炭化物が含まれることや、遺構の形状などから火葬土坑と判断したが、骨片や骨粉などは検出されなかった。本跡の南東部や東部には地下式坑が4基あり、北東部には土坑群が検出されていることから本跡を含む地区は墓域であった可能性が想定できるが、墓坑などが確認できないことから明確ではない。時期は、遺物が出土していないため判断は難しいが、遺構の形状から中世と考えられる。



第213図 第3号火葬土坑実測図

表12 火葬土坑一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m)						覆土	主な出土遺物	備考 重要関係 (古→新)		
				開口部		底部部								
				長軸×短軸 (cm)	平面形	底面	長径×短径 (cm)	平面形	底面					
2	I 4 c 8	N - 71° - W	T字形	1.36 × 0.72	17	隅丸長方形	平坦	0.79 × 0.64	18	楕円形	平坦	人為		
3	I 4 b 1	N - 87° - W	T字形	1.80 × 1.14	54	隅丸長方形	平坦	0.89 × 0.73	58	楕円形	平坦	人為	土師器	SI 42 → 本跡

(6) 墓坑

第1号墓坑 SK78 (第214図)

位置 調査区南部のI 4 g 4区、標高25.9mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.57m、短径0.75mの楕円形で、長径方向はN-53°-Eである。深さは14cm、底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

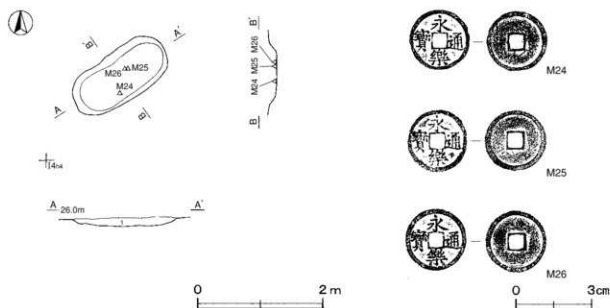
覆土 単一層のため堆積状況は不明である。

土層解説

1 層 褐色 炭化粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子微量

遺物出土状況 古銭3枚が底面から出土している。

所見 時期は、出土古銭の初鋳年が1408年であることから、15世紀代と考えられる。



第214図 第1号墓坑・出土遺物実測図

第1号墓坑出土遺物観察表 (第214図)

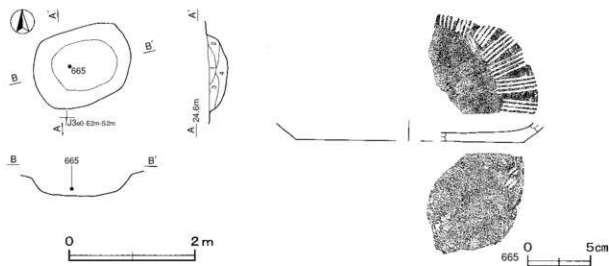
番号	銭名	径	孔幅	重量	材質	初铸年	特徴	出土位置	備考
M24	永享通宝	2.42	0.55	2.86	銅	1408年(永享6年)	真書	底面	P.L.55
M25	永享通宝	2.44	0.59	2.80	銅	1408年(永享6年)	真書	底面	P.L.55
M26	永享通宝	2.45	0.57	1.86	銅	1408年(永享6年)	真書	底面	P.L.55

(7) 土坑

第38号土坑 (第215図)

位置 調査区南部のJ3e0区、標高24.4mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径1.57m、短径1.20mの楕円形で、長径方向はN-70°-Eである。深さは31cm、底面は平坦で、



第215図 第38号土坑・出土遺物実測図

壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点(掻鉢)のほかに、古墳時代の土師器片2点も出土している。665は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。

第38号土坑出土遺物観察表 (第215図)

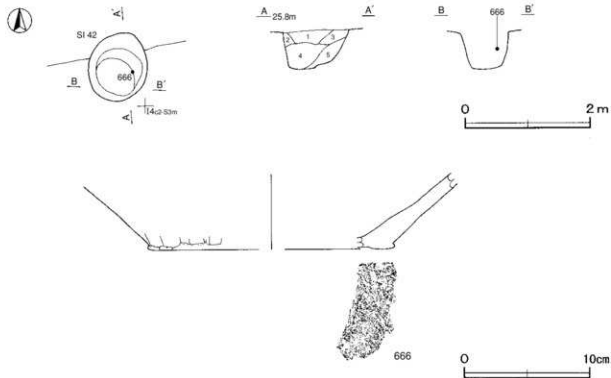
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
665	土師質土器	掻鉢	-	(1.6)	[18.2]	長石・石英・雲母	明陶	普通	4条1單位の盛り目	覆土下層	5%

第118号土坑 (第216図)

位置 調査区中央部西寄りのI 4 c1区、標高25.6mの台地縁部に位置している。

重複関係 第42号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.10m、短径0.93mの楕円形で、長径方向はN-22°-Eである。深さは55cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。



第216図 第118号土坑・出土遺物実測図

覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------|--------|-----------------------|
| 1 暗 褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 陶器片1点(大甕)、貝(マツカサガイ-122.96g-)のほかに、混入した古墳時代の土師器片4点も出土している。666は覆土中層、その下部からマツカサガイが出土している。

所見 時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。

第118号土坑出土貝種一覧表

No	貝種	長さ	比率	殻頂数	備考
1	マツカサガイ	70.96	57.70	L = 36 R = 38	
2	マツカサガイ断片	52.00	42.30		

第118号土坑出土遺物観察表(第216図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
666	陶器	大甕	-	(6.0)	[19.6]	長石・石英・燐 にふい骨		普通	胎土面巻き上げ成形 自然堆積	腰部下端ヘラナデ 内面障灰に2	覆土中層 5%	常備蔵

第203号土坑(第217図)

位置 調査区南東部のI5c3区、標高25.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.83m、短径0.60mの不整楕円形で、長径方向はN-44°-Eである。深さは20cm、底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

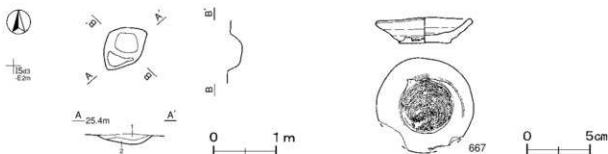
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------|------|---------|
| 1 暗 褐色 | ロームブロック少量 | 2 褐色 | ローム粒子中量 |
|--------|-----------|------|---------|

遺物出土状況 土師質土器1点(小皿)のほかに、古墳時代の土師器片2点が出土している。667は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。



第217図 第203号土坑・出土遺物実測図

第203号土坑出土遺物観察表(第217図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
667	土師質土器	小皿	7.4	2.0	4.1	長石・石英・雲母 ・赤色粒子		普通	底部回転糸切り(2回)ロコロナデ	覆土中	85%

第205号土坑 (第218図)

位置 調査区南東部のI5c3区、標高25.1mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.44m、短径0.78mの不整形円形で、長径方向はN-67°-Wである。深さは39cm、底面は平坦で、東側の壁は直立ぎみに立ち上がっている。

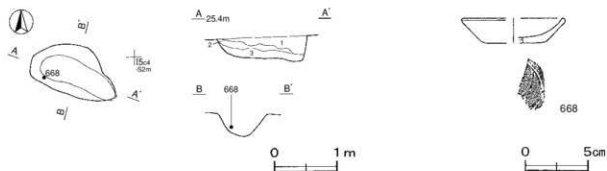
覆土 3層に分層される。覆土に凹凸があることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|----------------|---|-----|------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 | 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | | | |

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)が出土している。668は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。



第218図 第205号土坑・出土遺物実測図

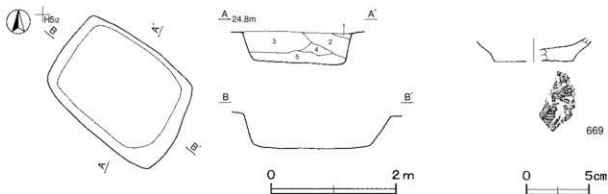
第205号土坑出土遺物観察表 (第218図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
668	土師質土器	小皿	[8.0]	2.0	[3.0]	長石・石英・雲母 赤色粒子	にぶい	普通	底部回転糸切り(2回) ロクロ成形	覆土下層	30%

第277号土坑 (第219図)

位置 調査区南東部のH5i2区、標高24.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.28m、短軸1.63mの隅丸長方形で、長軸方向はN-57°-Wである。深さは53cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。



第219図 第277号土坑・出土遺物実測図

覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説	
1 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック中量
4 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
5 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)が出土している。669は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。

第277号土坑出土土物観察表(第219図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
669	土師質土器	小皿	-	(1.8)	(6.4)	長石・石英・雲母	橙	普通	ロクロ成形 帯減により底部の底面不明	覆土中	25%

表13 中世土坑一覧表

番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長径×短径) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
38	J 3e0	N-70°-E	楕円形	1.57×1.30	31	緩斜	平坦	人為	土師器、土師質土器	
118	I 4c1	N-22°-E	楕円形	1.10×0.93	55	外傾	平坦	人為	土師器、陶器、貝	SI 42→本跡
203	I 5c3	N-44°-E	不整形円形	0.83×0.60	20	緩斜	平坦	自然	土師器、土師質土器	
205	I 5c3	N-67°-W	不整形楕円形	1.44×0.78	39	外傾・直立	平坦	人為	土師質土器	
277	H 5i2	N-57°-W	楕丸長方形	2.28×1.63	53	外傾	平坦	人為	土師質土器	

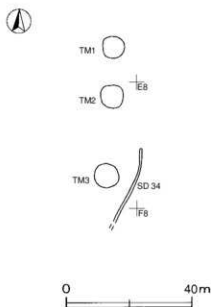
6 近世の遺構と遺物

今回の調査で、塚3基、溝跡1条、墓坑1基が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 塚

3基の塚は、調査区北東部の台地平坦部に、ほぼ南北方向を軸として配置されており、北側から第1号塚、第2号塚、第3号塚である。第1号塚と第2号塚は9mほどの間隔をとって構築されている。また、第3号塚は第2号塚の19mほど南に構築されており、第1号塚と第2号塚を結ぶ軸線からはやや西方向にずれている。

さらに、塚の東側には第34号溝跡が位置しており、溝跡の走行方向及び緩やかな彎曲は3基の塚の軸線と類似しており、関連が想定される(第220図)。



第220図 塚位置確認図

第1号塚 (第221・222図)

位置 調査区北東部のD7h9区を中心に、標高23.8mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径7.41m、短径7.36mの隅丸方形で、高さは177cmであり、長軸方向はN-85°-Wである。

構築状況 15層からなり、旧表土を基部とし、周囲の旧表土を地山面まで掘り込んだ後、その土を掻き上げるようにして塚を構築している。黒褐色土や暗褐色土が主体で、第3・5・6・8・11層はやや締まりに欠ける。第15層は旧表土、第1層は表土である。

土層解説

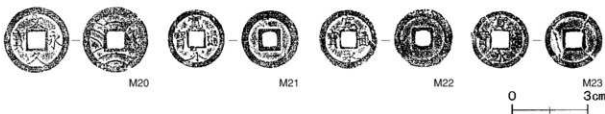
1	暗褐色	ローム粒子少量	9	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	10	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子微量	11	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	12	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック微量	13	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	14	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
7	暗褐色	ロームブロック少量	15	黒褐色	ローム粒子微量
8	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量			

第1号塚出土具種一覧表

No.	目録	重さ	比率	数量	備考
1	マツカサガイ	13.80	38.24	L=5 R=3	3個体統合
2	ヤマトシジミ	21.50	59.66	L=12 R=12	4個体統合
3	マツカサガイ細片	0.78	2.10		

遺物出土状況 古銭4点(寛永通宝)、貝(マツカサガイ、ヤマトシジミ)、古墳時代の土師器片4点が第6層中から出土しており、塚構築の際に混入したものと考えられる。遺物は細片のため図示できない。本調査前、安政7年(1860年)銘の庚申塔1基が塚頂部に倒れた状態で残っており、本跡の東に位置する金比羅宮に移築されたことが聞き取り調査で明らかになっている。

所見 時期は、出土遺物や移築された石碑の紀年銘、塚の築造状況などから近世と考えられる。



第221図 第1号塚出土遺物実測図

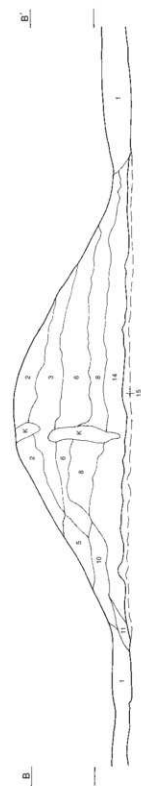
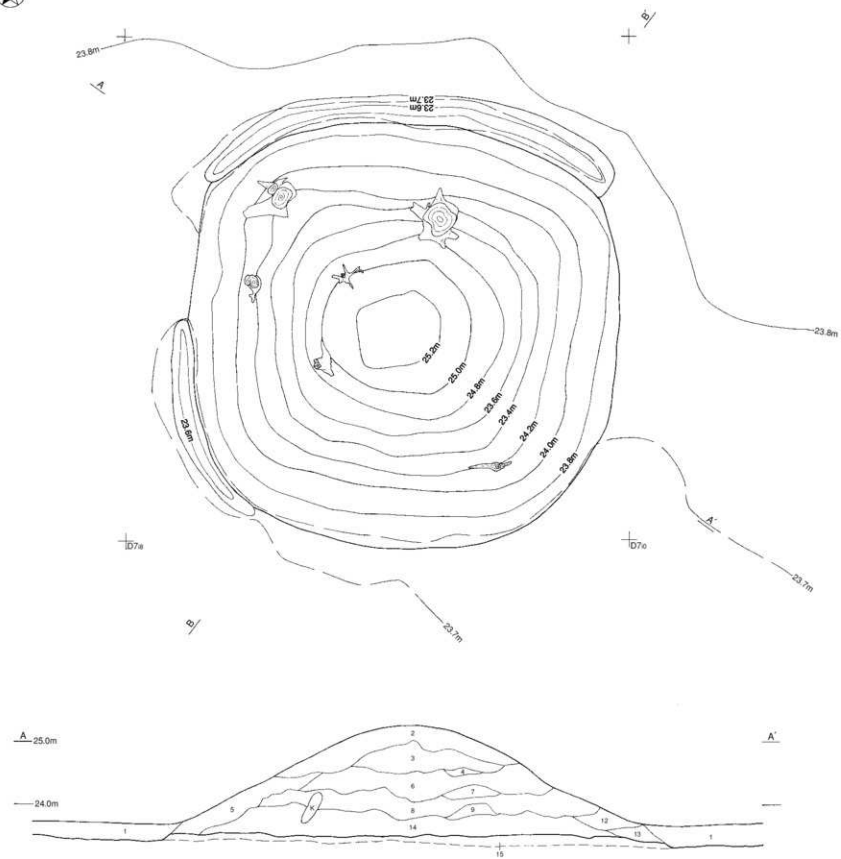
第1号塚出土遺物観察表 (第221図)

番号	銭名	径	孔径	重量	材質	初周年	特徴	出土位置	備考
M20	文久永宝	2.53	0.65	2.80	銅	1863年(文久3年)	四文銭 11渡	構築土中	PL55
M21	寛永通宝	2.30	0.57	2.52	銅	1708年(宝永5年)	新寛永 無背文	構築土中	PL55
M22	寛永通宝	2.35	0.58	2.10	銅	1736年(元文元年)	新寛永 無背文	構築土中	PL55
M23	寛永通宝	2.30	0.66	1.92	銅	1708年(宝永5年)	新寛永 無背文	構築土中	PL55

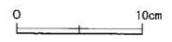
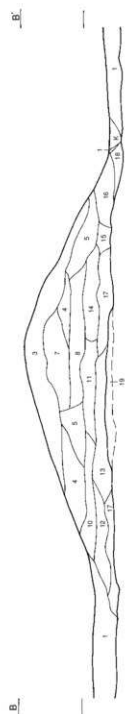
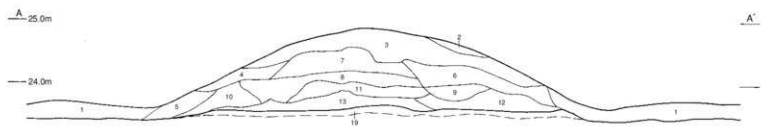
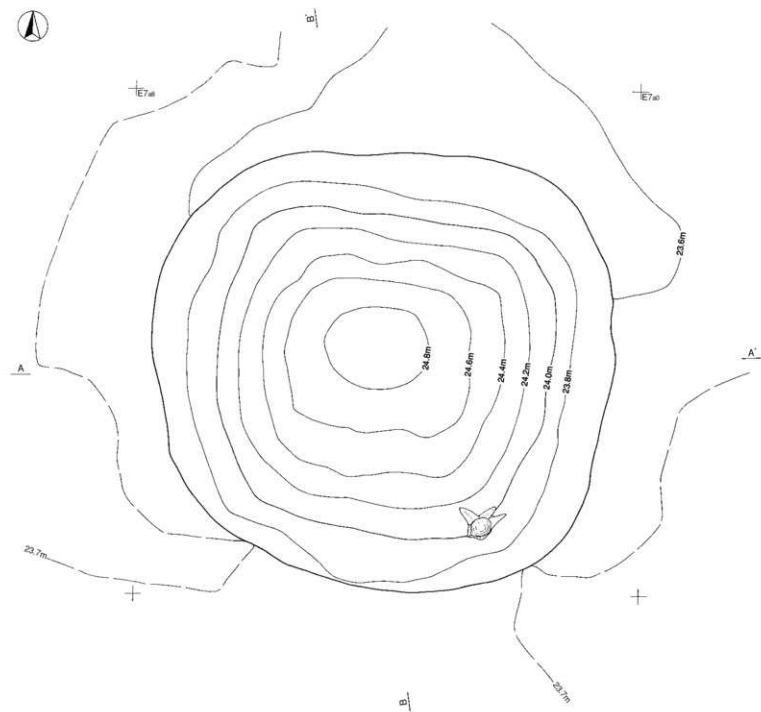
第2号塚 (第223図)

位置 調査区北東部のE7b9区を中心に、標高23.7mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径7.75m、短径7.42mの隅丸方形で、高さは126cmであり、長軸方向W-85°-Wである。



第222图 第1号塚实测图



第223图 第2号塚・出土遺物実測図

構築状況 19層からなり、旧表土を基部とし、周囲の旧表土を地山面まで掘り込んだ後、その土を掻き上げるようにして塚を構築している。黒褐色土や暗褐色土、褐色土が主体で、第3～5・7・8・10・16・18層はやや締まりに欠ける。第19層は旧表土、第1層は表土である。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	11	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子微量	12	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	13	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	14	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・炭化粒子微量	15	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
6	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	16	暗褐色	ロームブロック少量
7	暗褐色	ロームブロック微量	17	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
8	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	18	暗褐色	ローム粒子中量
9	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	19	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
10	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量			

遺物出土状況 石材262点(石碑)、陶器片1点(碗カ)のほかに、盛土中から古墳時代の土師器片245点が出土している。671を含む多くの土師器片は、塚南東側の中心付近の第11層に相当する高さから出土しており、塚構築の際に混入したものと考えられる。遺物は細片のため図示できるものが少ない。本調査前、寛政12年(1800年)銘の庚申塔1基が塚頂部に倒れた状態で残っており、本跡の東に位置する金比羅宮に移築されたことが聞き取り調査で明らかになっている。

所見 時期は、出土遺物や石碑の紀年銘、塚の築造状況などから近世と考えられる。

第2号塚出土遺物観察表(第223図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
671	土師器	甕	-	16.1	-	長石・石英	にひい青藍	普通	体部外廻ハケ目調整後ナデ 内面ナデ	構築土中	5%

第3号塚(第224・225図)

位置 調査区北東部のE7h8区を中心に、標高23.8mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径7.80m、短径7.72mの円形で、高さは152cmであり、長径方向はN-O⁺である。

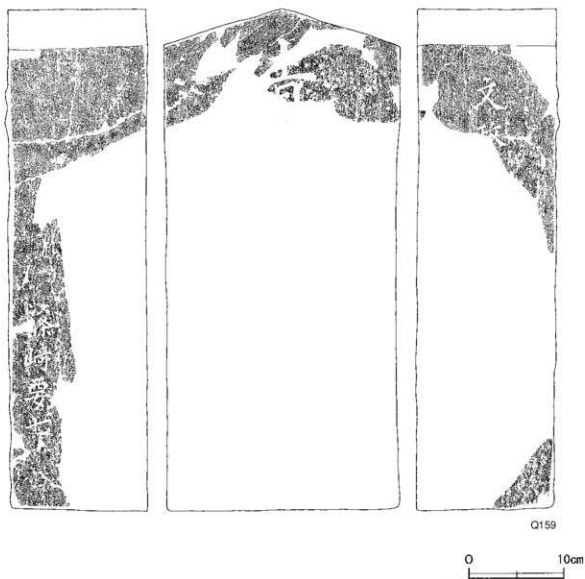
構築状況 21層からなり、旧表土を基部とし、周囲の旧表土を地山面まで掘り込んだ後、その土を掻き上げるようにして塚を構築している。黒褐色土・極暗褐色土・暗褐色土を主体としており、第4・6・8・9・13・14・16・19層はやや締まりに欠ける。第21層は旧表土で、第1層は表土である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	12	暗褐色	ローム粒子・砂粒微量
2	黒褐色	ローム粒子微量	13	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・砂粒微量
3	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒微量	14	極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・砂粒微量	15	暗褐色	ローム粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	16	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
6	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量	17	暗褐色	ロームブロック・砂粒微量
7	黒褐色	ローム粒子・砂粒微量	18	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
8	黒褐色	ロームブロック微量	19	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
9	極暗褐色	ローム粒子・砂粒微量	20	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
10	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量	21	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
11	極暗褐色	ローム粒子微量			

遺物出土状況 石材10点(石碑)が出土している。Q159は南側の塚表面から出土した細片が接合したもので、塚頂部にあった石碑が風化により壊れたと考えられる。本調査前、庚申塔1基が塚頂部に倒れた状態で残っており、本跡の東に位置する金比羅宮に移築されたことが聞き取り調査で明らかになっている。

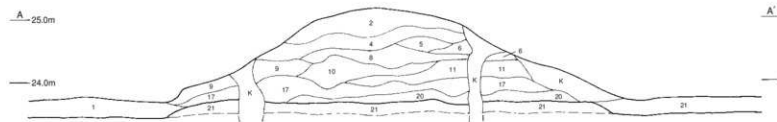
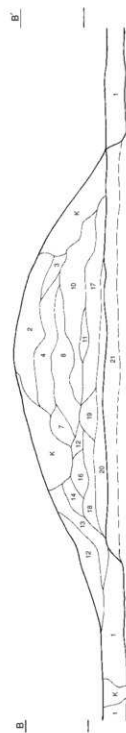
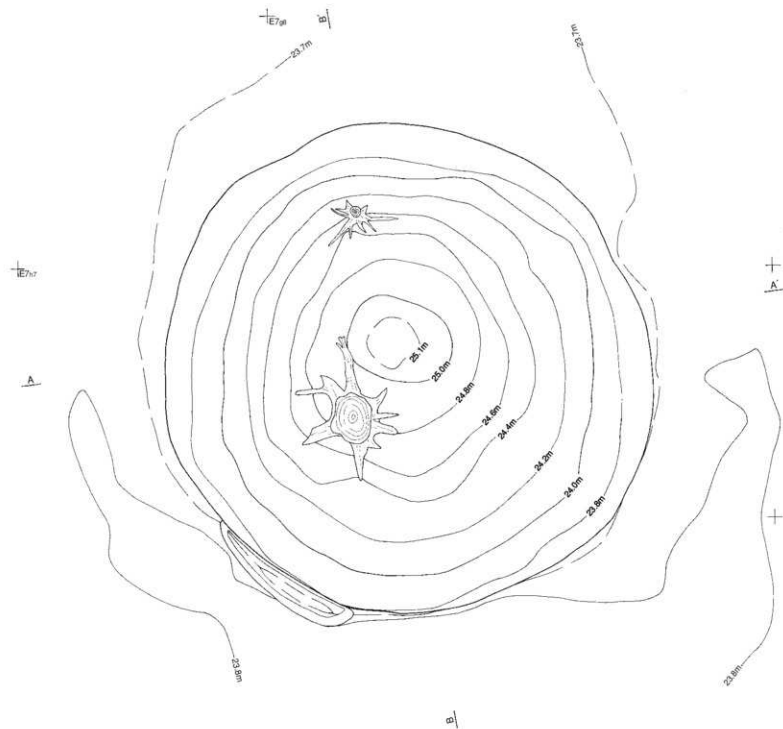
所見 時期は、出土遺物や石碑の紀年銘、塚の築造状況などから近世と考えられる。Q159は本来塚頂部にあったと考えられ、風化したため新たに移築した石碑を建立したものと考えられる。



第224図 第3号塚出土遺物実測図

第3号塚出土遺物観察表 (第224図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q159	石碑	53.0	25.0	15.0	(7370.0)	花崗岩	青・「藤崎堂七」〔文政〕	確認図	



第225图 第3号塚实测图

表14 塚一覧表

№号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	奥幅 (m) (長径×短径) (長軸×短軸)	深さ (cm)	主な出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
1	D 7g8~D 7j9	N-85°-W	隅丸方形	6.78×6.72	177	土師器、古銭、貝	
2	E 7a8~E 7b9	N-85°-W	隅丸方形	7.34×6.94	136	土師器、陶器、石材	
3	E 7g7~E 7i9	N-0°	円形	7.80×7.72	152	石材	

(2) 溝跡

第34号溝跡 (第226図, 付図)

位置 調査区東部のE 7h0区を中心に、標高23.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南側は調査区域外へ延びており、北側は削平を受けているため全体を確認することはできなかったが、ほぼ南北方向に長さ25mほどがくの字状に確認されている。E 7h0区では緩やかに屈曲し、北側は南北方向、南側は南西方向に向いている。上幅0.40~0.82m、下幅0.20~0.55m、深さ8~15cmである。断面形は逆台形状で、底面は部分的に硬化しており、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

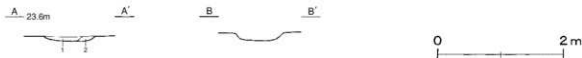
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況と含有物から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒色 ローム粒子微量

2 褐色 ロームブロック少量

所見 部分的に硬化面が確認されており、地境などの区画溝として掘削された後、道路として使用されていた可能性が想定される。また、本跡の方向及び緩やかな彎曲は、西隣に位置する塚3基と関連すると想定される。時期は、塚が近世に比定されており、近世までは機能していたと考えられる。



第226図 第34号溝跡実測図

(3) 墓坑

第2号墓坑 SK631 (第227図)

位置 調査区北部寄りのE 2e9区、標高20.3mの浅い谷へ向かう南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第7号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.76m、短軸1.20mの隅丸長方形で、長軸方向はN-18°-Wである。深さは21cm、底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量

4 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量

2 褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量

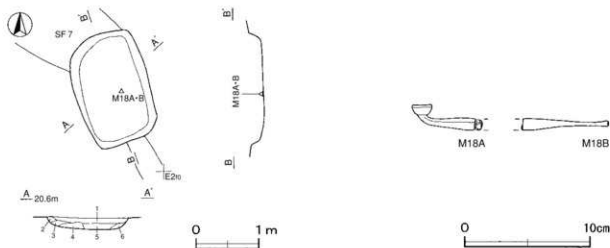
5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量

6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 金属製品1点（煙管）のほかに、混入した弥生土器片1点、古墳時代の土師器片1点も出土している。M18は北寄りの底面から出土している。

所見 時期は、出土遺物から17世紀代と考えられる。



第227図 第2号墓坑・出土遺物実測図

第2号墓坑出土遺物観察表（第227図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M18A	煙管	(5.6)	1.5	2.0	(5.6)	銅	煙首 曲反し急	底面	PL55
M18B	煙管	(6.9)	0.9	0.9	(3.1)	銅	吸口	底面	PL55

7 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期を判断することができなかった溝跡28条、道路跡5条、炭焼遺構13基、土坑224基、ピット84基、不明遺構1基が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 溝跡

今回の調査で、時期不明の溝跡が28条確認されている。以下、遺構の特徴について記述し、併せて一覧表を掲載する。平面図は遺構全体図で紹介する。

第4号溝跡（第228図、付図）

位置 調査区南東部のI5a0区を中心に、標高25.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第12・13・21号溝跡を掘り込み、第2・7・10号地下式坑、第633号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一部は削平を受けているため全体を確認することはできなかったが、長さ131.2mが確認された。北部は緩やかに彎曲し、概ね南北方向を向いている。H6h3区で南西方向に転じ、70mほど直線的に延びている。南部では2か所で鉤の手状に曲がっている。上幅0.56～1.66m、下幅0.28～0.78m、深さ10～16cmである。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

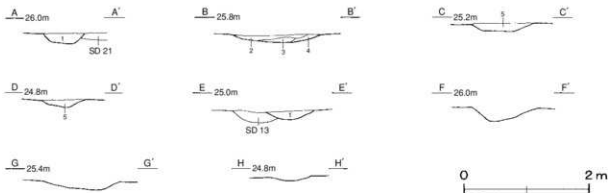
覆土 5層に分層される。大部分が単一層で堆積状況は不明であるが、一部ブロック状の堆積状況を示すことから人為的に埋め戻されたと考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック微量		

遺物出土状況 古墳時代の土師器片6点、須恵器片1点が出土しているが、埋没過程で混入したと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 平坦地に位置しており、一定方向への傾斜も認められないことから地境の溝の可能性が高い。また、隣接する第31号溝跡と走行方向が類似していることから、地境の変動などにより第31号溝跡へ掘り直したとも考えられるが明確ではない。重複関係から古墳時代から平安時代の間に構築されたと考えられるが、明確な時期は不明である。



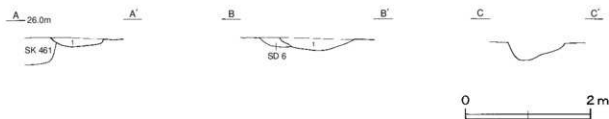
第228図 第4号溝跡実測図

第5号溝跡 (第229図、付図)

位置 調査区中央部西側のH4h1区を中心に、標高25.7mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第6号溝跡・第461号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 H4h1区を中心に、長さ18.6mが確認された。北側はH4i1区付近で東方向に屈曲し、南側の大部分は南西方向を向いている。上幅0.66~0.88m、下幅0.18~0.38mで、深さ13~26cmである。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。



第229図 第5号溝跡実測図

覆土 単一層であるため、堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

所見 時期は、遺物が出土していないため不明である。

第6号溝跡 (第230図, 付図)

位置 調査区中央部西寄りのG 3h9区を中心に、標高25.8mの台地縁部に位置している。

重複関係 第49・50号住居跡、第8・9号溝跡を掘り込み、第5号溝、第455号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 削平により確認できない部分もあるが、概ね北西から南東方向の長さ52mほどが確認され、H 4 c3区付近でくの字状に屈曲して北東から南東方向を向いている。上幅0.26~1.38m、下幅0.10~0.68mで、深さ12~36cmである。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層されるが、それぞれに単一層であるため、堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子微量

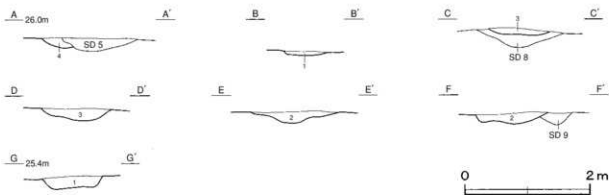
2 灰 褐色 ローム粒子少量

3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

4 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片22点、平安時代の土師器片1点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、判断できる遺物が出土していないため不明である。



第230図 第6号溝跡実測図

第7 A号溝跡 (第231図, 付図)

位置 調査区中央部のG 5i0区を中心に、標高24.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第62号住居跡、第7 B・17号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東側は調査区外へ延びているため全体を確認することはできないが、ほぼ東西方向の長さ32.8mが確認され、G 5h8区でわずかに屈曲している。上幅0.44~1.20m、下幅0.28~0.60mで、深さ10~16cmである。断面形は逆台形状及びU字状を呈しており、底面の一部に硬化面が確認された。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。含有物と堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

2 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

所見 第7 B号溝跡を掘り込んでいるが、屈曲状況も似ていることから第7 B号溝跡と同様の掘削目的があったと考えられるが明確ではない。また、部分的に底面に硬化面が確認されていることから、溝としての機能が失われた時期に道路として使用されていたと想定される。時期は、遺物が出土していないため不明である。

第7 B号溝跡 (第231図, 付図)

位置 調査区中央部のG 5 i2区を中心に、標高24.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第47・60・62号住居跡を掘り込み、第7 A号溝、第508号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 ほぼ東西方向に長さ79.9mが確認された。東はやや蛇行しており、西は南西方向へ屈曲している。上幅0.42~1.66m、下幅0.18~0.94mで、深さ9~19cmである。断面形は逆台形状及びU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層される。一部はブロック状の堆積状況を示すことから人為堆積と考えられるが、その他は単一層のため堆積状況は不明である。

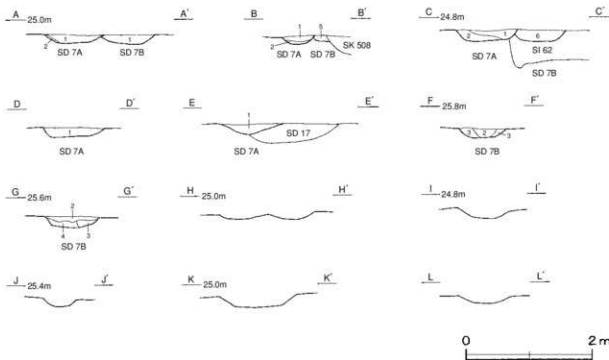
土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

- 4 黒 褐色 ロームブロック微量
- 5 暗 褐色 ローム粒子少量
- 6 黒 褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片16点、平安時代の土師器片1点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土遺物が細片であり判断が難しいため不明である。



第231図 第7 A・7 B号溝跡実測図

第8号溝跡 (第232図, 付図)

位置 調査区中央部のG 4j1区を中心に、標高25.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第49号住居跡を掘り込み、第6号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東西方向にはほぼ直線的に長さ17.8mが確認された。上幅0.80～1.40m、下幅0.40～0.55mで、深さ25～30cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

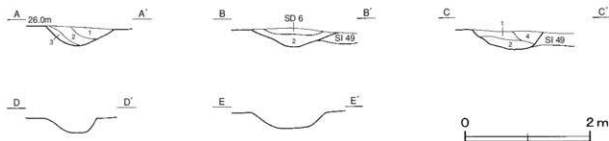
覆土 4層に分層される。堆積状況から南側から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|--------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子微量 | 4 黒暗褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 古墳時代の土師器片53点が出土しているが、出土は主に西側であることから第49号住居跡の土師器が本跡構築の際に掘り起こされて混入したと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土遺物が細片であり判断が難しいため不明である。



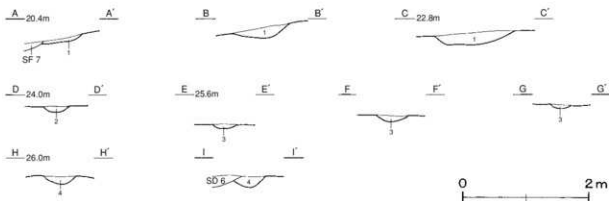
第232図 第8号溝跡実測図

第9号溝跡 (第233図, 付図)

位置 調査区中央部から北西よりのF 3g7区を中心に、標高25.7mの台地平坦部から20.2mの谷部にかけて位置している。

重複関係 第6号溝、第3・7号道路に掘り込まれている。

規模と形状 F 3b7～F 3f7区、F 3j8～G 3a8区の削平が激しく確認できなかった。また、G 3c8～G 3f9区においても土取りされているため検出できなかった。検出されたのは、ほぼ南北方向に長さ108mほどで、



第233図 第9号溝跡実測図

E 3j6区を起点に南東方向へ屈曲している。上幅0.13～0.62m、下幅0.05～0.26mで、深さ5～16cmである。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層されるが、いずれも単一層のため堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒 褐色	ローム粒子少量	3 黒 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2 黒 褐色	ロームブロック微量	4 暗 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片1点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土遺物からの判断が難しいため不明である。

第10号溝跡 (第234図、付図)

位置 調査区中央部のG 5f1区を中心に、標高25.0mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 東西方向に長さ72.8mが確認され、わずかに彎曲している。上幅0.46～1.10m、下幅0.16～0.37mで、深さ30～46cmである。断面形は逆台形状及びU字状を呈しており、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

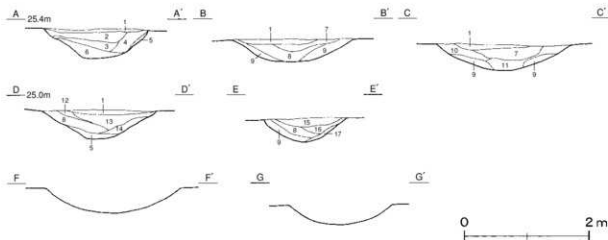
覆土 17層に分層される。西側一部分はレンズ状の堆積状況を示す自然堆積であるが、その他はブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	10 褐色	ローム粒子少量
2 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	11 暗 褐色	ロームブロック微量
3 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	12 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	13 暗 褐色	ローム粒子微量
5 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	14 暗 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
6 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	15 黒 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
7 褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	16 灰 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
8 暗 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	17 ぶい褐色	ローム粒子少量
9 明 褐色	ローム粒子中量		

遺物出土状況 古墳時代の土師器片1点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 地境の溝と考えられるが明確ではない。時期は、出土遺物からの判断が難しいため不明である。



第234図 第10号溝跡実測図

第11号溝跡 (第235図, 付図)

位置 調査区南東部のH5h8区を中心に、標高25.0mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第12号溝跡を掘り込んでいる。

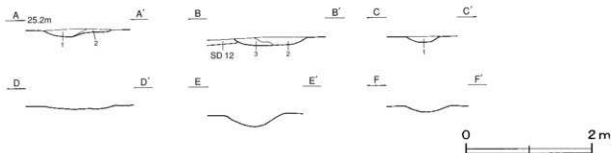
規模と形状 はほぼ北東から南西方向に長さ38.5mが確認された。北東部の先端は南東方向へ屈曲し、南西部は蛇行している。上幅0.48~1.60m、下幅0.23~0.82mで、深さ5~24cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層されるが、堆積状況と含有物から自然堆積と考えられる。

土層解説	
1 黒褐色	ロームブロック微量
2 暗褐色	ローム粒子少量
3 褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片14点、平安時代の土師器片3点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土遺物からの判断が難しいため不明である。



第235図 第11号溝跡実測図

第12号溝跡 (第236図, 付図)

位置 調査区中央部東寄りのH5e9区を中心に、標高24.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第63号住居跡を掘り込み、第4・11・13号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東側は調査区外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、ほぼ北東から南西方向に長さ40.2mが確認された。南西部では南東方向へ屈曲しており、その他はわずかに蛇行している。上幅0.58~1.18m、下幅0.20~0.70mで、深さ18~32cmである。断面形は逆台形状及びU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。含有物と堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説	
1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック微量
4 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片21点、平安時代の土師器片3点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土遺物からの判断が難しいため不明である。

第13号溝跡 (第236図, 付図)

位置 調査区中央部東寄りのH5e9区を中心に、標高24.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第63号住居跡、第12号溝跡を掘り込み、第9号地下式坑、第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東側は調査区外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、ほぼ北東から南西方向に長さ37.8mが確認され、わずかに蛇行している。上幅0.42～1.78m、下幅0.14～0.72mで、深さ6～29cmである。断面形は逆台形状及びU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層されるが、それぞれに単一層であるため、堆積状況は不明である。

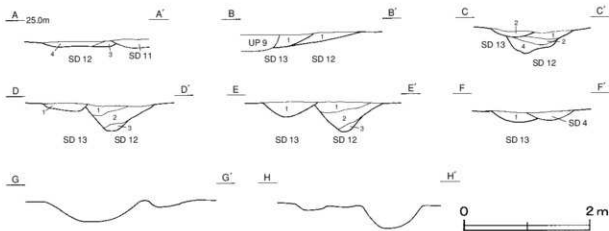
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片4点、平安時代の土師器片1点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 重複関係から古墳時代以降に構築されたと考えられるが、出土遺物からの判断が難しいため明確な時期は不明である。



第236図 第12・13号溝跡実測図

第14号溝跡 (第237図, 付図)

位置 調査区中央部東寄りのH5b8区を中心に、標高24.9mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北東から南西方向にはほぼ直線的に長さ22.7mが確認された。上幅0.47～0.92m、下幅0.14～0.48mで、深さ6～28cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。含有物と堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

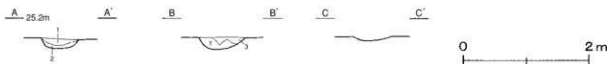
1 黒褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック微量

3 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片2点、平安時代の土師器片2点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 西側に位置する第15号溝跡と平行しており、関連性も想定されるが明確ではない。時期は、出土遺物からの判断が難しいため不明である。



第237図 第14号溝跡実測図

第15号溝跡 (第238図, 付図)

位置 調査区中央部東寄りのH5b6区を中心に、標高24.9mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北東から南西方向にはほぼ直線的に長さ13.2mが確認された。上幅0.32~0.70m、下幅0.12~0.38mで、深さ11~16cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。含有物と堆積状況から自然堆積と考えられる。

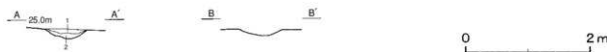
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片1点、古墳時代の土師器片1点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 東側に位置する第14号溝跡と平行しており、関連性も想定されるが明確ではない。時期は、出土遺物からの判断が難しいため不明である。



第238図 第15号溝跡実測図

第16号溝跡 (第239図, 付図)

位置 調査区南西部のI4i2区を中心に、標高25.8mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 東西方向に直線的に長さ14.3mが確認された。上幅2.00~2.34m、下幅0.13~0.26mで、深さ86~107cmである。断面形は葉研状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 13層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

8 明褐色 ローム粒子多量

2 暗褐色 ローム粒子微量

9 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

3 褐色 ロームブロック少量

10 暗褐色 ローム粒子、炭化粒子微量

4 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

11 褐色 ロームブロック中量

5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

12 褐色 ローム粒子多量

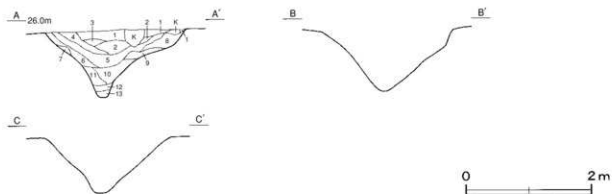
6 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

13 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

7 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片8点、平安時代の土師器片1点が出土しているが、埋め戻しの過程で混入したと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 本跡は、他の多くの溝跡と形状が異なり葉研状で深く、低地への降り口に位置している。時期は、出土遺物からの判断が難しいため不明である。



第239図 第16号溝跡実測図

第17号溝跡 (第240図、付図)

位置 調査区北東部及び東部のE 5i6区を中心に、標高24.1~24.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第84・86・113号住居跡を掘り込み、第7 A号溝、第625・629号土坑に掘り込まれている。第1号溝跡と接しているが新旧関係は不明である。

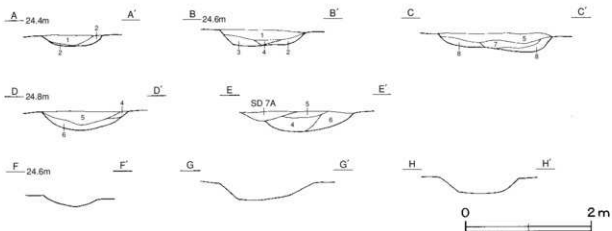
規模と形状 南部は第7 A号溝に、北西部は第625号土坑にそれぞれ掘り込まれており、全体を確認することはできなかったが、長さ82mほどが確認された。北部はほぼ東西方向に緩やかに彎曲している。中間部は北西から南東方向で40mほどが直線的に伸びている。F 5a9区付近でさらに緩やかに彎曲し、概ね南北方向を軸としている。上幅0.58~1.54m、下幅0.18~0.96m、深さ6~38cmである。断面形は逆台形状及びU字状、一部は皿状である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 8層に分層される。含有物と堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	6 暗褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子少量	8 暗褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片90点、平安時代の土師器片11点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。



第240図 第17号溝跡実測図

所見 溝は調査区域外にも続いており、G6h1区に繋がると考えられる。北側部分では、第23号溝跡と走行方向が類似している点から、地境の変動などにより本跡へ掘り直したとも考えられるが明確ではない。重複関係から古墳時代以降に構築されたと考えられるが、明確な時期は不明である。

第20号溝跡 (第241図, 付図)

位置 調査区南西部のI4e5区を中心に、標高26.0mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 北西から南東方向に直線的に長さ13.6mが確認された。上幅0.57~1.03m, 下幅0.34~0.80mで、深さ11~17cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

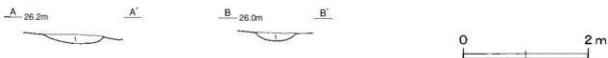
覆土 単一層のため堆積状況は不明である。

土層解説

I 黒 褐色 土 土ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片2点、平安時代の土師器片1点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土遺物からの判断が難しいため不明である。



第241図 第20号溝跡実測図

第21号溝跡 (第242図, 付図)

位置 調査区南部のI4i8区、標高25.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東から南西方向に長さ2.9mが確認され、緩やかに彎曲している。上幅0.73~0.80m, 下幅0.21~0.30mで、深さ9~12cmである。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層のため堆積状況は不明である。

土層解説

I 黒 褐色 土 炭化粒子少量、土ロームブロック微量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片7点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 重複関係から第4号溝より古いと考えられるが、出土遺物からの判断が難しいため明確な時期は不明である。



第242図 第21号溝跡実測図

第22号溝跡 (第243図, 付図)

位置 調査区北東部のD5i5区を中心に、標高24.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第91～93号住居跡を掘り込んでいる。

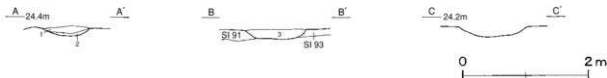
規模と形状 北側は調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、北東から南西方向に直線的に長さ23.3mが確認された。上幅0.53～1.13m、下幅0.18～0.65mで、深さ16～18cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。含有物と堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説		
1	暗褐色	ローム粒子少量
2	褐色	ロームブロック少量
3	黒褐色	ローム粒子微量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片26点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 重複関係から平安時代以降に構築されたと考えられるが、出土遺物からの判断が難しいため明確な時期は不明である。



第243図 第22号溝跡実測図

第23号溝跡 (第244図, 付図)

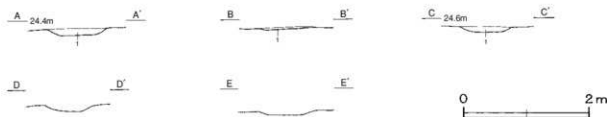
位置 調査区中央部のE4j5区を中心に、標高24.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第87・98・101・102・111号住居跡を掘り込み、第6号炭焼遺構に掘り込まれている。

規模と形状 削平を受けているため全体を確認することはできなかったが、長さ49.3mにわたって部分的に確認された。東部は南東から北西方行に延び、E4g7区で南西方向に屈曲して直線的に延びている。南部でも南に緩やかに曲っており、断続的に硬化面だけが確認された。上幅0.52～1.01m、下幅0.18～0.68m、深さ4～12cmである。また、確認された硬化面の幅は16～42cmである。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層のため堆積状況は不明である。

土層解説		
1	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量



第244図 第23号溝跡実測図

遺物出土状況 古墳時代の土師器片50点、平安時代の土師器片5点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 平坦地に位置しており、一定方向への傾斜も認められないことから地境の溝の可能性が高い。また、北部で隣接する第17号溝跡と走行する方向が同じで、屈曲位置や緩やかな彎曲も類似しており、地境の変動などにより第17号溝跡へ掘り直したとも考えられるが明確ではない。重複関係から古墳時代以降に構築されたと考えられるが、出土遺物からの判断が難しいため明確な時期は不明である。

第24号溝跡 (第245図, 付図)

位置 調査区北部のE 4e2区を中心に、標高24.1mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 ほぼ東西方向に直線的に長さ5.3mが確認された。上幅0.52~0.66m、下幅0.22~0.34mで、深さ9cmほどである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。含有物と堆積状況から自然堆積と考えられる。



土層解説	
1 暗褐色	ロームブロック少量
2 褐色	ローム粒子中量

所見 時期は、遺物が出土していないため不明である。

第245図 第24号溝跡実測図

第26号溝跡 (第246図, 付図)

位置 調査区北部のE 3a6区を中心に、標高23.7mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第121号住居跡を掘り込んでいる。

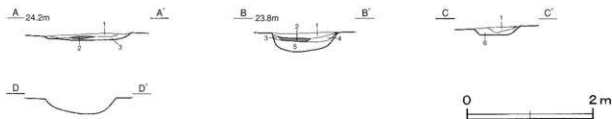
規模と形状 北側は調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、長さ43.3mのくの字状に確認された。掘り込みと硬化面が確認され、上幅0.41~1.03m、下幅0.18~0.83m、深さ11~29cmで、確認された硬化面の幅は0.38~0.80mである。E 3a6区付近で屈曲しており、南東方向へ延びた部分では硬化面は確認されていない。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層される。堆積状況と含有物から自然堆積と考えられる。第2層は硬化面の土層である。

土層解説	
1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子中量
4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 褐色	ロームブロック少量
6 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片7点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 覆土の堆積状況から、溝としての機能が失われ埋没する過程で覆土第2層に相当する面を道路として使用していたことが想定される。しかし、南東側には硬化面が確認されていないため部分的に道路として使用していたと考えられる。重複関係から古墳時代以降に構築されたと考えられるが、出土遺物からの判断が難しいため明確な時期は不明である。



第246図 第26号溝跡実測図

第27号溝跡 (第247図, 付図)

位置 調査区北西部のD2J7区を中心に、標高21.5mの北西緩斜面部に位置している。

重複関係 第7号道路に掘り込まれている。

規模と形状 ほぼ北西から南東方向に長さ10.8mが確認され、北西部で緩やかに彎曲している。上幅0.54~0.94m、下幅0.26~0.65mで、深さ15~35cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

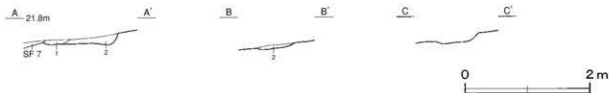
覆土 2層に分層される。含有物と堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、遺物が出土していないため不明である。



第247図 第27号溝跡実測図

第28号溝跡 (第248図, 付図)

位置 調査区北西部のF3d5区を中心に、標高24.2~24.5mの台地縁辺部に位置している。

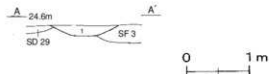
重複関係 第107号住居跡、第29号溝跡、第3号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 両端とも削平のため全体を確認することはできなかったが、曲線状に長さ39.0mが確認された。上幅0.48~1.18m、下幅0.12~0.83m、深さ13~16cmである。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層のため堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量



第248図 第28号溝跡実測図

第29号溝跡 (第249図, 付図)

位置 調査区北西部のF3c3区を中心に、標高23.4~24.5mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第28号溝、第3号道路に掘り込まれている。

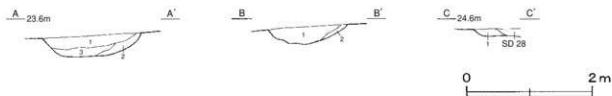
規模と形状 ほぼ南北方向に直線的に長さ31.3mが確認された。上幅0.32~0.88m、下幅0.10~0.44mで、深さ10~33cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。含有物と堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量 | | |

所見 北側へ傾斜していることから排水溝の可能性も想定されるが、遺構全体が確認されていないため明確ではない。重複関係から第28号溝、第3号道路より以前であるが、遺物が出土していないため明確な時期は不明である。



第249図 第29号溝跡実測図

第30号溝跡 (第250図, 付図)

位置 調査区北西部のE3c2区を中心に、標高22.2mの西緩斜面部に位置している。

重複関係 第4号道路跡を掘り込んでいる。

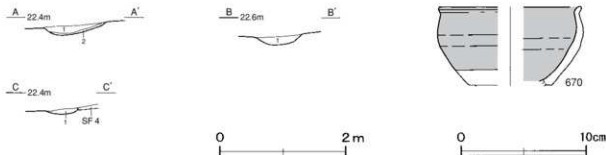
規模と形状 両端とも削平のため全体を確認することはできなかったが、E3c2区を中心に31.4mのL字状に確認された。北部は北東方向に延び、D3j1区で南東方向に屈曲して延びている。上幅0.46~1.01m、下幅0.15~0.48m、深さ8~19cmである。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。含有物と堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 2 褐色 | ロームブロック少量 |
|-------|-----------|------|-----------|

遺物出土状況 陶器片1点が確認面から出土している。



第250図 第30号溝跡・出土遺物実測図

所見 両端部の標高が高く、地形的にも排水溝としての機能は想定しにくい。遺構全体が確認されていないため明確ではない。時期は、出土遺物からの判断が難しいため不明である。

第30号溝跡出土遺物観察表 (第249図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	境况	手法の特徴	出土位置	備考
670	陶器	天目茶碗	[11.1]	(6.3)	-	砂粒	明赤褐	良好	内面及び外面中位敷地	確認面	37% 面行・光澤否

第31号溝跡 (第251図, 付図)

位置 調査区南東部の I 6 a2区を中心に、標高24.8~25.1mの台地縁辺部に位置している。

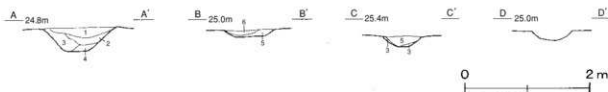
規模と形状 両端とも削平のため全体を確認することはできなかったが、I 6 a2区を中心とする61.7mのくの字状に確認された。北部にはほぼ直線的に南北方向に延び、H 6 i4区付近で南西方向に屈曲して延びている。上幅0.52~1.22m、下幅0.24~0.56m、深さ7~36cmである。断面形は逆台形状及びU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層される。一部にブロック状の堆積状況を示すことから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|----------|-----------|--------|----------------|
| 1 暗 褐色 | ロームブロック微量 | 4 暗 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 極 暗 褐色 | ローム粒子微量 | 5 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗 褐色 | ローム粒子少量 | 6 暗 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

所見 平坦地に位置しているため地境の溝の可能性が高いが、遺構全体が確認されていないため明確ではない。隣接する第4号溝跡と走行方向が同じで、屈曲位置や緩やかな彎曲も類似していることから、地境の変動などにより本跡へ掘り直したとも考えられるが明確ではない。時期は、遺物が出土していないため不明である。



第251図 第31号溝跡実測図

第33号溝跡 (第252図, 付図)

位置 調査区北東部の E 5 c0区を中心に、標高24.4mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第78号住居跡を掘り込んでいる。

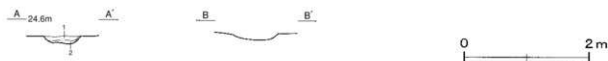
規模と形状 西側は削平のため全体を確認することはできなかったが、東西方向にほぼ直線的に長さ8.3mが確認された。上幅0.44~0.66m、下幅0.11~0.48m、深さ10~12cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。含有物と堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------|--------|-----------|
| 1 暗 褐色 | ローム粒子微量 | 2 暗 褐色 | ロームブロック微量 |
|--------|---------|--------|-----------|

所見 平坦地に位置しているため地境の溝の可能性が高いが、遺構全体が確認されていないため明確ではない。時期は、遺物が出土していないため不明である。



第252図 第33号溝跡実測図

第36号溝跡 (第253図、付図)

位置 調査区南東部のH6j6区を中心に、標高24.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第66号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南部は調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、ほぼ南北方向に直線的に長さ15.8mが確認された。上幅1.40~2.00m、下幅0.28~0.60m、深さ18~23cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層のため堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

所見 平坦地に位置しているため地境の溝の可能性が高いが、遺構全体が確認されていないため明確ではない。時期は、重複関係から古墳時代以降に構築されたと考えられるが、遺物が出土していないため不明である。



第253図 第36号溝跡実測図

表15 溝一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m)				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				確認長	上幅	下幅	深さ (cm)					
4	G 5j1-I 4g7	N-38°-E N-128°-E	曲線状 くの字状	131.2	0.56~1.66	0.28~0.78	10~16	緩斜	平坦	人為	土師器、須恵器	SD12・13・21→ 本跡→UP2・7・10、 SK633
5	H 4k3-I 4h1	N-22°-E N-90°-E	くの字状	18.6	0.66~0.88	0.18~0.38	13~26	緩斜	平坦	不明		SD6, SK461→本跡
6	F 3i3-H 4h1	N-14°-E N-39°-W	くの字状	(52.0)	0.26~1.38	0.10~0.68	12~36	緩斜	平坦	不明	土師器	SI49・50, SD8・9→ 本跡→SD5, SK455
7A	G 5h7-G 6j2	N-68°-E N-107°-E	ほぼ直線状	(32.8)	0.44~1.20	0.28~0.60	10~16	緩斜	平坦・ 皿状	自然		SI62, SD7B・17→本跡
7B	G 4j4-G 6j2	N-22°-E N-86°-E N-66°-E	くの字状 ほぼ直線状	79.9	0.42~1.66	0.18~0.94	9~19	緩斜	平坦・ 皿状	不明	土師器	SI47・60・62→本跡 →SD7A, SK508
8	G 3j9-G 4j3	N-88°-E	直線状	17.8	0.80~1.40	0.40~0.55	25~30	緩斜	皿状	自然	土師器	SI49→本跡→SD6
9	E 248-G 3g9	N-15°-W N-55°-W	くの字状	(108.0)	0.13~0.62	0.05~0.26	5~16	緩斜	平坦	不明	土師器	本跡→SD6, SF3・7
10	G 4f3-G 6g1	N-86°-E N-98°-E	ほぼ直線状	72.8	0.46~1.10	0.16~0.37	30~46	緩斜	平坦・ 皿状	自然・ 人為	土師器	

番号	位置	方向	形状	規模 (m)				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				確認長	土幅	下幅	深さ (cm)					
11	H 510 - I 5b5	N-48°-W N-134°-W	ほぼ直線状	38.5	0.48-1.60	0.23-0.82	5-24	硬斜	崖状	自然	土師器	SD12→本跡
12	H 6b3 - H 517	N-125°-W	くの字状 ほぼ直線状	(40.2)	0.58-1.18	0.20-0.70	18-32	硬斜	崖状・ 平垣	自然	土師器	SI 63→本跡→SD 4・ 11-13
13	H 6b3 - H 5b6	N-125°-W	ほぼ直線状	(37.8)	0.42-1.78	0.14-0.72	6-29	硬斜	崖状・ 平垣	不明	土師器	SI 63, SD 12→本跡→ SD 4, UP 9
14	G 519 - H 5d7	N-30°-E	直線状	22.7	0.47-0.92	0.14-0.48	6-28	硬斜	崖状	自然	土師器	
15	G 516 - H 5c5	N-27°-E	直線状	13.2	0.32-0.70	0.12-0.38	11-16	硬斜	崖状	自然	縄文土器, 土師器	
16	I 3b0 - I 414	N-97°-E	直線状	14.3	2.00-2.34	0.13-0.26	86-107	外傾	平垣	人為	土師器	
17	E 4f7 - G 611	N-124°-W N-179°-W N-155°-E	ほぼ弧状	82.2	0.58-1.54	0.18-0.96	6-38	硬斜	平垣・ 崖状	人為	土師器	SI 84・86・113→本跡→ SD 7 A, SK 625・629, SD1(新旧不明)
20	I 4e4 - I 4g7	N-126°-E	直線状	(13.6)	0.57-1.03	0.34-0.80	11-17	硬斜	崖状	不明	土師器	
21	I 418	N-23°-E	直線状	2.9	0.73-0.80	0.21-0.30	9-12	硬斜	平垣	不明	土師器	本跡→SD 4
22	D 5g6 - E 5a3	N-139°-W	直線状	(23.3)	0.53-1.13	0.18-0.65	16-18	硬斜	崖状	自然	土師器	SI 91-93→本跡
23	E 4g6 - F 5a6	N-17°-W N-63°-W N-140°-E	くの字状	(49.3)	0.52-1.01	0.18-0.68	4-12	硬斜	平垣	不明	土師器	SI 87・98・101・102・111→ 本跡→第6号民家遺構
24	E 4e2 - E 4e3	N-79°-E	直線状	5.3	0.52-0.66	0.22-0.34	9	硬斜	平垣	自然		
26	D 319 - E 3e9	N-36°-W N-155°-E	くの字状	(43.3)	0.41-1.03	0.18-0.83	11-29	硬斜	平垣	自然	土師器	SI 121→本跡
27	D 216 - E 2a8	N-34°-W	ほぼ直線状	(10.8)	0.54-0.94	0.26-0.65	15-35	硬斜	崖状	自然		本跡→SF 7
28	F 3a8 - F 3b4	N-10°-W N-30°-E	曲線状	(39.0)	0.48-1.18	0.12-0.83	13-16	硬斜	平垣	不明		SI 107, SD 29, SF 3→ 本跡
29	E 3b2 - G 3c6	N-15°-W N-35°-W N-10°-E	直線状	(31.3)	0.32-0.88	0.10-0.44	10-33	硬斜	崖状	自然		本跡→SD 28, SF 3
30	D 2j0 - E 3f4	N-26°-W N-115°-W	L字状	(31.4)	0.46-1.01	0.15-0.48	8-19	硬斜	平垣	自然	陶器	SF 4→本跡
31	H 6c4 - I 5g7	N-30°-E N-48°-E	くの字状	(61.7)	0.52-1.22	0.24-0.56	7-36	硬斜	平垣・ 崖状	人為		
33	E 5e9 - E 6c1	N-86°-W	直線状	(8.3)	0.44-0.66	0.11-0.48	10-12	硬斜	崖状	自然		SI 78→本跡
36	H 6b6 - I 6b7	N-19°-W	直線状	15.8	1.40-2.00	0.28-0.60	18-23	硬斜	崖状	不明		SI 66→本跡

(2) 道路跡

今回の調査で時期不明の道路跡が5条確認されている。以下、遺構の特徴について記述し、併せて一覧表を掲載する。平面図は遺構全体図で紹介する。

第2号道路跡 (第254図, 付図)

位置 調査区南西部のI 3e9区を中心に、標高25.6mほどの台地縁部に位置している。

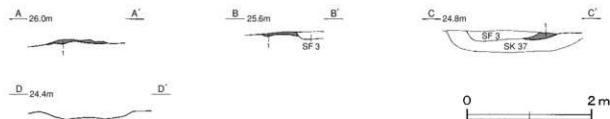
重複関係 第37号土坑を掘り込み、第3号道路に掘り込まれている。

規模と形状 蛇行する部分も見られるが、ほぼ南北方向に長さ78.4mにわたって部分的に硬化面が確認された。硬化面の幅は0.16~1.16mである。

覆土 単一層で、硬化面の層である。

土層解説

1 に近い褐色 ロームブロック多量



第254図 第2号道路跡実測図

所見 大部分は第3号道路と重複しているが、J3d9区で明確に走行方向が分かっている。南西側の低地への道路と考えられる。時期は、遺物が出土していないため不明である。

第3号道路跡 (第255図, 付図)

位置 調査区西部の13a8区を中心に、標高25.6mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第103・104号住居跡、第9・29号溝跡、第2号道路跡、第37号土坑を掘り込み、第28号溝、第35・47・48・54・476~478・480・603・605・606・630号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 ほぼ南北方向に長さ212.2mにわたって掘り込みと硬化面が確認された。掘り込みの上幅は0.40~2.72m, 下幅0.08~2.24m, 深さ24~68cmで、確認された硬化面の幅は0.16~1.22mである。断面形は逆台形状及びU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

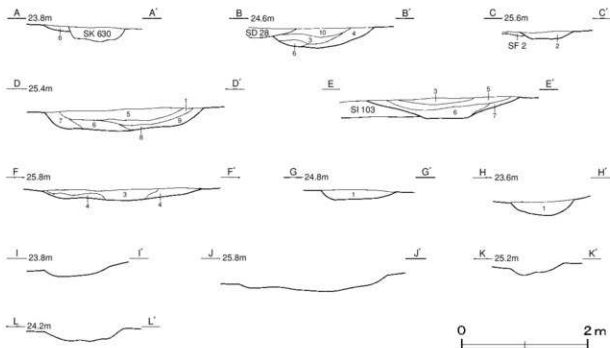
覆土 10層に分層される。含有物や堆積状況などから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量	6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子少量	7 褐色 ローム粒子中量・焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量	8 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量・焼土粒子微量
4 褐色 ローム粒子少量	9 褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
5 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	10 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 古墳時代の土師器片11点が出土しているが、埋没過程で流れ込んだと考えられる。遺物は細片のため図示できない。

所見 台地の縁辺部に南北に縦断する溝状の道路跡である。南側に位置する「ナギ山遺跡」にまで続く道路跡で、「茨城県教育財団文化財調査報告第277集 ナギ山遺跡2」(2007年3月)で報告された長さを合わせると、250mを超える長さとなる。走行方向は当遺跡の西側を流れる桂川の支流と桂川が合流する低地へと直線的に



第255図 第3号道路跡実測図

延びており、台地上に分布する集落の人々が利用したものと考えられる。時期は、遺物が出土していないため不明である。

第4号道路跡 (第256図、付図)

位置 調査区北西部のE3e3区を中心に、標高22.1mの西緩斜面部に位置している。

重複関係 第30号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北西から南東方向に長さ23.3mにわたって硬化面だけが確認された。E3e4区付近で緩やかに彎曲し、確認された硬化面の幅は0.34～1.16mである。

覆土 単一層で、硬化面の土層である。

土層解説

1 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

所見 台地上と谷部を結ぶ道路と考えられるが明確ではない。時期は、遺物が出土していないため不明である。



第256図 第4号道路跡実測図

第5号道路跡 (付図)

位置 調査区北西部のD2g8区を中心に、標高23.0mの南西緩斜面部に位置している。

重複関係 第7号道路に掘り込まれている。

規模と形状 東西方向に長さ36.8mにわたって硬化面だけが確認された。確認された硬化面の幅は0.26～0.54mである。

所見 本跡の北側には谷部へ向かう現代の道路があり、それと平行して確認されていることから、西側の谷部への道路と考えられる。時期は、中世に比定されている第7号道路に掘り込まれており、中世以前と考えられるが明確ではない。

第8号道路跡 (付図)

位置 調査区北西部のE3g8区を中心に、標高23.8mの北西緩斜面部に位置している。

規模と形状 北西から南東方向に長さ36.5mにわたって直線的に硬化面だけが確認された。確認された硬化面の幅は0.52～0.66mである。

遺物出土状況 古墳時代の土師器片5点が確認面から出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 台地上と谷部を結ぶ道路と考えられるが明確ではない。時期は、出土遺物での判断が難しいため不明である。

表16 道路跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模 (m)				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				確認長	上幅	下幅	深さ (cm)					
2	H 3f9-I 3f9	N-8°-E	ほぼ直線状	78.4	—	0.16~1.16	—	—	平坦	—	SK 37→本跡→SF 3	
3	E 3e6~J 3g8	N-9°-E	ほぼ直線状	212.2	0.40~2.72	0.08~2.24	24~68	傾斜	平坦・ 皿状	自然	土師器	SI 103-104, SD 9・29, SF 2, SK 37→本跡→SD 28, SK 35・47・48・54・476~478・480・603・605・606・630
4	E 3b2-E 3h3	N-23°-W N-8°-E	くの字状	23.3	—	0.34~1.16	—	—	平坦	—	—	本跡→SD 30
5	D 2g3-D 3h3	N-136°-E	直線状	36.8	—	0.26~0.54	—	—	平坦	—	—	本跡→SF 7
8	E 3d6-F 4a2	N-136°-E	直線状	36.5	—	0.52~0.66	—	—	平坦	—	土師器	—

(3) 炭焼遺構

第1号炭焼遺構 SK 82 (第257図)

位置 調査区南部のI 4i4区、標高25.8mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長軸2.18m、短軸1.42mの隅丸長方形で、長軸方向はN-68°-Wである。深さは57cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、炭化材や焼土が確認された。

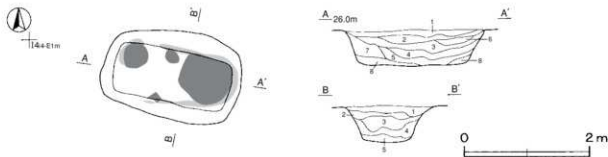
覆土 8層に分層される。一部レンズ状の堆積状況を示すが、含有物などから人為堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量	5	暗褐色	炭化物中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	6	暗褐色	炭化物・ローム粒子微量
3	黒褐色	炭化物中量、ローム粒子少量	7	褐色	炭化物・ローム粒子中量
4	褐色	炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量	8	暗褐色	炭化物・ロームブロック少量

遺物出土状況 底面から炭化材が出土しているほかに、混入した古墳時代の土師器片2点が出土している。

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。



第257図 第1号炭焼遺構実測図

第2号炭焼遺構 SK 427 (第258図)

位置 調査区中央部のH 4b5区、標高25.3mの台地平坦部に位置している。

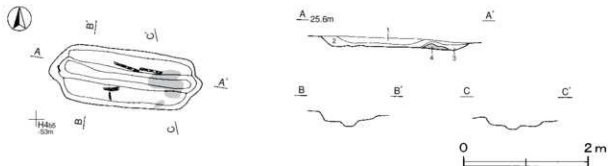
規模と形状 上部は削平されたと考えられ、底面近くだけが確認された。長軸2.43m、短軸0.91mの不整長方形で、長軸方向はN-85°-Wである。深さは21cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、長軸方向に沿って中央部に通気溝が設けられており、底面や壁に炭化材や焼土が確認された。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|---------|-----------------|
| 1 暗褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 3 暗褐色 | 焼土粒子少量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 濃い赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 |

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。



第258図 第2号炭焼遺構実測図

第3号炭焼遺構 SK 439 (第259図)

位置 調査区中央部のH 4 d4区。標高25.3mの台地平坦部に位置している。

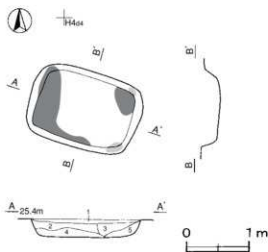
規模と形状 上部は削平されたと考えられ、底面近くだけが確認された。長軸1.80m、短軸1.24mの隅丸長方形で、長軸方向はN-73°-Wである。深さは29cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、底面や東壁に炭化材や焼土が確認されている。

覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示すことから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 炭化粒子中量、焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。



第259図 第3号炭焼遺構実測図

第4号炭焼遺構 SK 514 (第260図)

位置 調査区中央部のG 5 b1区。標高24.7mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.19m、短軸1.96mの隅丸長方形で、長軸方向はN-33°-Eである。深さは92cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、長軸方向に沿って中央部に溝が設けられている。

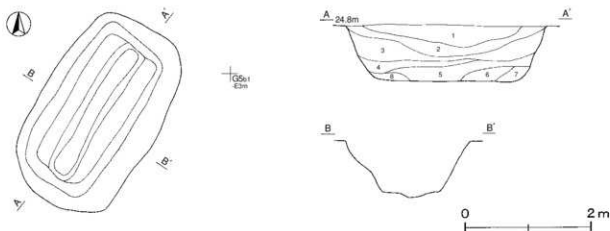
覆土 8層に分層される。第1～5層はレンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。その他の層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量	5 褐色	炭化物多量、焼土粒子中量、ロームブロック少量
2 褐色	炭化粒子中量、ロームブロック・炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
3 明褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	7 褐色	炭化物多量、焼土粒子中量、ローム粒子少量
4 褐色	炭化材・焼土粒子中量、ローム粒子少量	8 明褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 混入した古墳時代の土師器片が3点出土している。

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。

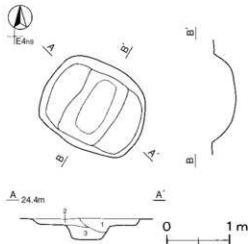


第260図 第4号炭焼遺構実測図

第5号炭焼遺構 SK 689 (第261図)

位置 調査区北部のE 4h9区、標高24.1mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 上部は削平されたと考えられ、底面近くだけが確認された。長軸1.69m、短軸1.41mの隅丸長方形で、長軸方向はN-60°-Wである。深さは35cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は平坦であるが、中央部に短軸方向に溝が設けられている。



第261図 第5号炭焼遺構実測図

覆土 3層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒色	炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子微量
3 暗褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 混入した古墳時代の土師器片が3点出土している。

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。

第6号炭焼遺構 SK 702 (第262区)

位置 調査区中央部西側のF3i0区、標高25.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第23号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.26m、短軸1.69mの隅丸長方形で、長軸方向はN-36°-Eである。深さは63cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、長軸方向に沿って中央部に溝が設けられている。

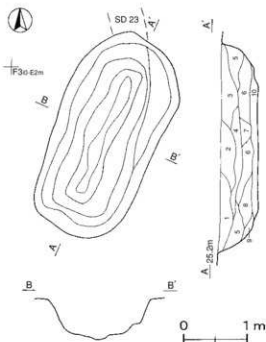
覆土 10層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1	暗褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子微量
2	暗褐色	炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子微量
3	黒褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量
4	黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
6	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
7	暗褐色	炭化物・ローム粒子微量
8	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
9	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子中量
10	暗褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子少量

遺物出土状況 混入した古墳時代の土師器片が3点出土している。

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。



第262区 第6号炭焼遺構実測図

第7号炭焼遺構 SK 706 (第263区)

位置 調査区中央部西側のF3g2区、標高24.4mの台地縁辺の北西緩斜面部に位置している。

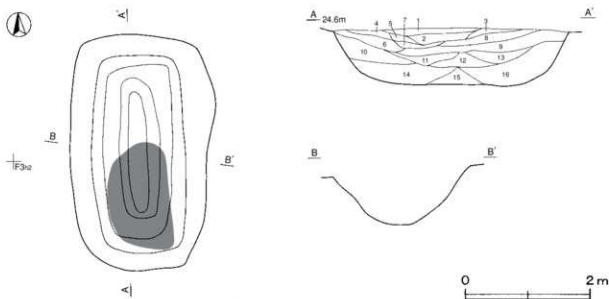
規模と形状 長軸3.74m、短軸2.31mの隅丸長方形で、長軸方向はN-3°-Eである。深さは87cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は皿状で、長軸方向に沿って中央部に通気溝のような溝が設けられている。また、底面に炭化物が確認されている。

覆土 16層に分層される。ブロック状の堆積状況を示すことから人為堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	炭化物・焼土粒子少量、ロームブロック微量	9	褐色	炭化物・ローム粒子少量
2	赤褐色	焼土ブロック多量、炭化物中量、ロームブロック少量	10	褐色	炭化物・ローム粒子中量
3	黒褐色	炭化物・焼土粒子少量、ローム粒子微量	11	黒褐色	炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量
4	暗褐色	炭化物・ローム粒子少量、ロームブロック微量	12	褐色	ロームブロック中量、炭化物少量
5	暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量	13	褐色	ローム粒子中量、炭化物微量
6	黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	14	黒褐色	炭化物多量、焼土ブロック・ローム粒子中量
7	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量	15	褐色	炭化物中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
8	暗褐色	炭化粒子中量、ロームブロック少量、焼土ブロック微量	16	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。



第263図 第7号炭焼遺構実測図

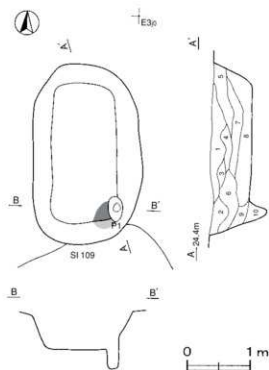
第8号炭焼遺構 SK718 (第264図)

位置 調査区北部西寄りのE3j9区、標高24.2mの浅い谷へ向かう北西緩斜面部に位置している。

重複関係 第109号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.84m、短軸1.75mの隅丸長方形で、長軸方向は $N-1^{\circ}-W$ である。深さは58cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、炭化物や焼土が確認されている。

ピット 平面形は長径39cm、短径23cmの楕円形で、深さは30cmである。性格は不明である。



第264図 第8号炭焼遺構実測図

覆土 10層に分類される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化物中量、焼土粒子少量、ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 炭化物・ローム粒子微量
- 4 黒褐色 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 5 暗褐色 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 暗褐色 炭化物少量、ロームブロック微量
- 7 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子微量
- 8 暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 9 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 10 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 混入した弥生時代の土器片が2点出土している。

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。

第9号炭焼遺構 SK 723 (第265図)

位置 調査区中央部のE 3 b6区、標高23.2mの浅い谷へ向かう南西緩斜面部に位置している。

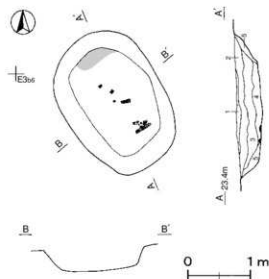
規模と形状 上部は削平されたと考えられ、底面近くだけが確認された。長軸2.79m、短軸1.61mの隅丸長方形で、長軸方向はN-31°-Wである。深さは38cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、炭化材や焼土が確認されている。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-------|------------------------|
| 1 | 暗褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 |
| 4 | 褐色 | 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 5 | にぶみ褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量 |

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。



第265図 第9号炭焼遺構実測図

第10号炭焼遺構 SK 729 (第266図)

位置 調査区北部西寄りのE 3 b3区、標高22.5mの浅い谷間の西緩斜面部に位置している。

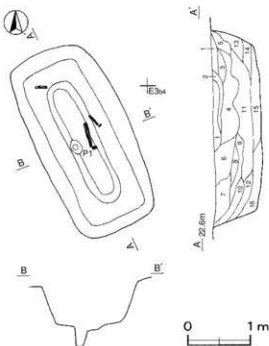
規模と形状 長軸3.10m、短軸1.53mの隅丸長方形で、長軸方向はN-25°-Wである。深さは77cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、長軸方向に沿って中央部に溝が設けられており、炭化材が確認されている。

ピット 平面形は長径23cm、短径19cmの楕円形で、深さは33cmである。性格は不明である。

覆土 16層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | |
|----|-----|----------------------------|
| 1 | 暗褐色 | 炭化粒子多量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 5 | 褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 8 | 灰褐色 | 粘土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 9 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 10 | 褐色 | 炭化物・ローム粒子微量 |
| 11 | 褐色 | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 12 | 褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 13 | 明褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 14 | 灰褐色 | 炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 15 | 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 16 | 灰褐色 | 炭化粒子多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量 |



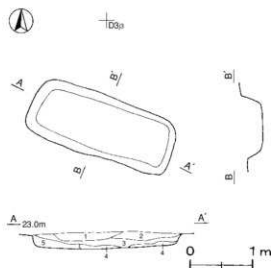
第266図 第10号炭焼遺構実測図

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。

第11号炭焼遺構 SK 731 (第267図)

位置 調査区北部西寄りのD3j2区、標高22.8mの浅い谷の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 上部は削平されたと考えられ、底面近くだけが確認された。長軸2.38m、短軸0.98mの隅丸長方形で、長軸方向はN-72°-Wである。深さは28cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、覆土最下層で炭化物が多量に確認された。



第267図 第11号炭焼遺構実測図

覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示すことから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化物少量 |
| 3 | 暗褐色 | 炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 4 | 黒色 | 炭化物多量、ロームブロック中量 |
| 5 | 黒色 | 炭化物多量、ロームブロック少量、焼土粒子微量 |

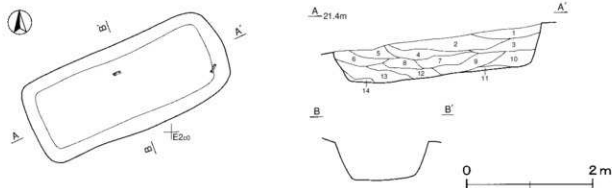
所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。

第12号炭焼遺構 SK 733 (第268図)

位置 調査区北部西寄りのE2b9区、標高21mほどの浅い谷の南西緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸3.30m、短軸1.47mの隅丸長方形で、長軸方向はN-67°-Eである。深さは62cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、炭化材が確認された。

覆土 14層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。



第268図 第12号炭焼遺構実測図

土層解説

1	黒褐色	炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量
2	黒褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子少量
3	黒褐色	炭化物・ローム粒子微量
4	暗褐色	炭化物少量、ローム粒子微量
5	黒褐色	炭化物少量、ローム粒子微量
6	暗褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量
7	黒褐色	炭化物少量、ローム粒子微量

8	暗褐色	炭化物少量、ロームブロック微量
9	暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
10	暗褐色	ロームブロック・炭化物少量
11	暗褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子微量
12	暗褐色	炭化物中量、ロームブロック少量
13	黒褐色	炭化物多量、ローム粒子少量
14	黒褐色	炭化物中量、ローム粒子微量

遺物出土状況 底面から炭化材が出土したほかに、混入したと考えられる陶器片1点が出土している。遺物は細片のため図示できない。

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、陶器片が混入していることなどから近世以降と考えられる。

第13号炭焼遺構 SK749 (第269図)

位置 調査区中央部のE2a9区、標高21.5mの浅い谷の南西緩斜面部に位置している。

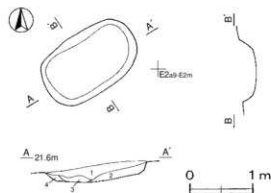
規模と形状 上部は削平されたと考えられ、底面近くだけが確認された。長軸1.63m、短軸0.97mの隅丸長方形で、長軸方向はN-59°-Eである。深さは24cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

覆土 4層に分層される。ブロック状の堆積状況を示すことから人為堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2	暗褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量
3	褐色	炭化物・ローム粒子中量、焼土粒子少量
4	褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量

所見 調査前の状況が山林であり、原木の入手は容易であったと考えられる。時期を特定できる遺物は出土していないため明確ではないが、近世以降と考えられる。



第269図 第13号炭焼遺構実測図

表17 炭焼遺構一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
1	I 4 14	N-68°-W	隅丸長方形	2.18×1.42	57	緩斜	平坦	人為	土師器	
2	H 4 b5	N-85°-W	不整形長方形	2.41×0.90	21	緩斜	平坦	自然		
3	H 4 d4	N-73°-W	隅丸長方形	1.80×1.18	24	緩斜	平坦	人為		
4	G 5 b1	N-33°-E	隅丸長方形	3.20×1.95	90	緩斜	平坦	自然・人為	土師器	
5	E 4 b9	N-60°-W	隅丸長方形	1.68×1.41	35	緩斜	平坦	人為	土師器	
6	F 3 i0	N-36°-E	隅丸長方形	3.26×1.70	63	外傾	平坦	人為	土師器	SD23→本跡
7	F 3 g2	N-3°-E	隅丸長方形	3.75×2.28	85	緩斜	皿状	人為		
8	E 3 j9	N-1°-W	隅丸長方形	2.87×1.74	59	緩斜	平坦	人為	弥生土器	SI109→本跡
9	E 3 b6	N-31°-W	隅丸長方形	2.29×1.60	37	外傾	平坦	自然		
10	E 3 b3	N-25°-W	隅丸長方形	3.06×1.50	73	外傾	平坦	人為		

番号	位置	長軸方向	平面図	規模 (m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
11	D 3 j 2	N-72°-W	隅丸長方形	2.36×1.00	31	外傾	平坦	人為		
12	E 2 b 9	N-67°-E	隅丸長方形	3.31×1.46	60	外傾	平坦	人為	陶器	
13	E 2 a 9	N-59°-E	隅丸長方形	1.62×0.98	25	緩斜	平坦	人為		

(4) 土坑

今回の調査で、土坑236基が確認されており、出土遺物や遺構の形状などから時期や性格が明らかない土坑(弥生時代3基、古墳時代2基、平安時代2基、中世5基)はそれぞれの時代の項で記載している。

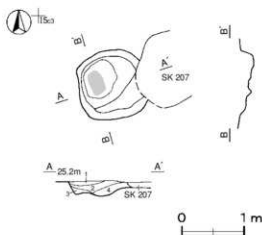
ここでは、出土遺物がなく時期や性格が不明である中でも特徴的な5基を記述し、残りの219基については一覧表を掲載するとともに、平面図は遺構全体図で紹介する。

第206号土坑 (第270図)

位置 調査区南部のI 5c3区、標高25.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第207号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため全体を確認できなかったが、長軸1.10m、短軸1.00mの方形と考えられ、長軸方向はN-10°-Wである。深さは21cm、底面は凸凹で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面の一部が火を受けて赤変している。



第270図 第206号土坑実測図

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|------|--------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 |
| 4 | 褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |

遺物出土状況 古墳時代の土師器片2点が出土している。

所見 時期は、特定できる遺物が出土していないため不明である。底面が赤変している状況から火葬土坑の可能性も想定できるが、骨片や骨粉が確認されていないため明確ではない。

第392号土坑 (第271図)

位置 調査区南部のH 4 f 9区、標高24.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸1.72m、短径1.27mの隅丸長方形で、長軸方向はN-61°-Wである。深さは28cm、底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面から壁にかけて粘土が貼られている。

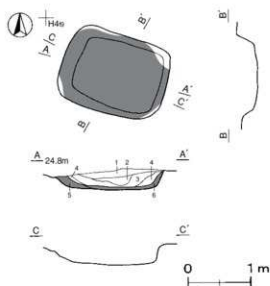
覆土 6層に分層される。第1～4層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。第5・6層は底面や壁に貼られた粘土の層である。

土層解説

- | | | |
|---|--------|--------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量、粘土ブロック微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック微量 |
| 3 | 暗褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量 |
| 4 | 暗褐色 | ロームブロック少量、粘土粒子微量 |
| 5 | にぶい黄褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子微量 |
| 6 | にぶい黄褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子微量 |

遺物出土状況 古墳時代の土師器片1点が出土している。

所見 時期は、特定できる遺物が出土していないため不明である。底面に粘土が貼られており、墓坑や水溜遺構の可能性もあるが明確ではない。



第271図 第392号土坑実測図

第418号土坑 (第272図)

位置 調査区中央部西寄りのH4c7区、標高25.0mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.52m、短径1.08mの楕円形で、長径方向はN-7°-Wである。深さは18cm、底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

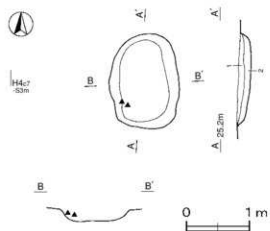
覆土 2層に分層される。馬歯の出土状況や含有物などから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|---------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 馬歯が9点出土している。

所見 時期は、馬歯以外の遺物が出土していないため不明である。馬を埋葬した墓坑の可能性もあるが、馬歯以外の骨片や骨粉が確認されていないため明確ではない。



第272図 第418号土坑実測図

第467号土坑 (第273図)

位置 調査区中央部西寄りのH3d9区、標高25.3mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径1.80m、短径1.74mの不整形形で、長径方向はN-90°である。深さは31cm、底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面や壁の一部が火を受けて赤変している。

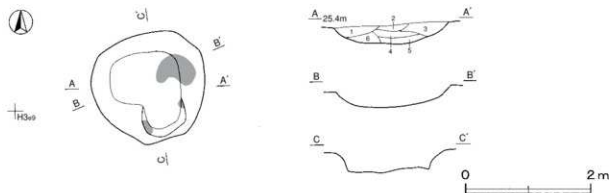
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|----------------------|---|-----|--------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 | 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | 炭化物少量、ローム粒子微量 | 5 | 黒褐色 | 炭化物・焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 6 | 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 |

遺物出土状況 古墳時代の土師器片1点、平安時代の土師器片2点が出土している。

所見 時期は、特定できる遺物が出土していないため不明である。底面から壁にかけて赤変していることから火葬土坑の可能性も想定できるが、骨片や骨粉が確認されていないため明確ではない。



第273図 第467号土坑実測図

第480号土坑 (第274図)

位置 調査区北部西寄りのG3g8区、標高25.4mの台地縁辺部に位置している。

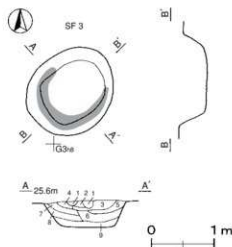
重複関係 第3号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.47m、短径1.30mの楕円形で、長径方向はN-46°-Eである。深さは42cm、底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。南東側底面から壁面にかけて火を受けて赤変している。

覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1	暗褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	6	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
2	暗褐色	炭化物・ローム粒子微量	7	暗褐色	炭化物・ローム粒子少量
3	暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	8	褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
4	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	9	暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量
5	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量			



第274図 第480号土坑実測図

遺物出土状況 古墳時代の土師器片6点、平安時代の土師器片2点が出土している。

所見 時期は、特定できる遺物が出土していないため不明である。底面から壁にかけて赤変していることから火葬土坑の可能性も想定できるが、骨片や骨粉が確認されていないため明確ではない。

表18 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長径×短径) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
34	J 3 f 9	N-42°-E	楕円形	0.90×0.68	9	緩斜	平坦	人為		
35	J 3 f 8	N-74°-W	不整形円形	1.52×1.19	12	緩斜	平坦	人為		SF3→本跡
36	J 4 e 1	N-61°-W	不整形円形	1.43×0.87	9	緩斜	凸凹	不明	土師器	
37	J 3 d 9	N-81°-W	楕円形	2.11×1.06	30	緩斜	平坦	人為	土師器	本跡→P79→SF3
39	J 4 e 1	N-31°-W	隅丸長方形	1.02×0.92	15	緩斜	平坦	不明	土師器	
40	J 3 d 0	N-86°-E	楕円形	1.25×0.78	41	緩斜	皿状	人為	土師器	
41	J 3 d 0	N-18°-W	長方形	1.41×1.09	18	緩斜	平坦	人為	土師器	
42	J 4 c 1	N-23°-E	楕円形	2.26×1.55	116	外傾	平坦	人為	土師器	
43	J 4 e 1	N-63°-E	不整形長方形	1.11×0.79	17	緩斜	平坦	不明		
44	J 4 c 1	N-0°	長楕円形	1.50×0.58	37	直立	平坦	不明		
45	J 4 d 2	N-0°	円形	0.98×0.98	17	緩斜	皿状	不明		SK46→本跡
46	J 4 d 2	N-80°-E	[楕円形]	(1.22)×0.86	40	外傾	平坦	人為		本跡→SK45
47	J 3 d 9	N-8°-E	楕円形	0.62×0.55	9	緩斜	皿状	不明	土師器	SF3→SK48→本跡
48	J 3 d 9	N-86°-E	[長方形]	(0.92)×0.68	8	緩斜	平坦	不明		SF3→本跡→SK47
49	J 3 d 9	N-90°	楕円形	1.02×0.81	22	外傾	平坦	不明		
50	J 3 c 9	N-90°	隅丸長方形	1.08×0.86	26	緩斜	平坦	不明		
51	J 3 c 9	N-90°	隅丸方形	0.92×0.81	22	緩斜	平坦	不明		
52	J 3 c 0	N-88°-W	長方形	1.48×1.15	30	緩斜	平坦	人為		
53	J 3 c 0	N-90°	方形	1.10×1.07	81	垂直	平坦	人為	土師器、土師質土器	
54	J 3 a 9	N-7°-E	長楕円形	1.66×0.76	24	外傾	平坦	人為		SF3→本跡
56	I 3 j 0	N-5°-W	隅丸長方形	0.97×0.81	21	外傾	平坦	不明		
57	I 4 j 1	N-10°-W	隅丸長方形	1.12×0.94	20	緩斜	平坦	人為		
58	I 4 j 2	N-3°-E	隅丸台形	1.25×1.05	20	緩斜	平坦	人為		
63	J 4 a 2	N-8°-E	長楕円形	1.59×0.83	46	外傾	平坦	人為	土師器	
64	J 4 b 4	N-23°-W	不整形楕円形	0.92×0.72	10	外傾	平坦	人為		本跡→P83
67	J 4 b 4	N-26°-E	不整形楕円形	0.99×0.50	46	外傾	平坦	人為	土師器	本跡→P84
72	J 4 a 4	N-74°-E	楕円形	1.37×0.97	21	外傾	平坦	自然	土師器	
73	J 4 a 4	N-60°-W	楕円形	1.60×0.93	30	外傾	平坦	自然	土師器、土師質土器	
75	I 4 j 2	N-51°-W	楕円形	0.75×0.67	53	緩斜- 袋状	平坦	人為	土師器	
76	I 4 b 3	N-0°	長楕円形	0.95×0.45	30	外傾	平坦	人為	土師器	
77	I 4 g 3	N-0°	楕円形	0.80×0.68	36	緩斜	平坦	人為		
79	I 4 b 4	N-20°-E	不整形長方形	1.60×1.00	32	緩斜	平坦	人為		
80A	I 4 b 4	N-43°-W	楕円形	0.88×0.78	31	緩斜	平坦	不明	土師器	SK80B→本跡
80B	I 4 b 4	N-23°-E	隅丸台形	1.47×1.20	34	緩斜	平坦	人為	土師器	本跡→SK80A
86	J 4 a 6	N-27°-W	隅丸長方形	1.15×0.92	26	緩斜	平坦	人為	土師器	
87	J 4 a 7	N-33°-W	隅丸長方形	1.26×0.81	28	外傾	平坦	人為	土師器	
88	J 4 b 7	N-34°-W	楕円形	1.13×0.74	18	緩斜	平坦	人為		UP3→本跡
95	I 5 j 2	N-48°-E	隅丸長方形	1.65×1.43	19	緩斜	平坦	不明		
99	I 4 b 8	N-45°-W	不整形長方形	1.42×0.73	11	緩斜	平坦	人為	土師器	
100	I 4 a 9	N-41°-W	長楕円形	3.26×1.58	14	外傾	平坦	人為	土師器	
102	I 4 g 8	N-46°-E	隅丸長方形	3.14×1.94	22	外傾	平坦	人為	土師器	
120	I 4 b 5	N-45°-E	不整形円形	1.35×1.29	17	緩斜	平坦	人為		
121	H 4 j 4	N-48°-E	長方形	2.35×1.32	62	外傾	平坦	人為	土師器	SB4→本跡
124	H 4 j 4	N-10°-W	不整形長方形	1.47×0.68	77	垂直	平坦	人為		SB4→本跡

番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長径×短径) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
125	H 4 j 5	N-15°-W	長方形	1.09×0.53	40	垂直	平坦	人為		SD4→本跡
127	I 4 b 7	N-31°-W	隅丸長方形	1.19×0.62	16	外傾	皿状	人為		
128	I 4 b 5	N-23°-E	不整形円形	0.80×0.67	33	外傾	皿状	人為		
130	I 4 c 4	N-38°-E	楕円形	0.78×0.49	25	緩斜	皿状	人為		
132	I 4 c 6	N-45°-E	楕円形	1.01×0.58	43	外傾	皿状	人為	土師器	本跡→P63
133	I 4 b 6	N-48°-W	楕円形	1.12×0.69	44	外傾	皿状	人為		
136	I 4 c 7	N-51°-W	楕円形	0.89×0.55	30	外傾	平坦	人為		
142	I 4 e 9	N-50°-E	長方形	3.85×1.39	40	緩斜	平坦	人為	土師器	
143	I 5 g 1	N-90°	楕円形	2.64×2.14	15	外傾	平坦	人為	土師器	
148	I 5 i 3	N-15°-W	隅丸方形	0.90×0.90	32	緩斜	平坦	不明	土師器	
149	I 5 i 3	N-76°-E	隅丸方形	0.86×0.85	27	緩斜	皿状	人為	土師器	
162	I 5 e 0	N-41°-W	楕円形	1.85×1.33	35	緩斜	平坦	人為		
163	I 6 d 1	N-55°-W	楕円形	1.20×0.95	20	緩斜	平坦	人為		
166	I 6 e 3	N-59°-E	不整形円形	1.37×1.10	38	外傾	平坦	人為		
167	I 6 f 7	N-76°-W	不整形隅丸長方形	1.22×0.86	27	緩斜	平坦	人為		
198	I 5 e 2	N-15°-W	不整形長方形	1.11×0.80	12	緩斜	平坦	不明		
199	I 5 e 2	N-82°-E	不整形隅丸方形	1.35×1.25	34	緩斜	平坦	人為		
200	I 5 d 2	N-25°-E	不整形円形	0.91×0.55	30	外傾	皿状	人為		
201	I 5 d 3	N-32°-W	不整形円形	0.87×0.86	32	緩斜	平坦	人為	土師器	
206	I 5 c 3	N-10°-W	[長方形]	(1.10)×0.99	21	緩斜	凸凹	自然	土師器	本跡→SK207
207	I 5 c 3	N-45°-E	[楕円形]	(1.32)×1.14	10	緩斜	平坦	人為		SK206→本跡
209	I 5 a 4	N-0°	円形	1.12×1.11	10	緩斜	平坦	人為		
211	I 5 a 4	N-75°-W	隅丸長方形	1.30×1.14	50	直立	平坦	人為	土師器	
217	I 5 a 3	N-52°-W	長方形	1.07×0.82	21	外傾	平坦	人為		
218	I 5 a 3	N-70°-E	隅丸長方形	0.87×0.44	19	緩斜	平坦	人為		
220	I 4 a 9	N-80°-E	不定形	1.31×1.01	31	緩斜	平坦	人為		本跡→P61
221	I 4 a 0	N-70°-W	不定形	0.75×0.50	16	緩斜	平坦	不明		
226	H 4 i 0	N-31°-E	長楕円形	1.55×0.92	21	外傾	平坦	人為	土師器、陶器	
227	H 4 j 0	N-40°-W	楕円形	0.80×0.53	28	外傾	皿状	人為		
238	H 5 j 3	N-35°-E	隅丸長方形	1.20×0.86	50	外傾	平坦	人為	土師器	
243	H 5 j 5	N-0°	[不整形円形]	(0.91)×0.70	25	緩斜	平坦	不明		本跡→SK647
245	H 5 j 5	N-35°-E	隅丸長方形	2.08×0.97	19	緩斜	平坦	人為		
249	H 5 f 5	N-0°	楕円形	0.64×0.45	46	外傾	皿状	人為		
251	H 5 f 5	N-0°	不整形円形	0.90×0.71	13	緩斜	平坦	人為		SK252→本跡
252	H 5 f 5	N-68°-E	不整形円形	0.85×0.71	28	緩斜	平坦	不明		本跡→SK251
254	H 5 f 4	N-65°-E	不整形円形	1.05×0.84	25	緩斜	平坦	不明		
259	I 5 a 1	N-40°-E	長楕円形	0.83×0.41	54	外傾	平坦	人為		
262	H 5 j 1	N-86°-W	隅丸長方形	3.39×1.22	62	外傾	平坦	人為	土師器	
265	H 5 i 1	N-23°-E	隅丸長方形	1.72×1.45	38	外傾	平坦	人為	土師器	
267	H 4 i 0	N-50°-W	不整形円形	1.53×1.41	31	緩斜	平坦	人為	土師器	
270	H 5 i 4	N-60°-W	長楕円形	1.33×0.51	45	外傾	平坦	人為		
286	H 5 g 3	N-67°-E	隅丸台形	1.80×1.51	35	緩斜	皿状	人為		
287	H 5 g 6	N-76°-W	隅丸長方形	1.26×0.52	38	外傾	平坦	人為		
292	H 5 h 2	N-67°-E	不整形円形	1.00×0.57	32	外傾	皿状	人為		
297	H 4 g 9	N-65°-W	不整形円形	0.68×0.51	15	緩斜	平坦	人為		
298	H 4 g 8	N-48°-W	隅丸長方形	1.36×0.96	54	外傾	平坦	人為		

番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長径×短径/ 長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
299	H 5 e 4	N-44°-E	円形	0.70×0.64	38	外傾	皿状	人為		
301	H 5 e 4	N-0°	円形	0.98×0.96	22	緩斜	平坦	人為		
303	H 5 e 4	N-90°	円形	0.95×0.87	11	緩斜	平坦	不明		
304	H 5 e 3	N-0°	隅丸長方形	0.46×0.32	30	外傾	平坦	人為		
305	H 5 e 3	N-29°-W	隅丸長方形	0.99×0.84	24	外傾	平坦	人為		
306	H 3 f 3	N-90°	円形	0.74×0.70	23	緩斜	平坦	人為	本跡→SK307	
307	H 5 f 3	N-39°-E	円形	1.13×1.05	15	緩斜	平坦	不明	SK306→本跡	
308	H 5 f 3	N-25°-E	不整隅丸 長方形	1.99×1.25	59	外傾	平坦	人為		
310	H 5 f 3	N-90°	楕円形	0.63×0.38	21	外傾	皿状	人為		
312	H 5 e 2	N-23°-W	長楕円形	1.24×0.54	19	緩斜	凸凹	人為		
313	H 5 e 3	N-24°-W	隅丸長方形	0.88×0.51	16	外傾	平坦	人為		
316	H 5 d 3	N-46°-W	楕円形	1.29×1.00	22	緩斜	平坦	人為		
317	H 5 d 3	N-90°	円形	0.86×0.82	13	緩斜	平坦	不明		
321	H 5 d 3	N-60°-W	楕円形	0.82×0.73	21	外傾	平坦	不明		
329	H 5 b 3	N-72°-E	楕円形	2.50×1.73	18	緩斜	平坦	不明	土跡器	
332	H 4 d 0	N-38°-E	楕円形	1.69×1.53	49	外傾	平坦	人為	土跡器	
362	H 5 g 1	N-71°-W	楕円形	1.63×1.11	26	外傾	平坦	人為	土跡器	
363	H 5 f 1	N-36°-E	楕円形	1.13×0.89	13	緩斜	平坦	不明		
372	H 5 f 1	N-74°-E	不整円形	1.14×1.05	25	外傾	平坦	人為		
376	H 4 f 0	N-24°-E	隅丸長方形	1.14×0.99	18	外傾	平坦	人為		
380	H 5 e 1	N-62°-W	楕円形	1.19×1.08	10	緩斜	平坦	不明		
383	H 5 d 1	N-0°	隅丸方形	1.06×1.03	35	外傾	平坦	人為		
389	H 4 d 0	N-25°-W	楕円形	0.97×0.88	12	緩斜	平坦	人為		
390	H 4 e 9	N-12°-E	隅丸長方形	1.00×0.83	17	外傾	平坦	人為		
392	H 4 f 9	N-61°-W	隅丸長方形	1.72×1.27	28	緩斜	平坦	人為	土跡器	
396	H 4 f 7	N-31°-E	長方形	2.09×1.15	51	緩斜	平坦	人為		
398	H 4 e 7	N-31°-E	隅丸方形	1.44×1.44	31	緩斜	平坦	人為	土跡器	
408	H 4 c 7	N-0°	円形	1.32×1.20	18	緩斜	平坦	人為		
418	H 4 c 7	N-7°-W	楕円形	1.52×1.08	18	緩斜	平坦	人為	馬歯	
419	H 4 c 7	N-4°-E	隅丸長方形	1.54×0.90	14	緩斜	平坦	人為	土跡器	
429	H 4 b 4	N-67°-E	円形	1.00×0.94	27	緩斜	平坦	人為	土跡器	SK448→本跡
435	H 4 b 4	N-69°-W	隅丸長方形	1.12×0.78	12	緩斜	平坦	人為		
438	H 4 b 4	N-31°-W	隅丸長方形	1.47×0.97	23	緩斜	平坦	人為		
444	H 4 e 4	N-24°-E	楕円形	0.85×0.59	20	緩斜	平坦	人為		
445	H 4 e 4	N-9°-W	楕円形	1.20×1.05	23	緩斜	平坦	人為	土跡器	
448	H 4 b 4	N-66°-W	[楕円形]	(0.79)×0.48	11	外傾	平坦	人為		本跡→SK429
449	H 4 e 4	N-12°-W	隅丸方形	0.98×0.92	20	外傾	平坦	人為	土跡器	
450	H 4 e 4	N-0°	円形	1.09×1.03	27	緩斜	平坦	人為		
451	H 4 f 3	N-67°-E	楕円形	1.45×1.07	26	緩斜	平坦	人為	土跡器	
455	H 4 e 2	N-1°-E	不整円形	0.86×0.80	31	緩斜	皿状	人為	土跡器	SD6→本跡
456	H 4 f 3	N-0°	円形	1.20×1.12	42	外傾	平坦	人為		
459	H 3 j 9	N-35°-E	楕円形	1.14×0.89	28	緩斜	平坦	人為	土跡器	SI45→本跡
461	H 4 i 2	N-15°-E	[隅丸方形]	1.24×(0.91)	43	外傾	平坦	人為	土跡器	本跡→SD5
462	H 3 b 9	N-26°-W	楕円形	1.48×1.12	52	緩斜	平坦	人為		
463	H 3 i 9	N-83°-E	楕円形	0.86×0.54	20	外傾	平坦	人為	土跡器	
464	H 3 b 8	N-48°-E	円形	1.55×1.42	28	外傾	平坦	人為	礎	

番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長径×短径/ 長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
466	H 3 f9	N-7°-W	隅丸長方形	1.57×1.25	49	外傾	平坦	人為	土師器	
467	H 3 a9	N-90°	楕円形	1.80×1.74	31	緩斜	平坦	自然	土師器	
469	H 4 f1	N-71°-W	楕円形	1.42×1.20	40	外傾	平坦	人為	磁器	
470	H 4 f1	N-75°-W	不整形	1.25×1.15	22	緩斜	平坦	人為		
476	H 3 a8	N-12°-E	楕円形	1.35×0.91	17	緩斜	平坦	人為	土師器	SF3→本跡
477	G 3 j8	N-9°-E	楕円形	1.53×0.90	10	緩斜	平坦	不明		SF3→本跡
478	G 3 j8	N-57°-W	楕円形	1.40×1.18	20	緩斜	平坦	不明	縄文土器	SF3→SK605→本跡
480	G 3 g8	N-46°-E	楕円形	1.47×1.30	42	緩斜	平坦	人為	土師器	SF3→本跡
484	G 4 g3	N-28°-W	楕円形	0.79×0.70	23	外傾	平坦	不明		
493	G 4 e4	N-0°	円形	1.74×1.69	22	外傾	平坦	人為		
494	G 4 e4	N-0°	円形	0.64×0.63	10	外傾	平坦	不明		
495	G 4 b5	N-64°-E	円形	0.91×0.83	19	外傾	平坦	不明		
496	G 4 f7	N-49°-W	隅丸方形	1.44×1.43	51	外傾	平坦	人為		
498	G 4 g9	N-60°-E	楕円形	1.06×0.70	35	緩斜	平坦	人為	土師器	SI55→本跡
508	G 5 b8	N-26°-W	円形	1.03×1.00	28	緩斜	平坦	不明		SD7→本跡
530	G 4 d8	N-90°	隅丸方形	1.66×1.60	28	緩斜	平坦	人為		
558	H 5 i1	N-51°-E	隅丸長方形	0.67×0.49	21	外傾	平坦	人為		
572	I 4 f9	N-20°-W	楕円形	1.12×0.60	40	外傾	平坦	人為		
599	I 3 j0	N-22°-E	楕円形	0.84×0.66	10	緩斜	皿状	不明	土師器	
600	H 3 a9	N-15°-W	不整形楕円形	1.18×0.71	48	外傾	平坦	人為		
603	G 3 a8	N-16°-W	楕円形	1.74×1.10	56	緩斜	皿状	人為		SF3→本跡
605	G 3 j8	N-65°-E	楕円形	0.98×0.58	60	外傾	平坦	人為		SF3→本跡→SK 478
606	G 3 i8	N-65°-E	楕円形	1.12×0.60	40	外傾	平坦	人為		SF3→本跡
607	H 4 f1	N-46°-E	不整形楕円形	1.20×0.85	58	外傾	皿状	人為		
608	H 3 j9	N-49°-E	楕円形	0.93×0.75	56	緩斜	皿状	人為		SI45→SK609→本跡
609	H 3 j0	N-11°-E	楕円形	1.44×1.30	27	緩斜	平坦	不明		SI45→本跡→SK608
610	I 4 c1	N-30°-E	楕円形	0.85×0.61	30	緩斜	平坦	人為		
612	I 4 b6	N-6°-W	隅丸長方形	2.15×1.31	35	緩斜	平坦	人為		SI40→本跡
613	I 4 d0	N-0°	楕円形	1.68×1.52	53	緩斜	平坦	人為		
614	I 4 b7	N-47°-E	不整形	0.92×0.86	24	緩斜	平坦	不明		
615	I 4 b7	N-90°	円形	0.90×0.88	19	緩斜	平坦	自然		
616	I 4 f6	N-90°	不定形	1.90×1.30	44	緩斜	平坦	人為		
625	E 4 g6	N-35°-E	楕円形	1.18×0.98	32	緩斜	平坦	人為		SD17→本跡
626	E 4 f6	N-0°	楕円形	0.68×0.58	46	外傾	平坦	人為		SI113→本跡
627	D 4 j0	N-45°-W	楕円形	1.49×1.09	68	外傾	平坦	人為	土師器、磁器	
628	D 3 i4	N-50°-W	隅丸長方形	1.67×0.83	15	外傾	平坦	人為		
629	E 5 g1	N-55°-W	楕円形	1.34×1.06	42	緩斜	平坦	不明	土師器	SD1→本跡
630	E 5 j5	N-13°-E	楕円形	0.94×0.78	23	外傾	平坦	人為		SF3→本跡
632	D 5 i6	N-43°-W	楕円形	1.66×0.97	22	緩斜	平坦	人為		
633	J 4 a9	N-41°-W	楕円形	0.99×0.76	49	外傾	凸凹	人為	縄文土器	SD4→本跡
634	I 5 j2	N-64°-E	楕円形	0.88×0.72	34~ 59	外傾	凸凹	人為	土師器	
639	H 5 g2	N-52°-W	円形	0.80×0.75	34	外傾	皿状	人為		
640	H 5 j1	N-85°-W	隅丸長方形	0.75×0.55	12	緩斜	平坦	人為		
642	H 5 b3	N-21°-E	不整形隅丸 長方形	1.62×0.75	44	緩斜	平坦	人為		
643	H 5 j6	N-39°-E	隅丸長方形	3.48×1.08	51	外傾	平坦	人為	鉄滓	
647	H 5 i5	N-53°-W	楕円形	0.99×0.85	24	緩斜	皿状	人為		SK243→本跡

番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長径×短径/ 長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
648	H 5 e 1	N-25°-W	楕円形	1.25×1.11	13	緩斜	平坦	不明	土師器	
651	F 5 f 2	N-55°-W	隅丸長方形	1.64×1.08	21	緩斜	平坦	人為	土師器	
652	F 5 i 5	N-70°-E	楕円形	1.44×1.04	28	緩斜	平坦	人為		
654	F 5 f 5	N-50°-W	不整楕円形	1.63×1.17	30	緩斜	平坦	人為		
660	E 6 c 4	N-84°-W	楕円形	1.51×1.25	19	緩斜	平坦	人為		
662	D 5 b 8	N-78°-E	楕円形	1.36×1.18	10	緩斜	平坦	人為		
663	D 6 i 2	N-50°-E	長楕円形	2.32×0.50	16	緩斜	凸凹	人為	土師器	
665	D 5 b 6	N-50°-E	楕円形	1.80×1.45	34	外傾	平坦	人為	土師器	
666	D 5 i 6	N-0°	円形	1.67×1.56	22	緩斜	平坦	人為	土師器	
669	E 5 a 5	N-0°	円形	1.19×1.16	23	外傾	平坦	人為	土師器	
674	D 5 i 2	N-55°-W	楕円形	0.87×0.59	28	緩斜	平坦	人為	土師器	
676	E 4 e 0	N-0°	円形	1.75×1.69	15	緩斜	平坦	人為	土師器	
677	E 4 e 0	N-33°-W	楕円形	0.76×0.54	25	緩斜	平坦	人為	土師器	
679	E 5 e 1	N-2°-E	楕円形	1.18×0.87	17	緩斜	平坦	人為	土師器	
680	E 5 d 2	N-41°-E	長楕円形	0.57×0.29	15	緩斜	平坦	人為		
681	E 5 e 3	N-0°	円形	1.21×1.16	37	外傾	平坦	人為		
684	E 5 b 1	N-48°-W	隅丸長方形	1.47×1.16	32	緩斜	平坦	人為	土師器	
687	F 4 a 9	N-30°-E	隅丸長方形	1.32×0.91	18	緩斜	平坦	人為		
691	E 4 e 7	N-37°-E	奇形	0.90×0.80	14	緩斜	平坦	不明		
693	E 4 a 7	N-0°	円形	1.05×1.01	17	緩斜	平坦	人為	土師器	
694	E 4 j 7	N-42°-W	楕円形	1.42×1.14	11	緩斜	平坦	人為		
695	E 4 b 6	N-38°-E	隅丸台形	1.43×1.42	18	緩斜	平坦	人為	土師器	
698	F 4 b 7	N-0°	円形	1.04×0.98	61	外傾	平坦	人為	土師器	
699	F 4 d 8	N-0°	円形	0.80×0.73	15	緩斜	平坦	不明	土師器	
700	F 4 c 7	N-78°-W	楕円形	0.63×0.56	17	緩斜	平坦	人為		
701	F 4 g 6	N-4°-E	隅丸台形	1.46×1.32	22	緩斜	平坦	人為	土師器	
703	F 4 j 2	N-53°-E	楕円形	0.80×0.70	13	外傾	平坦	人為		
709	F 3 b 9	N-3°-W	隅丸長方形	1.48×0.80	14	緩斜	平坦	人為	土師器	
711	F 3 d 0	N-57°-E	長楕円形	1.95×0.90	11	緩斜	平坦	人為	弥生土器、土師器	
717	E 3 j 8	N-0°	円形	0.85×0.78	17	緩斜	平坦	人為		
725	E 3 c 5	N-28°-W	楕円形	1.54×1.13	36	緩斜	平坦	人為	土師器	
726	E 3 e 5	N-20°-W	楕円形	0.81×0.72	18	外傾	平坦	人為		
727	E 3 d 5	N-80°-W	円形	1.34×1.30	35	外傾	皿状	人為		
728	E 3 d 4	N-23°-W	楕円形	1.09×0.88	28	緩斜	皿状	人為		
732	D 3 b 2	N-90°	楕円形	1.08×0.97	19	外傾	平坦	人為	土師器	
738	E 5 a 6	N-2°-E	隅丸長方形	1.81×0.85	48	緩斜	平坦	人為	土師器	
746	E 3 b 8	N-9°-W	楕円形	0.88×0.52	25	外傾	平坦	人為		
753	F 4 a 0	N-73°-E	楕円形	0.79×0.56	28	緩斜	平坦	人為		
756	E 7 i 8	N-72°-W	不整楕円形	2.08×0.56	15	緩斜	平坦	人為	土師器	

(5) ビット

今回の調査で、調査区域全体から84基のビットが確認されている。それらはH4c5～H4j0区に27基、H5d3～H5i4区に26基、I5a1～I5b3区に14基と集中している。平面形は径17～69cmほどの円形または楕円形を呈しており、深さは11～76cmである。ビット5・25・41から古墳時代の土師器片がそれぞれ1点ずつ出土している以外は遺物が出土していない。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含み、若干の焼土粒子や炭化物も含まれている。色調は、暗褐色や極暗褐色、黒褐色を基調としており、大部分が単一層である。時期は、判断できる遺物が出土していないため不明である。また、ビットの配列に掘立柱建物跡、柵跡などの規則性がないためビットとして扱った。

以下、各ビットの一覧表を記載し、平面図は全体図で紹介する。

表19 ビット一覧表

番号	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ(cm)	番号	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ(cm)	番号	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ(cm)
1	円形	0.57×0.56	58	29	円形	0.25×0.25	27	57	円形	0.55×0.54	50
2	楕円形	0.59×0.45	36	30	楕円形	0.48×0.28	76	58	円形	0.33×0.30	22
3	楕円形	0.63×0.55	32	31	楕円形	0.69×0.43	32	59	楕円形	0.42×0.32	56
4	楕円形	0.49×0.32	15	32	楕円形	0.56×0.43	30	60	楕円形	0.60×0.50	44
5	円形	0.27×0.24	47	33	円形	0.37×0.34	25	61	円形	0.61×0.58	30
6	円形	0.31×0.30	60	34	円形	0.31×0.30	20	62	楕円形	0.79×0.67	31
7	円形	0.20×0.19	27	35	円形	0.27×0.27	26	63	楕円形	0.42×0.35	52
8	円形	0.23×0.21	23	36	楕円形	0.27×0.18	19	64	楕円形	0.34×0.24	53
9	楕円形	0.22×0.19	24	37	円形	0.29×0.27	21	65	楕円形	0.32×0.27	31
10	円形	0.23×0.22	23	38	円形	0.32×0.31	35	66	楕円形	0.22×0.18	13
11	円形	0.18×0.18	11	39	楕円形	0.50×0.41	28	67	円形	0.25×0.20	24
12	楕円形	0.20×0.17	27	40	円形	0.27×0.27	54	68	円形	0.23×0.22	28
13	円形	0.30×0.29	22	41	楕円形	0.34×0.29	19	69	円形	0.26×0.24	36
14	楕円形	0.21×0.17	16	42	円形	0.29×0.28	21	70	楕円形	0.27×0.22	31
15	円形	0.23×0.22	16	43	楕円形	0.30×0.27	26	71	円形	0.38×0.37	23
16	楕円形	0.32×0.23	24	44	楕円形	0.33×0.27	29	72	楕円形	0.27×0.21	40
17	円形	0.19×0.18	15	45	円形	0.26×0.25	16	73	円形	0.33×0.31	34
18	楕円形	0.26×0.19	18	46	楕円形	0.36×0.30	41	74	円形	0.23×0.21	15
19	楕円形	0.25×0.20	19	47	円形	0.27×0.25	47	75	円形	0.27×0.25	21
20	円形	0.21×0.21	10	48	楕円形	0.30×0.23	37	76	楕円形	0.24×0.18	60
21	円形	0.22×0.21	56	49	円形	0.28×0.28	41	77	円形	0.34×0.32	54
22	楕円形	0.19×0.17	20	50	楕円形	0.33×0.29	33	78	楕円形	0.28×0.25	27
23	楕円形	0.40×0.32	41	51	楕円形	0.37×0.29	40	79	楕円形	0.33×0.29	48
24	円形	0.42×0.39	57	52	円形	0.54×0.49	46	80	楕円形	0.32×0.23	50
25	楕円形	0.46×0.37	47	53	楕円形	0.33×0.29	36	81	円形	0.27×0.27	43
26	楕円形	0.41×0.26	49	54	円形	0.38×0.36	21	82	円形	0.25×0.22	23
27	楕円形	0.37×0.27	20	55	楕円形	0.39×0.32	26	83	楕円形	0.42×0.35	57
28	円形	0.33×0.32	32	56	円形	0.58×0.55	53	84	円形	0.37×0.28	45

(6) 不明遺構

第1号不明遺構 (第275図)

位置 調査区南西部のI4a3区、標高25.7mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径3.74m、短径3.59mの円形で、長径方向はN-45°-Wである。壁高は18~23cmで、外傾して立ち上がっている。

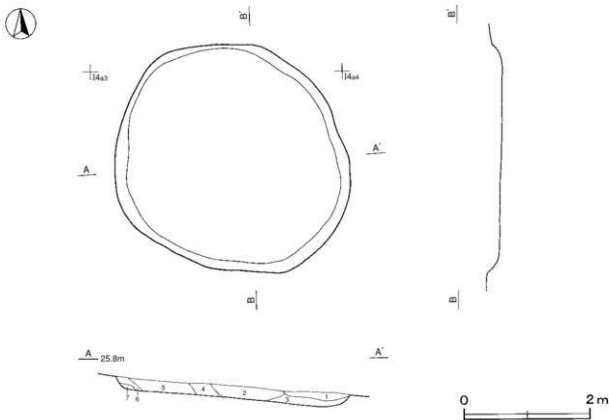
床 平坦であるが、東側が低くなっており、特に踏み固められた部分は確認されていない。

覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 褐色	ローム粒子中量
2 褐色	ロームブロック少量	6 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量	7 黒暗褐色	ローム粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子少量		

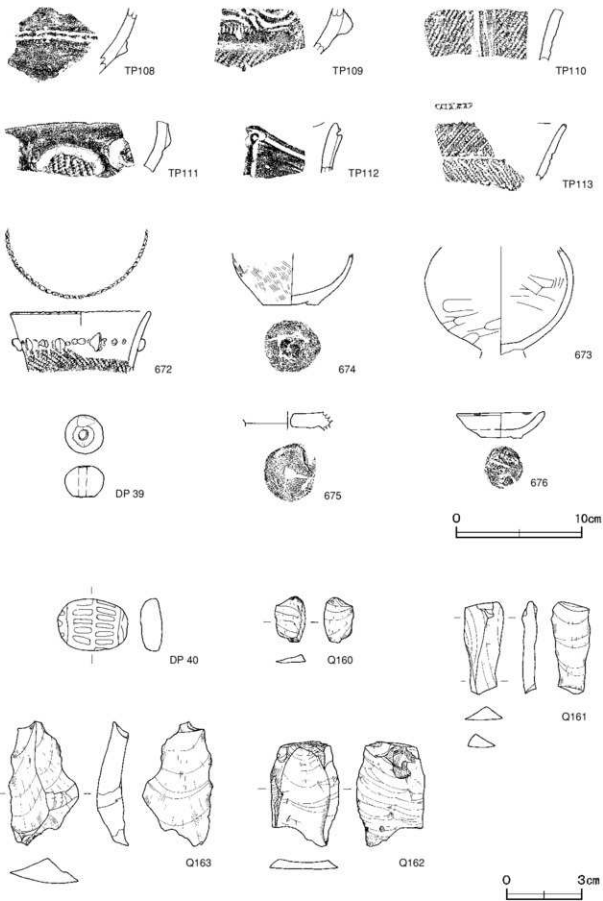
所見 住居跡として調査を進めたが、炉などの屋内施設は検出されず、遺物も出土していない。本跡のような形状の遺構は当遺跡では本跡だけであり、性格は不明である。時期は、遺物が出土していないため不明である。



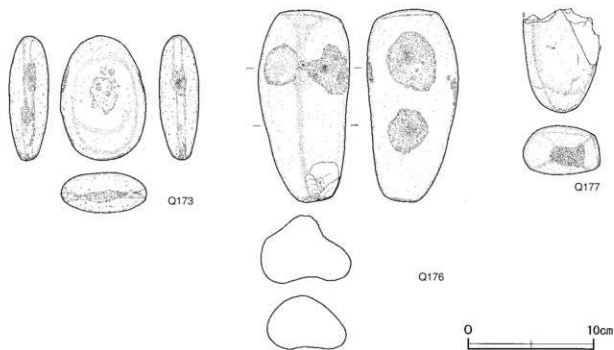
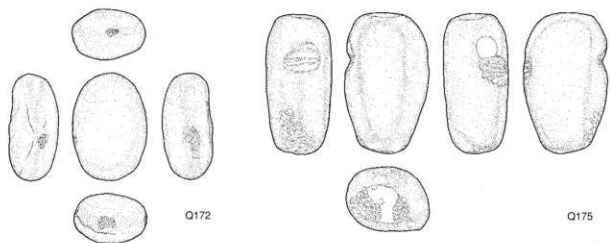
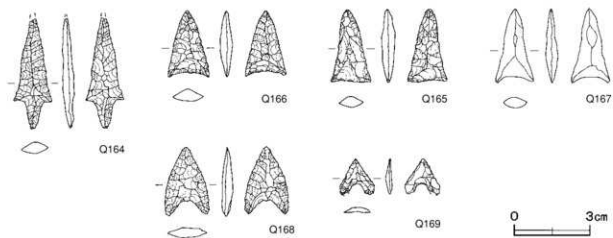
第275図 第1号不明遺構実測図

(7) 遺構外出土遺物

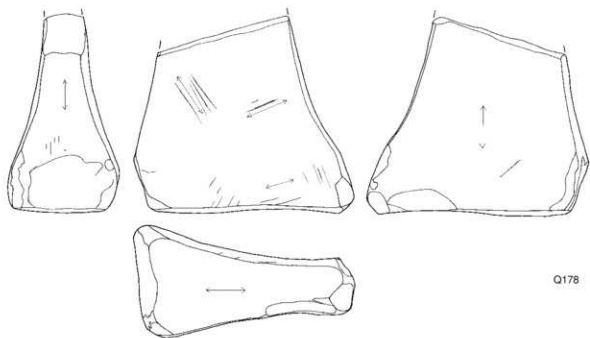
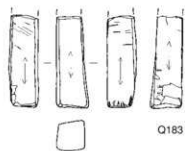
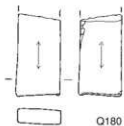
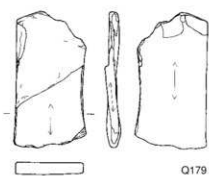
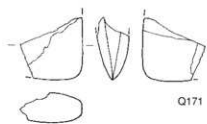
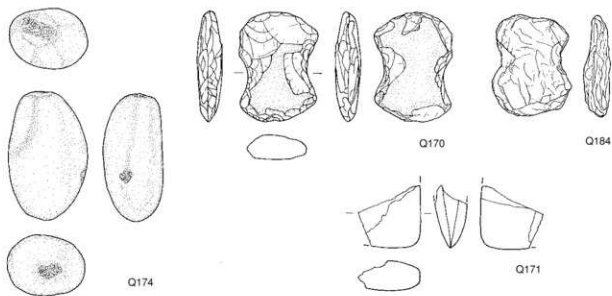
今回の調査で、当遺跡から出土した遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを実測図及び出土遺物観察表で記載する。



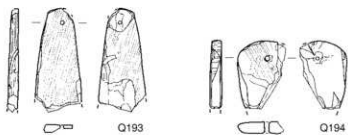
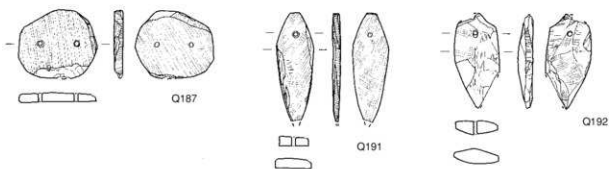
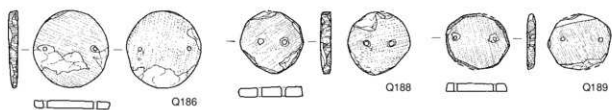
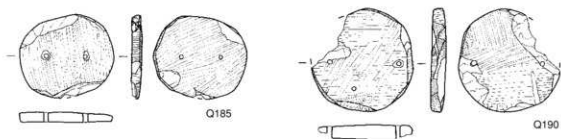
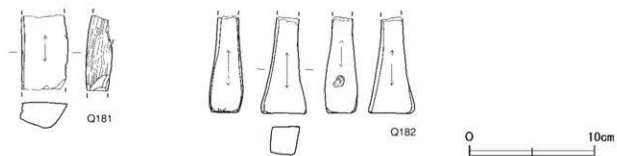
第276图 遺構外出土遺物実測図1)



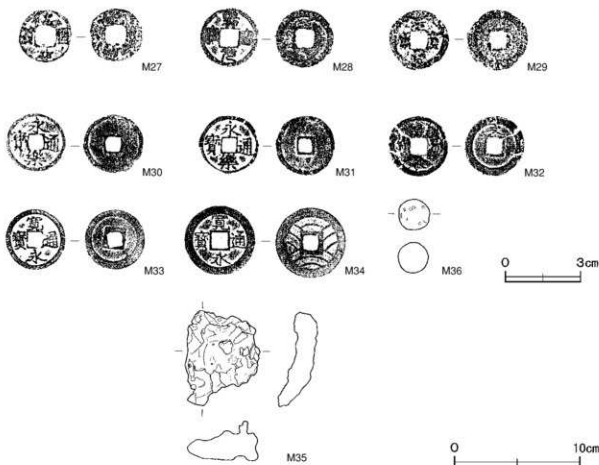
第277图 遗構外出土遺物実測図(2)



第278图 遺構外出土遺物実測図(3)



第279図 遺構外出土遺物実測図(4)



第280図 遺構外出土遺物実測図(5)

遺構外出土遺物観察表 (第276~280図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様及び手法の特徴	出土位置	備考
672	弥生土器	小形壺	10.9	(4.8)	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口唇部に稜体押圧 複合口縁 口辺部無文 口辺部下縁に稜体による刺突後彫痕 頸部に附加条一種 (附加2条)の縄文	F 4区	20% PL30
674	土師器	小型甕	-	(4.1)	4.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ハテ目調整後ナデ 内面ナデ 底面調整のための粘土貼り付け	F 4c1区	20%
673	土師器	小形台付甕	-	(8.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面ヘウナデ	E 4区	35%
675	土師器	高台付甕*	-	(1.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後高台貼り付け 内面黒色見境 焼成後穿孔	E 5区	10% 刺青 [口]
676	土師質土器	小皿	6.8	2.2	3.3	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	底部回転糸切り ロウロナデ	A 3c3区	100% 油埴 PL48
7718	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	断面三角形の隆部 2列の角押文	E 4区	5% 中期 PL55
7719	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	断面三角形の隆部 RLの単筋縄文 沈澱による区画	J 5区	5% 中期 PL55
7720	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	RLの単筋縄文 沈澱による区画	D 2区	5% 中期 PL55
7721	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	RLの単筋縄文 隆部による区画	E 5区	5% 中期 PL55
7722	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	波状口縁 口縁部に沈澱 竹管による刺突文	I 6区	5% 後期 PL55
7723	弥生土器	壺	-	(4.4)	-	長石・石英	橙	普通	口唇部に稜体押圧 複合口縁 口部中区・下縁に稜体による刺突条一条 附加条一種 (附加2条)の縄文	F 4区	5%
番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
DP29	球状土師	3.1	0.8	2.6	(23.6)	土 (長石・石英)	ナデ 一方からの穿孔		I 6g6区		
DP40	泥団子	2.7	2.1	0.8	3.7	土 (長石・石英)	猿型のスタンプ文		J 5区		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q160	割片	1.8	1.2	0.3	0.5	黒輝石	縦長割片 片面は主要刺摩面の刺摩方向に対し同一方向の削痕		D 5区	PL49	
Q161	割片	3.7	1.6	0.6	2.8	頁岩	縦長割片		C 2区	PL49	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q162	湖片	4.2	2.7	0.4	5.0	黒曜石	縦長湖片 背面は主要剥離面の剥離方向に対し同一方向の溝	E 3区	PL49
Q163	湖片	4.9	2.8	1.3	9.7	頁岩	縦長湖片	D 5区	PL49
Q164	石鏝	(4.4)	1.5	0.5	(1.8)	チャート	有茎 両面剥離調整 押圧調整	F 3区	PL52
Q165	石鏝	2.9	1.5	0.4	1.6	チャート	無茎 両面剥離調整 押圧調整	E 3区	PL52
Q166	石鏝	2.6	1.6	0.5	1.4	チャート	無茎 両面剥離調整 押圧調整	D 4区	PL52
Q167	石鏝	2.9	1.5	0.5	1.2	般若安山岩	無茎 両面剥離調整	1 6区	PL52
Q168	石鏝	2.7	1.8	0.4	1.3	頁岩	無茎 両面剥離調整 押圧調整	H 4区	PL52
Q169	石鏝	(1.5)	1.4	0.2	(0.3)	安山岩	無茎 両面剥離調整 押圧調整	F 4区	
Q170	打製石斧	8.7	6.1	1.9	138.4	砂岩	分銅型、自然面を残す	G 4区	
Q171	磨製石斧	(5.0)	(4.9)	(2.5)	(63.1)	流紋岩	定角式 両刃 丁寧な磨製	D 611区	
Q172	礫石	8.5	5.9	4.0	294.0	チャート	敲打痕 4 小所	D 4区	PL54
Q173	礫石	9.9	6.8	3.1	301.0	花崗岩	敲打痕 5 小所	D 5区	PL54
Q174	礫石	10.2	6.3	4.8	416.0	砂岩	敲打痕 3 小所	D 4区	
Q175	礫石	11.2	6.7	5.1	633.0	砂岩	敲打痕 3 小所 磨石に転用	E 5区	
Q176	礫石	15.3	7.2	5.4	(785.0)	砂岩	敲打痕 4 小所 磨石に転用	F 4区	PL54
Q177	礫石	(8.2)	(6.1)	(3.9)	(263.0)	砂岩	敲打痕 1 小所	D 4区	
Q178	礫石	(15.7)	17.6	8.9	(2290.0)	砂岩	砥面 4 面 玉砥石としても使用	C 2区	PL54
Q179	礫石	10.8	5.7	0.9	76.7	凝灰岩	砥面 3 面	E 4区	PL54
Q180	礫石	(6.3)	3.4	1.2	(38.3)	凝灰岩	砥面 2 面	H 5g1区	PL54
Q181	礫石	(6.0)	3.7	2.0	(63.8)	凝灰岩	砥面 1 面	1 5区	PL54
Q182	礫石	(7.6)	3.5	2.6	(81.5)	凝灰岩	砥面 4 面	H 3区	PL54
Q183	礫石	(7.3)	2.6	2.4	(70.5)	凝灰岩	砥面 4 面	H 3f0区	PL54
Q184	石鏝	(8.1)	6.3	2.0	(136.6)	雲母片岩	磨形、自然面を残す	E 5区	
Q185	双孔円板	3.3	3.7	0.4	(8.3)	滑石	両面平滑 全面研削調整 孔径0.18cm	J 5区	PL53
Q186	双孔円板	3.0	2.9	0.3	(5.1)	滑石	両面平滑 全面研削調整 孔径0.12cm	J 5区	PL53
Q187	双孔円板	2.7	3.0	0.4	(6.2)	滑石	両面平滑 全面研削調整 孔径0.16cm	G 5区	PL53
Q188	双孔円板	2.5	2.4	0.4	(4.5)	滑石	両面平滑 全面研削調整 孔径0.17cm	H 3区	PL53
Q189	双孔円板	2.1	2.5	0.3	(3.2)	滑石	両面平滑 全面研削調整 孔径0.14cm	J 5区	PL53
Q190	双孔円板	4.1	(4.1)	0.6	(13.7)	滑石	両面平滑 全面研削調整 孔径0.18cm 孔3 (内1未穿孔) 未製品	J 5区	PL53
Q191	網形模造品	(4.3)	1.4	0.4	(3.6)	滑石	両面平滑 全面研削調整 上部穿孔 孔径0.23cm	E 3区	PL52
Q192	網形模造品	3.7	1.8	0.4	(4.7)	滑石	両面平滑 全面研削調整 上部穿孔 孔径0.19cm	J 3区	PL52
Q193	網形模造品	(4.1)	(1.9)	0.4	(5.2)	滑石	両面平滑 全面研削調整 上部穿孔 孔径0.16cm	F 5区	PL52
Q194	網形模造品	(2.3)	(1.9)	0.6	(4.2)	滑石	両面平滑 縁調整 上部穿孔 孔径0.19cm	J 5区	PL52

番号	銭名	径	孔距	重量	材質	初周年	特徴	出土位置	備考
M27	嘉祐通宝*	(2.17)	(0.80)	(1.66)	銅	1056年(嘉祐元年)	行書*	遺構確認部	PL55
M28	熙寧通宝	2.39	0.68	3.02	銅	1068年(熙寧元年)	篆書	J 5区	PL55
M29	元豊通宝*	(2.45)	(0.68)	(2.12)	銅	1078年(元豊年間)	篆書*	遺構確認部	PL55
M30	永樂通宝	2.42	0.57	2.70	銅	1408年(永樂6年)	真書	1 6区	PL55
M31	永樂通宝	2.40	0.54	3.30	銅	1408年(永樂6年)	真書	1 6区	PL55
M32	寛永通宝	2.44	0.59	3.14	銅	1765年(明和2年)	古寛永 背文	J 3区	PL55
M33	寛永通宝	2.43	0.64	2.06	銅	1668年(寛文8年)	新寛永 無背文	遺構確認部	PL55
M34	寛永通宝	2.84	0.63	4.32	銅	1821年(文政4年)	四文銭 11銭	J 3区	PL55

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M36	穿孔	1.2	1.38	1.23	9.9	鉄	球状 断面円形状	E 5区	
M37	陶瓦片	(7.5)	(5.9)	(3.5)	(97.7)	鉄	表面は暗赤褐色 凹凸有り	H 5区	

第4節 ま と め

1 はじめに

薬師入遺跡は、阿見町の南部を流れる桂川左岸の標高24~25mの台地上に立地しており、本報告分を含めて2次にわたって調査が行われている。また、当遺跡の南側にはナギ山遺跡が所在しており、この遺跡も2次にわたって調査が行われている。

薬師入・ナギ山の両遺跡は、行政的に別けられているが、桂川左岸の同じ台地上に位置し、遺構も連続して続いていることから“一つの遺跡”としてとらえられる。ここでは、両遺跡の主体となる弥生時代と古墳時代の遺構と遺物について集落の動態を概観し、若干の考察と問題提起をまとめてみたい。

2 薬師入遺跡とナギ山遺跡の概要

薬師入遺跡は、平成14・15年度に第1次調査として11,939㎡が調査され、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかとなり、『茨城県教育財団文化財調査報告書第239集 薬師入遺跡』¹⁾として報告されている（以下、『薬師入1』と略す）。平成18年度には第2次調査として36,786㎡が調査され（本報告を『薬師入2』と略す）、弥生時代から近世までの遺構が確認された。2期にわたる調査で延べ48,725㎡が調査され、石器集中地点2か所、竪穴住居跡114軒（縄文1、弥生19、古墳85、平安9）、掘立柱建物跡4棟、地下式坑10基、塚3基、陥穴2基、炉穴1基、炉跡2基、火葬土坑3基（中世）、炭焼遺構13基、溝跡33条（中世4、近世1、不明28）、道路跡8条（中世3、不明5）、土坑265基（縄文2、弥生5、古墳2、平安2、中世~近世30、不明224）、ピット84基、不明遺構1基が検出されている。

ナギ山遺跡は、平成14・17年度に延べ19,854㎡が調査され、古墳時代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなり、『茨城県教育財団文化財調査報告書第233集 ナギ山遺跡1』²⁾、『茨城県教育財団文化財調査報告書第277集 ナギ山遺跡2』³⁾として報告されている（以下、第233集を『ナギ山1』、第277集を『ナギ山2』と略す）。確認された遺構は、竪穴住居跡49軒（古墳47、不明2）、掘立柱建物跡2棟（古墳、中世）、井戸跡4基（不明）、方形周溝状遺構1基（古墳）、溝跡4条（中世1、不明3）、道路跡2条（中世、不明）、地下式坑2基（中世）、炭焼跡1基、地点貝塚1か所、土坑53基（古墳3、中世1、不明49）、遺物包含層1か所（古墳）、不明遺構1基である。



第281図 遺跡位置概略図

薬師入・ナギ山両遺跡の調査総面積は68,579㎡であり、住居跡だけでも163軒にのぼる。時代別の内訳は、縄文時代1軒、弥生時代19軒、古墳時代132軒（前期56、中期46、後期30）、平安時代9軒、時期不明2軒で、弥生時代と古墳時代が遺跡の主体であることが分かる。また、方形周溝状遺構1基、掘立柱建物跡6棟、地下式坑12基、井戸跡4基、溝跡37条、道路跡10条、塚3基、石器集中地点2か所、陥し穴2基、炉穴1基、炉跡2基、火葬土坑3基、炭焼遺構14基、土坑318基、ピット84基、不明遺構2基が確認されている。

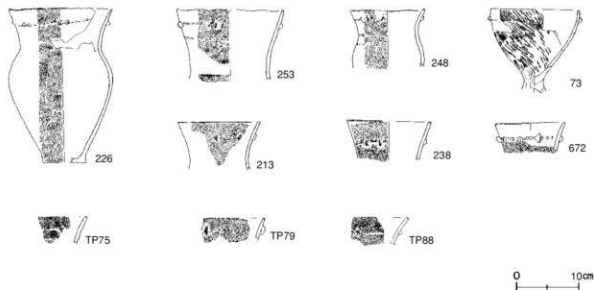
尚、本稿では、便宜上、239集報告調査区を「調査1区」、本報告調査区を「調査2区」、233集報告調査区を「調査3区」、277集報告調査を「調査4区」とする。

3 弥生時代後期後半

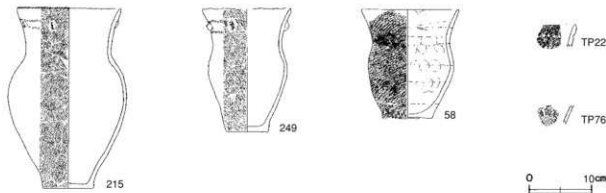
(1) 出土土器について

弥生時代後期の住居跡からは、弥生土器と土師器が出土している。弥生土器は、大きくA類とB類に分けられる。

A類の土器は、さらにA類1種とA類2種に細分できる。A類1種は、複合口縁であること、口縁部下端には2～3個の貼瘤を持つこと、頭部下端には無文帯があり、胴部と文様帯を分けているなどの特徴があり、かすみがうら市上稲吉西原遺跡で出土した土器と類似している。特に、第107号住居跡から出土した広口壺（第282図226）にその特徴が表れている。A類の中には口縁部に縄文が施文されていないものや複合口縁ではない土器もみられ、土浦市原田北遺跡、原出口遺跡、西原遺跡などからも出土している。A類2種の土器は、単純口縁であること、2列の刺突列が巡り、刺突列間に貼瘤や突起を持つこと、頭部下端には無紋帯があることなどの特徴があり、土浦市根鹿北遺跡で出土した土器との類似点が認められる。特に、第104号住居跡から出土した広口壺（第283図249）にその特徴が表れている。第12号住居跡から出土した小形の壺（第283図58）には貼瘤が認められないが、2列の刺突列が施文されていることからA類2種の土器として分類した。



第282図 薬師入遺跡出土弥生土器（A類1種）



第283図 薬師入遺跡出土弥生土器（A類2種）

さらに、B類は、頸部に櫛歯状工具による波状文が施文されること、頸部下端に櫛歯状工具による麻状文が施文されること、胴部に附加条一種（附加2条）の縄文が施文されることなどが特徴で、第131号住居跡出土の土器（第284図）が代表である。このような特徴を持つ土器は、茨城県西部や栃木県東部を中心に分布しており、それらの地域との交流が想定される。

次に、土師器の出土状況についてみる。土師器が出土している住居跡は14軒であるが、其中で特筆できるのは第12・104・106・125号住居跡から出土している土師器である。出土状況は、いずれの住居跡も覆土下層から上層にかけての出土で、平面的にも集中して出土していることが類似している。床面からの出土例がみられないことから、該期の土器との共伴関係はないことは明らかで、住居廃絶後の窪地に投棄されたものと考えられる。また、土師器の時期は「古墳時代前期中葉（4世紀初頭～前葉）」⁴¹と考えられる。



第284図 薬師入遺跡出土弥生土器（B類）

出土した土師器は、谷の北側に位置する第12・125号住居跡の北東側と、谷の南側に位置する第104・106号住居跡の東側にはそれぞれ古墳時代前期中葉（4世紀初頭～前葉）の集団が存在しており、それらからの廃棄と考えることができる。残りの10軒は、土師器の出土数も少なく、いずれも覆土中からの出土であることから、埋没の過程で流れ込んだ可能性が高い。中でも、第124・126～128号住居跡の4軒は占有面積が10.0㎡に満たない小規模な住居跡で、該期の遺物の出土も少ない。

以上のことから、出土した弥生土器のほとんどが茨城県南部を中心に分布しているA類であり、当遺跡は県南を中心とする弥生時代後期後半の文化圏に属していると考えられる。

(2) 遺構について

該期における住居跡は19軒（調査1区に第12・13・15・16号住居跡の4軒、調査2区に第102～109・123～128・131号住居跡の15軒を検出）を数える。形状は、隅丸方形（方形を含む）及び隅丸長方形（長方形を含む）で、茨城県南部における該期の住居跡の特徴をそなえている⁵¹。いずれの住居跡も調査区北西側の台地縁辺部に位置しており、浅い谷を挟んで南北に分かれている。



第285図 弥生時代遺構配置図

表20 弥生時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	規模 (m) 長軸×短軸	占有 面積	弥生 土器	その他	番号	位置	平面形	規模 (m) 長軸×短軸	占有 面積	弥生 土器	その他
12	C 215・北	方形	3.36 × 3.28	11.02	45	892 縄3	108	F 3d8・南	隅丸方形	4.63 × 4.25	19.67	13	38
13	C 219・北	長方形	3.86 × 3.76	14.51	108	7	109	F 3a9・南	隅丸長方形	3.89 × 3.46	13.46	58	29
15	D 2a7・北	長方形	4.19 × 3.68	15.42	83	12	123	D 3b4・北	隅丸方形	3.66 × 3.64	13.32	54	11 縄3
16	D 3b1・北	[方形]	[3.98 × 3.62]	14.41	70		124	D 3f2・北	隅丸方形	2.90 × 2.65	7.68	11	
102	F 4g1・南	隅丸方形	3.30 × 3.11	10.26	19	2	125	D 2f0・北	隅丸長方形	5.00 × 4.25	21.25	108	100 縄11
103	G 3b6・南	隅丸方形	3.70 × 3.42	12.65	37		126	D 2b3・北	隅丸方形	3.29 × 3.01	9.90	21	3 縄3
104	F 3b6・南	隅丸長方形	5.08 × 4.26	21.64	69	101	127	C 2b1・北	隅丸方形	2.96 × 2.86	8.47	22	1 縄1
105	F 3f6・南	隅丸長方形	3.58 × 2.80	10.02	18	8	128	C 1b9・北	隅丸方形	3.23 × 3.07	9.92	19	
106	F 3e3・南	隅丸長方形	3.66 × 3.05	11.16	25	16	131	D 2e7・北	隅丸長方形	4.11 × 3.61	14.84	38	
107	F 3d5・南	隅丸長方形	4.22 × 3.78	15.95	66	18							

谷の北側では11軒が検出されている。平面形では、隅丸方形（方形を含む）が7軒、隅丸長方形（長方形を含む）が4軒確認されている。規模で見ると、隅丸方形（方形を含む）の住居跡は、一辺が2～3mであり、比較的規模の小さい住居跡が多い。一方、隅丸長方形（長方形を含む）の住居跡は、長軸が3m～4mであり、1軒だけ5mを計測する。また、11軒の占有面積の平均は12.77㎡で、最大は第125号住居跡の20.08㎡である。つまり、隅丸方形（方形を含む）で、平均的に規模が小さい傾向にあり、第124・126～128号住居跡は占有面積が10.0㎡に満たない小規模な住居跡である。

谷の南側では8軒の住居跡が検出されている。平面形は谷の北側と同様に隅丸方形及び隅丸長方形を基調としており、隅丸方形が3軒、隅丸長方形が5軒確認されている。規模で見ると、隅丸方形の住居跡は一辺が3～4mで、谷の北側より若干大きい傾向にある。隅丸長方形の住居跡は、長軸が3～5mであり、谷の北側と同様の傾向を示している。また、8軒の占有面積の平均は14.35㎡で、谷の北側とは違いやや占有面積が大きい傾向を読み取ることができる。最大は第104号住居跡の21.64㎡である。

これまでに、谷の北側と南側では、隅丸方形（方形を含む）と隅丸長方形の住居跡の規模に違いがあることを述べた。また、土師器の出土は隅丸方形（方形を含む）の住居跡では少なく、隅丸長方形の住居跡で多い傾向にあることも述べた。隅丸長方形の住居跡は、規模に多少の違いがあるにせよ、次代の「古墳時代前期前葉」の住居跡とあまり変わらない⁵⁾状況であり、該期の終末時期に近いことが想定される。

4 古墳時代

古墳時代の住居跡は、前期から後期にかけての住居跡が確認されている。ここでは、両遺跡における該期の集落を総括して述べる⁶⁾。

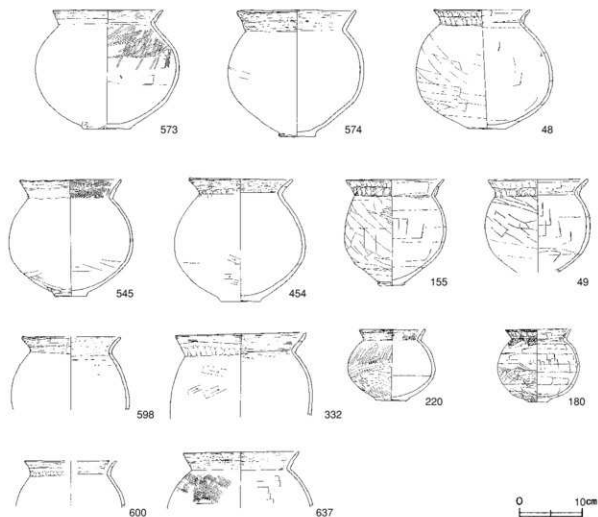
(1) 前期の土器について

古墳時代前期の甕（第286・287図）について検討する。いずれの甕も前期前葉～中葉（3世紀中葉～4世紀前葉）に比定されている住居跡から出土している。573・574・577については、弥生時代後期後半の住居跡から出土しているが、住居廃絶後の窪地に一括投棄されたことが出土状況から明らかであることか

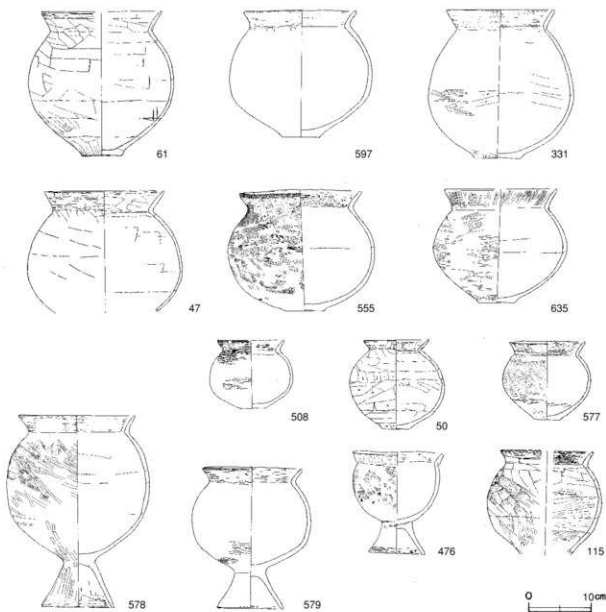
ら前期の土器として検討する。これらの土器に共通する点は「くの字状」の頸部と口縁部の「輪積痕」で、第287図508・555のように口縁部に棒状工具や縄文原体による刻目(押圧)がなされていることも共通する点である。このような特徴を持つ土器は、上総地方⁷⁾に類例を求めることができる。次に、台付甕(第287図)は、甕部分に上述した甕の特徴が認められ、それらの甕に脚台を付けたような形状であり、これらの土器も上総地方に類例を求められる⁸⁾。

これらの甕や台付甕の出土状況については、上総地方から運ばれてきたとは考えにくく、在地で生産された通常の煮炊き具として使用されたと考えられる。このような状況は、在地の集団が上総地方の技術や文化を受容したと考えられるのである。

次に、南関東系の土器について述べる。これらの土器は特に、調査2区の浅い谷の東側の住居跡からの出土が多く、薬師入1でも「いわゆる南関東系の網目状燃糸文を施した壺形土器は、破片ではあるが比較的多く出土している。」と報告している。中でも、第81号住居跡や第95号住居跡から出土した土器は、遺存率は低いものの丁寧な造りで、当地域にかなりの量が運ばれてきている可能性が指摘できる。また、第111号住居跡からは「頭部下端にキザミを施し、突帯をめぐらせた壺形土器など、その系譜が西遠江に求められる」土器も出土



第286図 薬師入遺跡出土の甕



第287図 薬師入遺跡出土の甕、台付甕

しており、「新治郡玉里町権現平2号墳から出土したバレス文様壺に類例を求めることができる」土器も第113号住居跡から出土している。いずれも、搬入された土器と考えられる。

(2) 遺構について

該期の住居跡は132軒が確認されている。時期ごとに見ると、前期が56軒（42.4%）、中期が45軒（34.1%）、後期が31軒（23.5%）となる。その中で、出土や遺構の形状などから時期が明確に判断できるのは103軒（前期40軒（38.8%）、中期35軒（34.0%）、後期28軒（27.2%））で、ここでは、時期が明確に判定できる住居跡に焦点を絞り述べていくことにしたい。

① 古墳時代前期

時期が明確に判断できる前期の住居跡は40軒で、いずれも調査1・2区に位置している。出土遺物や遺構の形状などから細分すると、Ⅰ期（3世紀中葉から末葉）、Ⅱ期（4世紀初頭から前葉）、Ⅲ期（4世紀中から末葉）、Ⅳ期（4世紀末葉～5世紀初頭）に分けることができる。

表21 薬師入遺跡・ナギ山遺跡古墳時代前期住居跡一覧

番号	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	電中	形跡	時期	番号	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	電中	形跡	時期
11	[方形]	[3.78×3.52]	伊1	1	3世紀中葉	87	[方形]	3.18×(2.20)	伊1	-	4世紀初頭～前葉
3	方形	3.85×3.55	-	1	3世紀中葉～末葉	94	方形	4.97×4.80	伊2	1	4世紀初頭～前葉
20	方形	8.82×8.80	伊1	1	3世紀中葉～末葉	95	長方形	4.15×(3.30)	伊1	1	4世紀初頭～前葉
96	方形	5.56×5.46	伊1	1	3世紀中葉～末葉	98	方形	5.64×5.52	伊1	1	4世紀初頭～前葉
99	長方形	3.95×3.48	伊2	-	3世紀中葉～末葉	101	長方形	6.22×5.05	伊1	-	4世紀初頭～前葉
100	長方形	5.48×4.30	伊5	1	3世紀中葉～末葉	110	長方形	5.60×4.48	伊1	1	4世紀初頭～前葉
2	方形	6.45×5.93	伊1	1	4世紀初頭～前葉	111	方形	3.93×3.87	伊1	1	4世紀初頭～前葉
5	[方形]	[9.90×9.05]	伊1	1	4世紀初頭～前葉	112	方形	5.45×5.18	伊1	1	4世紀初頭～前葉
8	長方形	4.47×4.02	伊1	1	4世紀初頭～前葉	113	隅丸方形	4.74×4.60	伊1	1	4世紀初頭～前葉
26	方形	5.25×4.87	伊1	1	4世紀初頭～前葉	115	隅丸方形	3.80×3.64	伊1	-	4世紀初頭～前葉
27	方形	4.01×3.98	伊2	-	4世紀初頭～前葉	116	長方形	6.34×5.27	伊1	1	4世紀初頭～前葉
28	方形	6.58×5.92	伊1	1	4世紀初頭～前葉	117	方形	5.12×5.02	伊1	1	4世紀初頭～前葉
31	方形	4.60×4.53	伊1	1	4世紀初頭～前葉	118	長方形	5.06×4.20	伊1	1	4世紀初頭～前葉
32	方形	5.40×5.00	伊1	1	4世紀初頭～前葉	119	長方形	5.54×4.55	伊1	1	4世紀初頭～前葉
33	方形	3.90×3.84	伊1	1	4世紀初頭～前葉	132	長方形	3.40×2.99	伊1	-	4世紀初頭～前葉
34	方形	5.06×4.67	伊1	1	4世紀初頭～前葉	25	方形	4.82×4.58	伊1	1	4世紀中葉～末葉
36	長方形	4.73×4.01	伊2	1	4世紀初頭～前葉	35	方形	4.85×4.45	伊1	1	4世紀中葉～末葉
74	方形	6.26×5.70	伊1	1	4世紀初頭～前葉	51	方形	5.90×5.65	伊1	1	4世紀中葉～末葉
78	方形	5.00×4.64	伊2	1	4世紀初頭～前葉	75	方形	3.62×3.34	-	-	4世紀末葉～5世紀初頭
81	方形	4.82×4.80	伊1	-	4世紀初頭～前葉	77	方形	6.10×5.16	-	-	4世紀末葉～5世紀初頭

Ⅰ期の住居跡は6軒であり、調査1区及び2区に位置している。北西部の2軒は規模が小さく、北東部の第20号住居跡は1辺が8mを超える規模で突出して大きい。薬師入1では「古墳時代前期前葉は突如として大型の住居跡が出現する。」と指摘されている。

Ⅱ期になると住居跡は29軒と住居跡の数は急増し、前期の中では最も多い。それらは、調査1区と調査2区北西部の浅い谷の谷頭を中心に位置し、当遺跡の中でも中心の時期である。調査1区の最北部では、いずれの住居跡も規模が小さく、主軸方向などから2つのまとまりが想定される。調査1区の中央部では、一辺が9mを超える第5号住居跡が確認されており、前期の中で最大規模である。また、第5号住居跡の周りにはやや間隔を置いて同時期の住居跡が位置しており、この時期の中心的な住居跡と考えられるが、トレンチによる攪乱が激しいためそれを裏付けるような遺物は出土していない。調査2区では、浅い谷の谷頭に住居跡が確認されている。第115～119・122号住居跡は、主軸方向や出入り口施設脇に貯蔵穴を持つ形状が類似しており、小集団を形成していた可能性が高い。その中で、第118号住居跡は他の住居跡と内部施設



第288圖 古墳時代遺構配置圖(前期)

の配置は酷似しているが、出入り口が逆である。また、第116号住居跡は集団の中では規模がやや大きいことから、優位性が想定される。この他、谷の東や南にもこの時期の住居跡は広がっており、谷頭を取り囲むように確認されている。これらの中では、谷の東側の中で最も奥まった場所に位置している第74号住居跡の規模が大きい。当住居跡の南東側は調査区域外であるため明確にはできないが、前述した第5号住居跡と同様に同時期の住居跡と離れた場所に位置している。

第78号住居跡の床面からは粒状滓が出土しており、羽口に転用されたと考えられる器台と2基の炉跡が検出されたことなどから鍛冶工場的な性格を有した建物跡と想定される。

近年、関東地方でも古墳時代における鍛冶関連遺跡の調査が進み、特に、古墳時代前期から中期にかけての検出例が増えてきている。古墳時代前期の主な遺跡としては、神奈川県千代南原V遺跡と新羽大竹遺跡、千葉県一本松南遺跡、西妻遺跡、古台遺跡、沖塚遺跡、草刈遺跡C・K区がある。茨城県内では土浦市八幡脇遺跡や尻替遺跡が知られている。いずれの遺跡も、羽口や鉄滓、砂鉄などの鍛冶関連遺物が出土している。第78号住居跡では、鍛冶関連遺物は転用されたと想定される器台と粒状滓だけの出土で、他の鍛冶関連遺物は認められていないが、貯蔵穴北東側床面の錆色の覆土と貯蔵穴脇の壁土を自然科学分析にかけたところ「極めて局所的な土壌間での赤鉄鉱の含有量の違いは、試料が採取された第78号住居跡の状況を考慮すれば、もともと土壌中に含まれていた赤鉄鉱に加えて、鍛冶作業で生じた鉄分の付加に由来する可能性もあると考えられる。」との報告がなされ、鍛冶関連の工房であった可能性を高めている。しかし、鍛冶関連遺物が少なく、鉄滓や鍛造剥片も出土していないため、錆色の覆土の分析結果と粒状滓の散乱だけでは精錬鍛冶か鍛錬鍛冶か判断することはできなかった。

その後、住居数は減少し、Ⅲ期が3軒、Ⅳ期2軒となり、一時的な衰退傾向を示す。

② 古墳時代中期

時期が明確に判断できる中期の住居跡は36軒で、出土土器や遺構の形状などから時期を細分するとV期（5世紀前葉）、VI期（5世紀中葉）、VII期（5世紀後葉）に分けることができる。前期の終わりには一時的な衰退傾向にあった当遺跡は、中期になるとまた住居数が増える。前期のようなまとまりを認めることはできないが、栗師入遺跡・ナギ山遺跡の全域で住居跡が確認されている。

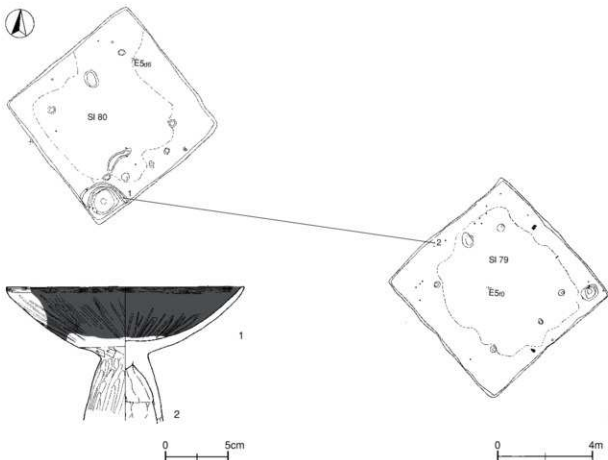
V期の住居跡は8軒で、調査1・2区に散在している。調査1区には3軒確認されており、中でも第6号住居跡は一辺が9mを超える大型の住居跡である。3軒とも主軸方向や形状が異なることから、同時性は想定しにくい。一方、調査2区に位置する4軒の内、第79・80・86号住居跡は一定の距離をとりながらまとまっているように見える。3軒の主軸方向はN-35°-47°-Wの間で取まり、規模も6m台でほぼ同様である。特に、第79・80号住居跡は、貯蔵穴の配置に違いがあるものの、主軸方向や規模、形状などが酷似しており、また、第79号住居跡の西コーナー寄りの床面から出土した高坏の脚部と第80号住居跡の貯蔵穴脇の床面から出土した高坏の坏部が接合（第289図）した事など、同時期に両住居跡が廃絶されていた可能性が極めて高い。

また、第80号住居跡では、滑石製模造品（白玉、白玉未製品、剣形、有孔円板、有孔円板未製品）のほか、滑石製の紡錘車や滑石剥片（荒製品、形製品、破片）が出土しており、滑石製模造品や製品を製作していた可能性が指摘できる。

VI期の住居跡は22軒で、調査1区で3軒検出されはいるが、大部分は調査2～4区に位置している。調査

表22 薬師入遺跡・ナギ山遺跡古墳時代中期住居跡一覽

番号	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	葺	階	時期	番号	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	葺	階	時期
6	[方形]	[9.20×9.18]	伊1	2	5世紀前葉	68	[方形・ 長方形]	8.02×(3.27)	伊2	-	5世紀中葉
9	方形	5.88×5.71	伊1	1	5世紀前葉	73	方形	5.27×5.14	伊1	1	5世紀中葉
14	長方形	7.55×6.92	伊1	1	5世紀前葉	N2	方形	3.1×3.1	伊1	-	5世紀中葉
79	方形	6.78×6.73	伊1	1	5世紀前葉	N9	[方形]	7.4×(6.7)	伊5	1	5世紀中葉
80	方形	6.72×6.66	伊1	1	5世紀前葉	N15	[方形]	(5.1)×(4.4)	伊1	-	5世紀中葉
86	方形	6.06×6.04	伊2	1	5世紀前葉	N17	方形	2.6×2.4	伊1	-	5世紀中葉
90	長方形	4.61×4.04	伊1	1	5世紀前葉	N19	方形	7.7×7.7	伊1	1	5世紀中葉
N50	方形	6.16×6.06	伊1	1	5世紀前葉	N23	方形	8.0×7.8	伊4	1	5世紀中葉
22	[長方形]	[5.97×5.46]	伊1	1	5世紀中葉	N34	方形	5.6×5.6	伊2	1	5世紀中葉
23	方形	4.26×3.73	伊1	1	5世紀中葉	N46	長方形	9.91×8.77	伊5	1	5世紀中葉
29	方形	6.32×6.14	伊1	1	5世紀中葉	N47	方形	5.18×5.12	伊1	1	5世紀中葉
45	長方形	5.67×4.66	伊1	1	5世紀中葉	N51	方形	3.36×3.28	伊1	1	5世紀中葉
46	方形	4.70×4.58	伊1	1	5世紀中葉	57	長方形	5.65×4.35	伊2	-	5世紀後葉
47	方形	4.53×4.48	伊2	1	5世紀中葉	59	長方形	5.24×4.28	伊2	1	5世紀後葉
50	長方形	5.79×5.24	伊1	1	5世紀中葉	N1	[方形]	3.2×(1.7)	葺1	1	5世紀後葉
61	方形	4.38×4.05	伊1	-	5世紀中葉	N12	[方形]	5.0×(4.7)	葺1	1	5世紀後葉
62	方形	4.58×4.43	伊1	1	5世紀中葉	N25	方形	5.6×5.6	葺1	1	5世紀後葉
63	方形	8.06×8.00	伊1	1	5世紀中葉						



第289図 接合関係遺構配置図



第290図 古墳時代遺構配置図 (中期)

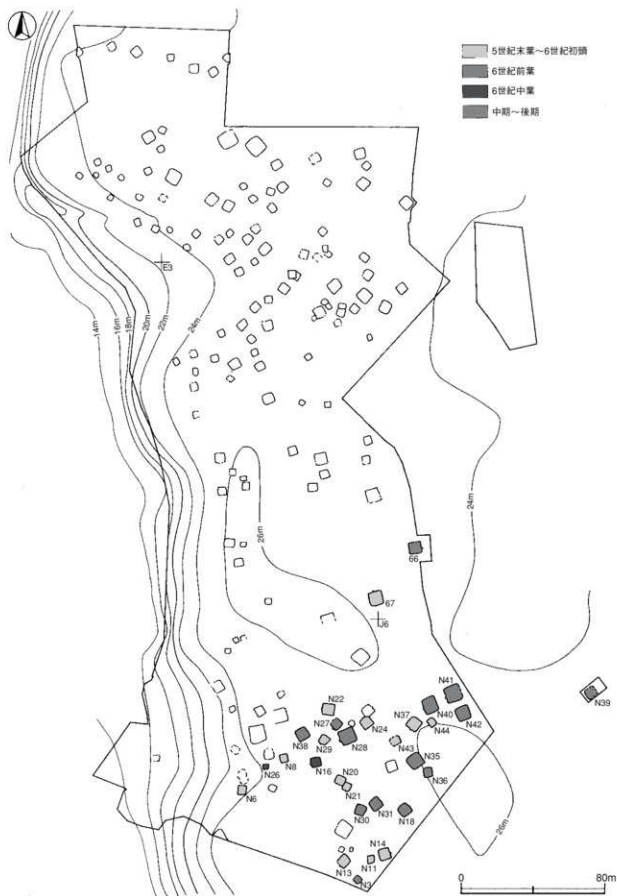
2区では、西側と東側にそれぞれ住居跡のまとまりを見て取ることができる。特に、西側のまとまりは、南北方向に4軒の住居跡が規則的に配置されている。規模や形状をさらに詳しく見ると、第45・50号住居跡と第46・47号住居跡に分けることができ、第45・50号住居跡は、共に貯蔵穴が南東コーナーに位置しており、同じ形状で計画的に住居を構築していたと考えられるが、明確ではない。次に、第46・47号住居跡は、貯蔵穴の位置や規模、形状がほぼ同じである。しかし、第46号住居跡には間仕切り溝や柱穴が検出されているが、第47号住居跡には検出されていないことなどの違いが認められた。それぞれ、遺物の出土状況などから工場の可能性が想定でき、作業や使用目的が内部施設の違いに反映されていると考えられる。

第46号住居跡では滑石製品や滑石剥片（荒削品、砕片）、砥石に転用された甕の底部などが出土しており、滑石製模造品を製作していた可能性が指摘できる。東側に位置する第63号住居跡は、この時期の住居の中では調査3区の第46号住居跡に次ぐ規模で、一辺が8mを超える方形の住居跡である。この住居跡でも、滑石製模造品（白玉、双孔円板、勾玉）の他に、滑石石核、滑石剥片（荒削品、形削品、砕片）、さらには滑石製の紡錘車も出土しており、滑石製模造品を用いた住居廃絶に伴う祭祀的な行為や滑石製模造品や製品を製作していた可能性がある。

一方、調査3・4区では、この時期の住居跡は西側斜面寄りに多く検出されている。東側や南側ではまばらで、主軸方向や規模、形状に類似性が認められない。その中で注目されるのは、調査3区の第9・19・23号住居跡である。「ナギ山1」では、石製品製作跡について「生産に必要な工作用施設をもち、生産において必然的に伴う工作道具を保有し、完成された製品あるいは製作途上の遺物を出土することが決め手になる」とし、「製作跡の可能性が高い3軒は（中略）ほぼ50～60mの距離で位置している。」としている。第46・63号住居跡（調査2区）、ナギ山第9・19・23号住居跡（調査3区）を見ると、第46号住居跡は他の住居跡より小規模であるが、「ナギ山1」での指摘通り、2軒の住居跡がほぼ50～60mの間隔で分布していることが分かる。

Ⅷ期の住居跡は5軒で、調査2区に2軒、調査3区に3軒確認されており、いずれも竈が付設され、1軒は台地の下に位置している。これら5軒の規模や形状を比較すると、規模の小さい第1号住居跡（調査3区）を除いて、あまり違いを見出すことはできない。次に、屋内施設を比較すると、調査2区の2軒はいずれも出入り口施設が南側に、貯蔵穴は南東コーナーにそれぞれ位置しており、炉は東壁寄りに位置している。第12号住居跡（調査3区）も同様で、出入り口施設は南側に、貯蔵穴は南東コーナーにそれぞれ位置しており、竈は東壁に付設されている。このことは、「前代までの南指向する入口を変更せずに、入口両脇のいずれかに竈を設置し、それ以降、入口の位置を変えずに竈貯蔵穴の位置をその対面に設置する型が生ずると共に、竈だけが移動した住居（中略）が生じた³¹。」という指摘に合致するもので、炉と竈の違いは認められるが、これら3軒には規模や形状にあまり差がない。ナギ山第25号住居跡（調査3区）については、出入り口施設が検出されていないことを除いて大きな差異は認められない。さらに、第57・59号住居跡から出土した甕は、最大径が体部中位付近にあり、茨城県南部における中期後葉の様相を示している。以上のように、これら4軒から出土した土器には時期的な差があまり認められず、竈の有無についての違いを明確にすることもできなかったが、少なくとも中期後葉の中で調査2区の2軒が先行して構築され、その後、調査3区の3軒が構築された想定される。

該期の住居跡は、栗師入・ナギ山両遺跡の広範囲に広がっている。Ⅴ期はⅣ期に引き続き北側にわずかに確認される程度であったが、Ⅵ期に入ると栗師入・ナギ山両遺跡全体に広がりを見せ、Ⅷ期は古墳時代前期同様に一時的な衰退期を迎える。



第291図 古墳時代遺構配置図（後期）

③ 古墳時代後期

古墳時代後期における時期区分や竈を持つ住居跡の特徴については「ナギ山遺跡1」に述べられている。重複することを避けるためここでは詳しく述べることはしないが、本項の冒頭で述べたように、調査による類例の増加で「中期後葉（5世紀後葉）」まで細分できることとなり、「5世紀後半」の住居跡について帰属時期を再検討し、修正を加えたので概略を述べることにする。

時期が明確に判断できる住居跡は28軒で、出土遺物や遺構の形状などから時期を細分するとⅦ期（5世紀末葉から6世紀初頭）、Ⅷ期（6世紀前葉）、Ⅸ期（6世紀中葉）に分けることができる。

Ⅶ期に比定される住居跡は14軒（調査2区で1軒、調査3区で13軒）確認されており、この時期の中心はナギ山遺跡に移動したと考えられる。この時期から古墳時代後期としてとらえることができ、すべての住居跡に竈が付設されるようになる。例外として、第8号住居跡では炉や竈などの屋内施設が確認されておらず、住居としての機能を有していたとは考えにくい。

表23 薬師入遺跡・ナギ山遺跡古墳時代後期住居跡一覧

番号	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	竈	前室	時期	番号	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	竈	前室	時期
67	方形	7.46×7.44	竈1	1	5世紀末～6世紀初頭	66	方形	6.80×6.76	竈1	1	6世紀前葉
N6	方形	4.7×4.4	竈1	1	5世紀末～6世紀初頭	N18	方形	6.1×5.9	竈1	2	6世紀前葉
N8	長方形	4.9×4.3	-	-	5世紀末～6世紀初頭	N27	方形	5.1×5.0	竈1	1	6世紀前葉
N11	方形	4.2×4.1	竈1	1	5世紀末～6世紀初頭	N28	方形	8.6×8.5	竈1	1	6世紀前葉
N13	方形	6.0×5.8	竈1	1	5世紀末～6世紀初頭	N30	方形	5.6×5.5	竈1	1	6世紀前葉
N14	方形	6.5×6.4	竈1	-	5世紀末～6世紀初頭	N31	方形	5.7×5.7	竈1	1	6世紀前葉
N20	方形	5.3×4.9	竈1	1	5世紀末～6世紀初頭	N35	方形	7.0×6.8	竈1	1	6世紀前葉
N21	長方形	5.3×4.0	竈1	-	5世紀末～6世紀初頭	N36	方形	5.3×5.0	竈1	1	6世紀前葉
N22	方形	6.3×6.2	竈1	-	5世紀末～6世紀初頭	N38	方形	5.6×5.5	竈1	1	6世紀前葉
N24	方形	6.0×5.8	竈1	1	5世紀末～6世紀初頭	N40	方形	8.6×8.3	竈1	1	6世紀前葉
N29	方形	5.6×5.1	竈1	1	5世紀末～6世紀初頭	N41	方形	8.8×8.8	竈1	2	6世紀前葉
N37	方形	6.7×6.5	竈1	1	5世紀末～6世紀初頭	N42	方形	6.9×6.8	竈1	1	6世紀前葉
N43	方形	4.9×4.7	竈1	1	5世紀末～6世紀初頭	N16	方形	5.7×5.3	竈1	1	6世紀中葉
N44	方形	4.5×4.4	竈1	1	5世紀末～6世紀初頭	N26	方形	3.3×3.3	竈1	-	6世紀中葉以前

Ⅷ期の住居跡は12軒（調査2区で1軒、調査3区で11軒）で、前代に引き続いてナギ山遺跡が中心である。中央部の第28号住居跡と東側の第40～42号住居跡、南東側の第35号住居跡はすべてが西竈で、竈の左側に貯蔵穴が配置されている。第28・40・41号住居跡は一辺が8mを超える方形、第35号住居跡は7m台の方形、第42号住居跡が一辺が6m台の方形で、規模にやや違いが見られるものの形状は同じである。また、第35号住居跡（N-128-W）を除く4軒の主軸方向はN-114°・115°-Wなどの類似点が多いことなどから同時期の住居である可能性が想定される。しかし、屋内施設には若干の違いが認められ、第35・40・41号住居跡は出入り口が南側、第42号住居跡は出入り口が北側にあったと考えられる。

Ⅸ期の住居跡は2軒しか確認されておらず、この時期を境に薬師入・ナギ山両遺跡は一時的に集落は断絶

するのである。

再び集落が営まれるのは10世紀に入ってからと考えられ、中世の地下式坑や墓坑が確認されていることから、中世以降は墓域であった可能性が高い。

5 終わりに

本稿は、薬師入遺跡・ナギ山遺跡を“一つの遺跡”としてとらえ、その主体である弥生時代と古墳時代に限定して集落の動態について述べてきた。弥生時代の住居は、北部の浅い谷を挟んで南北にそれぞれ位置しており、隅丸方形（方形を含む）と隅丸長方形（長方形を含む）の住居跡では時期差があると想定することができた。また、古墳時代の集落は薬師入遺跡・ナギ山遺跡全体に確認されているが、前期から後期へという移り変わりの中で、集落は北から南へという動態を示すことも確認された。

しかし、『薬師入遺跡1』で報告された土器の変遷や住居形態の変遷、『ナギ山遺跡1』で報告された滑石製模造品や工房について、それぞれ資料が増加したにもかかわらず全体的に触れることができなかったことなど、残された課題は多い。また、第104・125号住居跡から出土した弥生土器に付着している煤について、放射性炭素年代測定を実施したが、分析結果は、茨城県南部地域の弥生時代後期後半の弥生土器の年代観よりも古いという結果であった。

今後、土器の変遷や住居形態の変遷、滑石模造品やその工房跡については、機会を捉えてその様相を明らかにしたいと考えている。さらに、放射性炭素年代測定結果については事例の増加を待って再検討したい。

註

- 1) 勝澤悦郎「薬師入遺跡 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第239集 2005年3月
- 2) 石川義信・後藤孝行「ナギ山遺跡1・柏峯B遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第233集 2005年3月
- 3) 栗田功「ナギ山遺跡2 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第277集 2007年3月
- 4) 古墳時代の時期判別については、『薬師入1』において「土器編年については、2003年に浅井哲也氏が茨城県の古墳時代前期6期区分と、鹿ヶ崎市及びつくば市出土の土器編年などを示しているが、本報告における時期の判定については、浅井編年を基に先行研究の諸説を加味して判断した。また、本報告書内では浅井編年に対応させ表記している。」とあるように『薬師入2』でも浅井編年に従いたい。
浅井哲也「茨城県における古墳時代前期の土器」『領域の研究—阿久津久先生還暦記念論集—』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年4月
- 5) ア. 緑川正實・海老澤稔「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原田北遺跡Ⅰ 原田西遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第80集 1993年3月
イ. 江幡良夫「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 原田北遺跡Ⅱ 西原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第85集 1994年3月
- 6) 『薬師入1』では、「古墳時代中期」の住居跡が6軒確認されており「中期前葉（5世紀前葉）」や「中期中葉（5世紀中葉）」としており、本報告もそれに準拠していることは註5での述べたとおりである。今回、平成18年度の調査による類例の増加で「中期後葉（5世紀後葉）」まで細分できることとなった。本論は、薬師入遺跡・ナギ山遺跡の古墳時代を“一つの大きな遺跡”として『薬師入1』の年代観に従って論ずることとする。
中期から後期にかけての年代観については、櫻村宣行氏の編年に基づき、以下の文献を参考にした。
ア. 櫻村宣行他「茨城県における5世紀の動向」『東国土器研究』5号 1995年5月
イ. 櫻村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』第2号 茨城県教育財団 1993年7月
ウ. 櫻村宣行「和泉式土器編年考—茨城県を中心として—」『研究ノート』第5号 茨城県教育財団 1996年6月

- 7) ア. 加藤修司「上総地方の土器編年案」『研究紀要21』財団法人千葉県文化財センター 2000年9月
 イ. 加藤修司「草刈遺跡土器編年の検証」『研究紀要4』財団法人印旛都市文化財センター 2004年3月
 ウ. 田中裕「五領式から和泉式への転換と中期古墳」『研究報告第11集』帝京大学山梨文化財研究所 2003年3月
 加藤氏は、「草刈遺跡土器編年の検証」の中で「口縁部の刻目は在地の系譜と認められる一方で、(中略)、くの字口縁、(中略)、庄内式の系譜を想定すべきである。」と述べている。
- 8) 註7)に同じ。
 加藤氏は、「在地系平底甕に脚台が付いたもの」としており、脚台が内灣するのであれば「東海地方西部に繋がる可能性もある。」としている。
- 9) 石野博信他「集落と豪族居館」『古墳時代の研究』第2巻 雄山閣 1990年6月

参考文献

- ・ 小玉秀成「常陸地域における弥生土器編年の大枠」『霞ヶ浦沿岸の弥生文化－土器からみた弥生社会－』霞ヶ浦町郷土資料館 1998年8月
- ・ 穴沢義功「関東地方を中心とした古代製鉄遺跡研究の現状と課題」『日本古代の鉄生産』たたら研究会 1987年1月
- ・ 加藤修司「上総地方の土器編年案」『研究紀要21』財団法人千葉県文化財センター 2000年9月
- ・ 加藤修司「草刈遺跡土器編年の検証」『研究紀要4』財団法人印旛都市文化財センター 2004年3月
- ・ 比田井克人「土器移動の類型と原理－弥生後期から古墳時代前期の東日本を対象として－」『法政考古学第30集記念論文集』法政考古学会 2003年11月

付 章 1

薬師入遺跡出土炭化材の樹種同定

野村敏江 (バレオ・ラボ)

1 はじめに

薬師入遺跡は茨城県稲敷郡阿見町吉原に位置する。阿見町は、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部である筑波・稲敷台地と河川流域の低地で構成される。薬師入遺跡は桂川左岸の標高24.1~25mの舌状台地上に立地している。ここでは、薬師入遺跡の第46・66・74・80・95号住居跡から出土した、古墳時代前期から後期のものと考えられている炭化材20試料の樹種同定結果について報告する。

2 炭化材樹種同定の方法

炭化材樹種同定を実施する炭化材を選び出す際には、材の3方向の断面(横断面・接線断面・放射断面)を作成することが可能な大きさの炭化材を選び出した。次に、走査電子顕微鏡写真を撮影するため、材の3方向の断面を作成し材組織を観察、撮影した。走査電子顕微鏡用の試料は3断面を5mm角程度の大きさに整形したあと、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し試料台を作成した。この後試料台を乾燥させ、金蒸着を施し走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で撮影を行った。同定を行った試料のうち、各分類群を代表する試料については写真図版(図版1)を添付し、同定結果を記載した。

3 結果と考察

各試料の樹種同定結果の一覧を表1に示した。同定の結果、ハンノキ属ハンノキ亜属(以下、ハンノキ亜属)が1点とコナラ属コナラ亜属クスギ節(以下、クスギ節)が19点の計2分類群の樹種が同定された。各住居跡間での樹種構成の違いは認められなかった。

当時の本遺跡の周辺植生について検討する。本遺跡では、クスギ節が優占して産出することが特徴的であった。現在、クスギ節は関東地方においてクスギ-コナラ林として広く成立するとされており(宮脇1977)、当時の遺跡周辺でもクスギ-コナラ林は存在したと考えられる。また、クスギ節は川沿いの沖積地など土壌水分の多い土地に生育するとされていること(宮脇1977)、1点ながらも低湿地などの環境を好むハンノキ亜属が同定されたことは、本遺跡周辺に湿潤な環境が存在しそれに対応した植生が成立していたことを示していると考えられる。また、日本各地の樹種同定結果の集計を行った山田(1993)による集計をみると、4世紀以前~7世紀の時期の関東地方の建築材はクスギ節が多用される傾向があるとしている。山田(1993)は当時の建築材の用材傾向として、遺跡近隣の高木を利用したことを推定している。本遺跡の樹種同定結果でも、当時の周辺植生と材利用の傾向を反映しているものと考えられた。

次に同定された樹種の材組織について記載を行なう。

(1) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* subgen. *Alnus* カバノキ科 図版1 1a-1c(No.15)

単独または複合した道管が接線状に連なる。道管径は中庸からやや小の散孔材である。集合放射組織は年輪界で内側に凹む。放射組織は単列で同性であり、集合放射組織がある。道管の穿孔は階段数20程度の階段穿孔である。ハンノキ亜属には、ハンノキ、ケヤマハンノキなど7種がある。

(2) コナラ属コナラ亜属クスギ節 *Quercus subgen. Quercus sect. Cerris* ブナ科 図版 1 2a-2c(No. 2)

大径の道管が年輪界において並び、孔圏外の道管は径を減じた円形の小道管が放射方向に並ぶ環孔材である。放射組織は同性で単列であるが集合放射組織も伴う。道管の穿孔は単穿孔で、道管と放射組織の壁孔には柵状の壁孔が認められる。クスギ節にはクスギとアベマキがあり、本州(岩手県・山形県以南)・四国・九州に分布する高さ30mの落葉高木である。丘陵から山地に生育する。

引用文献

- 宮脇 昭 (1977) 二次林Ⅰ クスギ-コナラ林。「日本の植生」: 94-99, 学習研究社。
 山田昌久 (1993) 日本列島における木質出土遺跡文献集成-用材からみた人間・植物関係史。植生史研究特別第1号, 242p。

表1 薬師入遺跡出土炭化材の樹種同定結果

No.	出土場所	遺物 No.	出土位置	樹種	PLD 番号
1	第46号住居	26	北西コーナー寄り	クスギ節	
2	第46号住居	43	南壁付近	クスギ節	PLD-7029
3	第46号住居	50	西壁際	クスギ節	
4	第46号住居	59	北東コーナー寄り	クスギ節	
5	第66号住居	9	西壁際	クスギ節	
6	第66号住居	11	北西コーナー壁際	クスギ節	
7	第66号住居	15	北東コーナー壁際	クスギ節	
8	第66号住居	19	東壁際	クスギ節	PLD-7030
9	第74号住居	17	北西壁際	クスギ節	
10	第74号住居	18	中央部北寄り	クスギ節	
11	第74号住居	27	中央部	クスギ節	PLD-7031
12	第74号住居	28	南コーナー寄り	クスギ節	
13	第80号住居	1	南西壁際	クスギ節	
14	第80号住居	8	北東壁際	クスギ節	
15	第80号住居	6	北東壁際	ハンノキ亜属	PLD-7032
16	第80号住居	11	北東壁際	クスギ節	
17	第95号住居	11	北東壁際	クスギ節	
18	第95号住居	15	南東壁際	クスギ節	
19	第95号住居	18	南西壁際	クスギ節	
20	第95号住居	20	中央部	クスギ節	PLD-7033

付 章 2

薬師入遺跡の放射線炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

小林絢一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫

Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani・藤根 久・野村敏江

1 はじめに

茨城県稲敷郡阿見町・薬師入遺跡より検出された土器付着物および炭化材試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

測定試料の採取において、土器付着物は藤根が採取し、炭化材は野村が採取し樹種同定を行った。試料の調製は山形、瀬谷、Lomtadize、Jorjoliani が、測定は小林、丹生、伊藤が行い、報告書は伊藤・藤根が担当した。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた¹⁴C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C 年代、暦年代を算出した。

表 1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-6888	遺構：第104号住居址 遺物 No. 4 層位：南西壁階床面出土 その他：土器洗浄済み	試料の種類：土器付着物・外面 (煤類) 試料の性状：鉢胴部下部 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム0.2N、塩酸1.2N)	PaleoLabo・ NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6889	遺構：第125号住居址 遺物 No. 3と5 層位：2点とも北西壁寄り出土 その他：土器洗浄済み	試料の種類：土器付着物・外面 (煤類、 ふきこぼれ) 試料の性状：鉢の口縁部～胴部下部 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム0.2N、塩酸1.2N)	PaleoLabo・ NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-7029	遺構：第46号住居址 遺物 No. 43 層位：南壁付近出土 その他：丸材	試料の種類：炭化材 (クスギ節・2年輪) 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分 を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N)	PaleoLabo・ NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-7030	遺構：第66号住居址 遺物 No. 19 層位：東壁階出土 その他：丸材部分なし	試料の種類：炭化材 (クスギ節・1年輪) 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分 を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N)	PaleoLabo・ NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-7031	遺構：第74号住居址 遺物 No. 27 層位：中央部出土 その他：丸材	試料の種類：炭化材 (クスギ節・4年輪) 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分 を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N)	PaleoLabo・ NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-7032	遺構：第80号住居址 遺物 No. 6 層位：北東壁階出土 その他：丸材	試料の種類：炭化材 (散孔材・5年輪) 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分 を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N)	PaleoLabo・ NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-7033	遺構：第95号住居址 遺物 No. 20 層位：中央部出土 その他：丸材ではない	試料の種類：炭化材 (クスギ節・3年輪) 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分 を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N)	PaleoLabo・ NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH

3 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った ^{13}C 年代、 ^{13}C 年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{13}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{13}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{13}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{13}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の実験的誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{13}C 年代がその ^{13}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

※ 暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{13}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{13}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{13}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{13}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{13}C 年代の暦年較正にはOxCal3.10 (較正曲線データ: INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{13}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{13}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{13}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)
			1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
PLD-6888	-26.89 \pm 0.16	1895 \pm 20	<u>80AD (68.2%)</u> 130AD	<u>50AD (93.0%)</u> 180AD 190AD (2.4%)210AD	1895 \pm 22
PLD-6889	-24.92 \pm 0.17	1900 \pm 20	<u>75AD (68.2%)</u> 125AD	20AD (1.0%)40AD <u>50AD (94.4%)</u> 140AD	1902 \pm 22
PLD-7029	-28.64 \pm 0.22	1635 \pm 20	<u>380AD (68.2%)</u> 440AD	<u>340AD (81.0%)</u> 470AD 480AD (14.4%)540AD	1636 \pm 22
PLD-7030	-28.21 \pm 0.22	1640 \pm 20	<u>385AD (68.2%)</u> 430AD	<u>340AD (84.4%)</u> 460AD 480AD (11.0%)540AD	1638 \pm 21
PLD-7031	-30.27 \pm 0.23	1840 \pm 20	<u>130AD (68.2%)</u> 215AD	90AD (2.2%)100AD 120AD (93.2%)240AD	1842 \pm 22
PLD-7032	-27.6 \pm 0.22	1680 \pm 20	<u>340AD (68.2%)</u> 405AD	260AD (8.3%)290AD <u>320AD (87.1%)</u> 420AD	1681 \pm 22
PLD-7033	-28.47 \pm 0.19	1845 \pm 20	<u>130AD (68.2%)</u> 215AD	90AD (2.4%)100AD 120AD (93.0%)240AD	1844 \pm 21

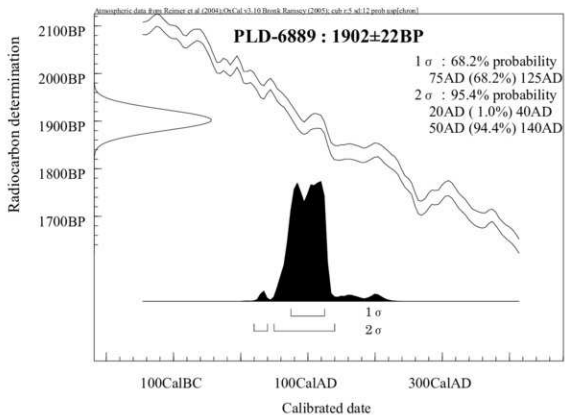
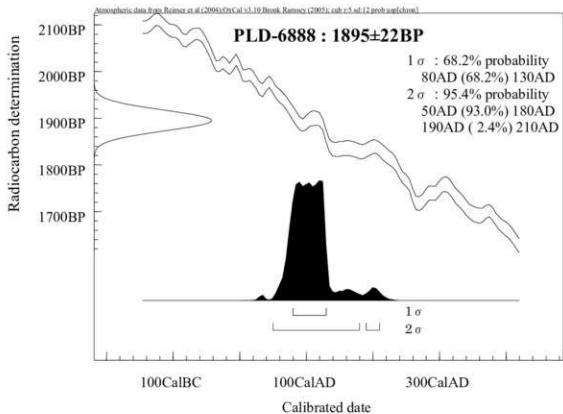
4 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

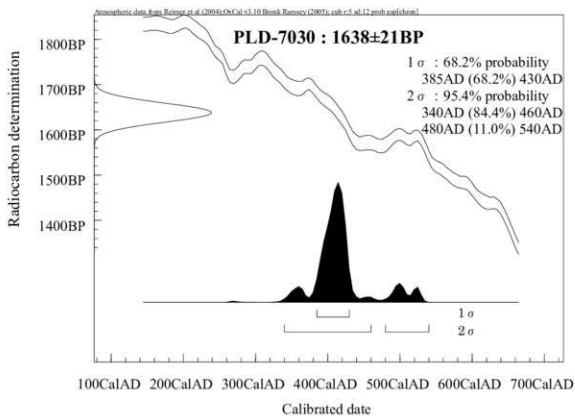
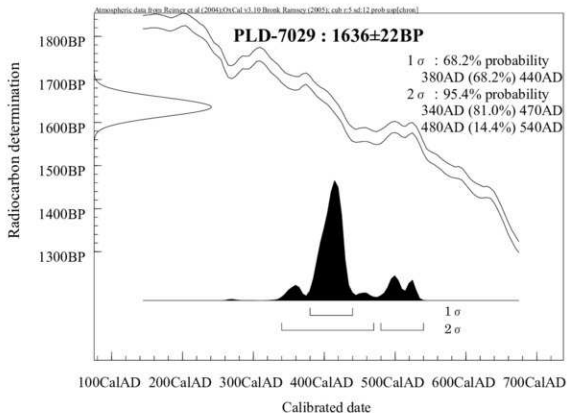
- (1) 第104号住居跡 (PLD-6888) と第125号住居跡 (PLD-6889) から出土した土器の付着物の年代は、
1 σ 暦年代範囲において80-130 cal AD (68.2%) および75-125 cal AD (68.2%)、2 σ 暦年代範囲において50-180 cal AD (93.0%) および50-140 cal AD (94.4%) であり、想定年代よりも古い年代範囲が示された。
これらの付着物は $\delta^{13}\text{C}$ の値が-26.89および-24.92であることから、海産物の混入の可能性は低い。
- (2) 第46号住居跡の炭化材 (PLD-7029) は、古墳時代中期と想定されているが、1 σ 暦年代範囲において380-440 cal AD (68.2%)、2 σ 暦年代範囲において340-470 cal AD (81.0%) であった。
- (3) 第66号住居跡の炭化材 (PLD-7030) は、古墳時代後期と想定されているが、1 σ 暦年代範囲において385-430 cal AD (68.2%)、2 σ 暦年代範囲において340-460 cal AD (84.4%) であった。
- (4) 第74号住居跡の炭化材 (PLD-7031) は、古墳時代前期と想定されているが、1 σ 暦年代範囲において130-215 cal AD (68.2%)、2 σ 暦年代範囲において120-240 cal AD (93.2%) であった。
- (5) 第80号住居跡の炭化材 (PLD-7032) は、古墳時代前期と想定されているが、1 σ 暦年代範囲において340-405 cal AD (68.2%)、2 σ 暦年代範囲において320-420 cal AD (87.1%) であった。
- (6) 第95号住居跡の炭化材 (PLD-7033) は、古墳時代前期と想定されているが、1 σ 暦年代範囲において130-215 cal AD (68.2%)、2 σ 暦年代範囲において120-240 cal AD (93.0%) であった。

参考文献

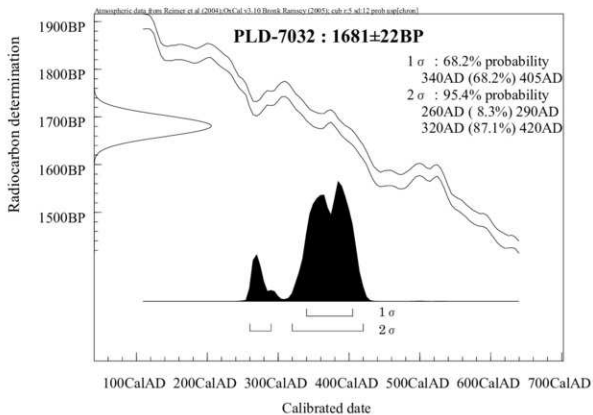
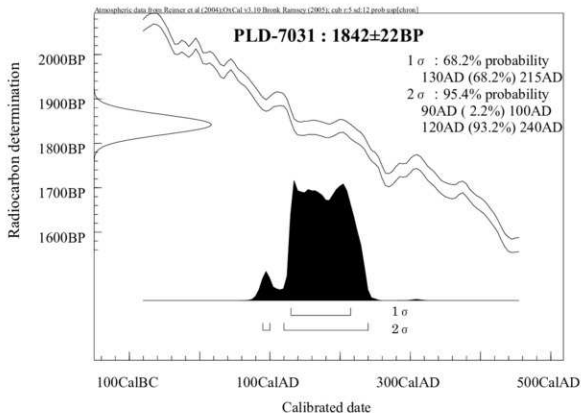
- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, *Radiocarbon*, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{13}C 年代, 3-20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, *Radiocarbon*, 46, 1029-1058.



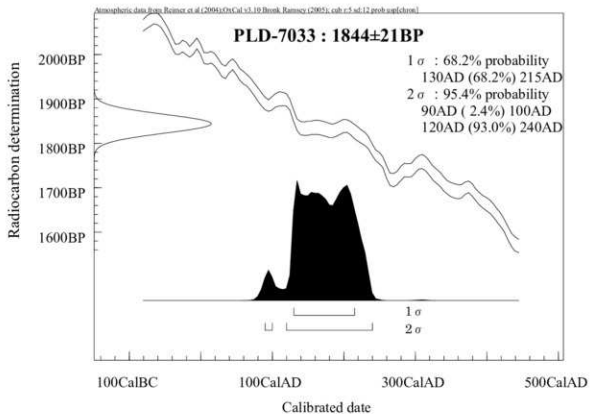
グラフ 1・2



グラフ 3・4



グラフ 5・6



グラフ

付 章 3

葉師入遺跡第78号住居跡の土壤に係る自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

茨城県阿見町に所在する葉師入遺跡は、常陸台地の南西部を構成する筑波稲敷台地東部を流れる桂川左岸の台地上に位置する。遺跡の位置する付近の台地は、下末吉海進により形成された海成面により構成されている（貝塚ほか編,2000）。

これまでに行われた発掘調査により、葉師入遺跡は、弥生時代前期から古墳時代前期および中期を主体とする集落遺跡とされている。平成18年度に行われた第3次発掘調査では、多数の竪穴住居跡と土坑および道路跡、溝跡などが検出され、それらの遺構に伴い土器などの多数の遺物も出土している。

検出された竪穴住居跡の中には、床面より粒状滓400点以上が出土し、赤変して硬化した火床部をもつ炉跡が検出され、羽口に転用されたと考えられる器台が出土したことなどから、鍛冶に関連する工房の可能性があるとされた竪穴住居跡が認められている。その竪穴住居跡の床面には、周囲の土よりもやや褐色味の強い色調を呈する土も認められており、この土の色調も鍛冶に関連して生じた鉄分由来による錆が原因ではないかとの所見が示されている。

本報告では、上記の土を対象とし、その色調の由来について土壌理化学的の側面から分析を行うことにより検証し、鍛冶に関連する事象である可能性を検討する。

2 試料

試料は、葉師入遺跡第3次調査で検出された第78号住居跡より採取された土壌2点である。第78号住居跡は、一辺約4.5mの方形を呈する竪穴住居跡であり、上述したように、粒状滓や炉跡、転用された器台などが確認されたことから、鍛冶に関連する工房であった可能性があるとされている。時期は、出土した土師器の型式から、五領式期と考えられている。

採取された試料は、検体1、検体2とされ、検体1は第78号住居跡内の貯蔵穴の東側に認められた錆が含まれると思われた褐色味の色調のやや強い土であり、検体2はその比較対照として採取された同貯蔵穴の南側の壁の土である。分析結果を呈示した表1に示すように、検体1は褐色を呈するシルト分の多い土壌であり、検体2は暗褐色を呈するやや粘土分の多い土壌である。

3 分析方法

ここでは、褐色の色調の由来を土壌中に含まれる酸化鉄または腐植にあると考え、土壌中に含まれるこれらの含有量を調べる。さらに、鉄分については、土壌中における色調の主な要因となっている遊離酸化鉄の存在形態（非晶質あるいは結晶質、結晶質の場合はその鉱物名など）も明らかにすることとし、鉄の活性度・結晶化指数およびX線回折分析を行う。以下に各分析の処理手順を述べる。

(1) 土壌化学分析

腐植含量はチユールン法、全鉄はフッ化水素酸分解-原子吸光法（土壌環境分析法編集委員会編,1997）で行い、酸性シュウ酸塩可溶鉄、ジチオナイトクエン酸可溶鉄については Acid-oxalate 法、Holmgren 法に従い定量し、永塚（1973）の方法により鉄の活性度・結晶化指数を算出した。以下に各項目の操作工程を示す。

1) 試料調製

試料を風乾後、土壌を軽く崩して 2mm の篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を振動ミル（平工製作所製 T1100：10ml 容タンクステンカーバイト容器）で微粉砕し、微粉砕試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2) 腐植含量

微粉砕試料 0.100～0.500 g を 100ml 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4 N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。測定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org-C 乾土%) を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

3) 全鉄

微粉砕試料約 0.50 g をテフロンビーカーに精秤し、硝酸 5ml および過塩素酸 5ml を加え、時計皿で覆い、サンドバス上で有機物を分解する。過塩素酸の白煙が激しく出てきた後、過塩素酸 5ml とフッ化水素酸 10ml を加え、内容物を蒸発乾固させる。放冷後、6 N-HCL 5ml、硝酸 1ml を加え加熱し、内容物を軽く溶解させた後、蒸留水 30ml を加え、内容物を完全に溶解させる。放冷後、100ml に定容する。この定容液を適宜希釈し、原子吸光光度計により鉄 (Fe) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄 (Fe%) の含量を求める。

4) 酸性シュウ酸塩可溶鉄 (Acid-oxalate 法)

微粉砕試料 300mg に 0.2M 酸性シュウ酸塩溶液 (pH 3) を 30ml 加え、暗所で 4 時間振とうする。振とう後、0.4% 高分子凝集剤を 2 滴加えて軽く振とうした後、3000rpm で 15 分間遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計により鉄 (Fe) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄 (Fe%) の含量を求める。

5) ジチオナイトクエン酸可溶鉄 (Holmgren 法)

微粉砕試料 500mg に DCB 抽出液 30ml を添加して 16 時間振とうする。振とう後、0.4% 高分子凝集剤を 2 滴加えて軽く振とうした後、遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計により鉄 (Fe) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄 (Fe%) の含量を求める。

(2) X線回折分析

105℃で 4 時間乾燥させた試料をメノウ乳鉢で微粉砕し、X線回折用アルミニウムホルダーに充填し、X線回折分析試料（無定方位試料）を作成した。作成した X線回折測定試料について以下の条件で測定を実施した。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. の X線回折パターン処理プログラム JADE を用い、該当する化合物または鉱物を検索した。

装 置：理学電気製 MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu(K α)	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite 湾曲	Receiving Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning Speed：2° /min
Current：40Ma	Scanning Mode：連続法
Detector：S C	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：2~45°

4 結果

(1) 土壌化学分析

土壌化学分析結果を表1に示す。腐植含量は、2点の試料ともに約3%ほどであり、ほとんど違いはない。

表1 土壌科学分析結果

試料名	説明	土性	土色	腐植 (%)	全鉄 Fe _t (%)	DCB可溶鉄 Fe _c (%)	酸性シロ酸 塩可溶鉄 Fe _o (%)	活性度 Fe _o /Fe _c	結晶化指数 (Fe _o -Fe _c) /Fe _c
検体1	貯蔵穴東側の藪が含まれると思われる土	SIL	10YR4/4 褐	2.88	8.38	4.73	3.24	0.68	0.18
検体2	貯蔵穴南側壁の土	LIC	7.5YR3/4 暗褐	2.64	9.16	4.84	4.08	0.84	0.08

(備考)

(1) 土色：マンセル表色系に準じた新製標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

(2) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

SIL・・・シルト質壤土（粘土0～15%、シルト45～100%、砂0～35%）

LIC・・・軽壤土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

(3) 活性度：Fe_o/Fe_c

(4) 結晶化指数：(Fe_o-Fe_c)/Fe_c

全鉄の含有量では、検体1が約8%、検体2が約9%であり、検体2の方がわずかに多い。遊離酸化鉄の活性度は、検体1が約0.7、検体2が約0.8、結晶化指数は、検体1が約0.2、検体2が約0.1である。

(2) X線回折分析

X線回折図を図1に示す。なお、文中で（ ）内に示したものは、X線回折図で同定された鉱物名である。固溶体やポリタイプを有する鉱物については、X線回折試験では正確な同定は困難であるため、最終的な検出鉱物名としては、それらを含む大分類の鉱物名を使用している。

両試料の回折プロファイルは類似したパターンを示すことから、同様の鉱物組成を有することが示唆される。検出鉱物としては、石英 (quartz)、斜長石 (灰長石：anorthite)、緑泥石 (クライノクロア：clinochlore) のほか、磁鉄鉱 (magnetite)、赤鉄鉱 (hematite)、ギブサイト (gibbsite) の存在が認められている。

5 考察

検体1と検体2の土壌理化学性は、一般的な土壌分類（例えば褐色森林土や赤色土といった土壌の種類）という尺度でみれば、ほぼ同様であると評価され、また、X線回折で捉えられた鉱物組成も両者は同様である。すなわち、土壌分類が異なる程の違いは、両試料間には認められない。ただし、その中でわずかな性質の違いを指摘するとすれば、遊離酸化鉄の活性度と結晶化指数に認めることができる。

水塚（1973）によれば、土壌において酸性シュウ酸塩溶液に溶解する鉄は、非晶質珪酸鉄、非晶質水酸化

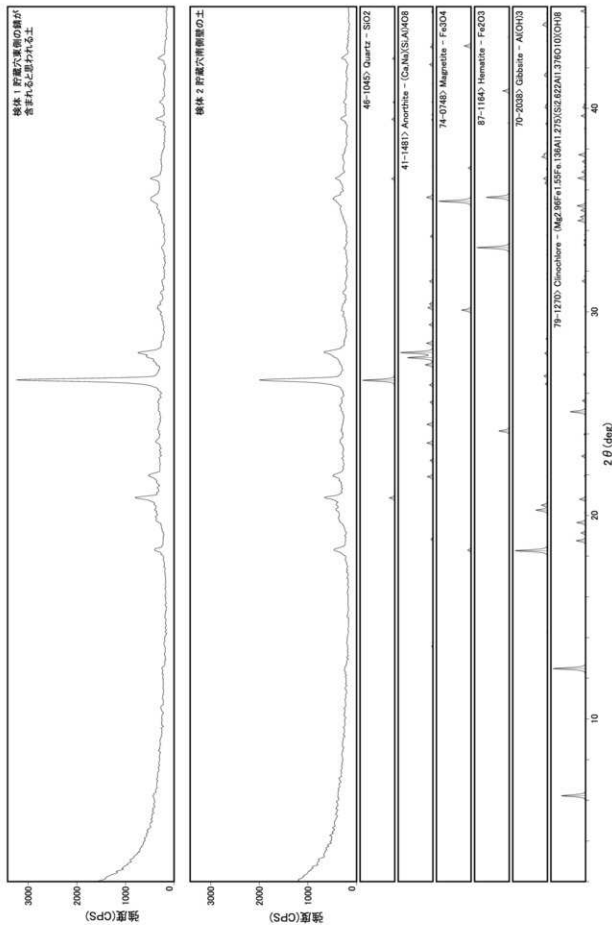


図1. X線回折図

鉄、磁鉄鉱、リン酸鉄などの大部分と針鉄鉱の一部とされ、ジチオナイトクエン酸溶液には、これらの鉄に加えて、大部分の針鉄鉱と赤鉄鉱（これらは結晶質遊離酸化鉄と呼ばれる）も溶解するとされている。したがって、遊離酸化鉄の活性度の値が低いほど、また、結晶化指数が高いほど、土壌中の遊離酸化鉄における結晶質の遊離酸化鉄の含まれる割合が高いことになる。

今回の分析結果では、検体1の方が、わずかではあるが結晶質の遊離酸化鉄の割合が高いと見ることができ、X線回折では、両試料から赤鉄鉱が確認されたことから、両試料における結晶質遊離酸化鉄のほとんどは赤鉄鉱であると考えられる。すなわち、検体1は、検体2に比べて、赤鉄鉱の含有量がやや多いことが推定される。一般に、土壌中における針鉄鉱は黄色味の色調の主たる要因であり、赤鉄鉱は赤味の色調の主たる要因とされている。このことから、周囲の土壌よりやや褐色味の強いとされた検体1の色調は、赤鉄鉱の含有量がやや多いことに起因する可能性がある。

なお、赤鉄鉱という鉱物自体は、様々な土壌において自然に含まれている鉱物ではあるが、検体1と検体2との間で認められたような極めて局所的な土壌間での赤鉄鉱の含有量の違いは、試料が採取された第78号住居跡の状況を考慮すれば、もともと土壌中に含まれていた赤鉄鉱に加えて、鍛冶作業で生じた鉄分の付加に由来する可能性もあると考えられる。

文献

- 農林省農林水産技術会議事務局監修、1967、新版標準土色帖、
土壌環境分析法編集委員会編、1997、土壌環境分析法、博友社、427p。
L.P.van Reeuwijk、1986、PROCEDES FOR SOIL ANALYSIS、International Soil Reference and Information Centre、106p。
永塚鎮男、1973、褐色森林土・黄褐色森林土・赤色土における遊離酸化鉄の存在形態について、ペドロジスト、17、70-83。

写 真 图 版

藥 師 入 遺 跡



第68号住居跡遺物出土状況



第106号住居跡遺物出土状況



第106号住居跡出土遺物



調査区北部
完掘状況



第1号石器集中地点
遺物出土状況



第2号石器集中地点
遺物出土状況

第103号住居跡
完掘状況



第104号住居跡
完掘状況



第104号住居跡
遺物出土状況





第105号住居跡
完掘状況



第106号住居跡
完掘状況



第106号住居跡
遺物出土状況



第107号住居跡
完掘状況



第108号住居跡
完掘状況



第109号住居跡
完掘状況



第127号住居跡
遺物出土・完掘状況



第128号住居跡
遺物出土・完掘状況



第131号住居跡
遺物出土・完掘状況

第45号住居跡
完掘状況



第45号住居跡
遺物出土状況



第46号住居跡
完掘状況





第46号住居跡
遺物出土状況



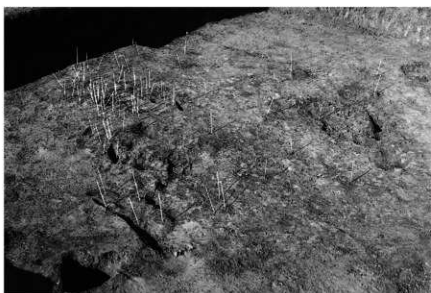
第47号住居跡
完掘状況



第47号住居跡
遺物出土状況(1)



第47号住居跡
遺物出土状況(2)



第47号住居跡
遺物出土状況(3)



第50号住居跡
完掘状況



第50号住居跡
遺物出土状況



第57号住居跡
完掘状況



第57号住居跡
遺物出土状況(1)

第57号住居跡
遺物出土状況(2)



第57号住居跡貯藏穴
遺物出土状況(3)



第62号住居跡
完掘状況





第62号住居跡
遺物出土状況



第63号住居跡
完掘状況



第63号住居跡
遺物出土状況

第 6 6 号 住 居 跡
完 堀 状 况



第 6 6 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 况



第 6 6 号 住 居 跡
完 堀 状 况





第67号住居跡
完掘状況



第67号住居跡
遺物出土状況



第67号住居跡
竈完掘状況



第 67 号住居跡
竈遺物出土状況



第 73 号住居跡
完掘状況



第 74 号住居跡
完掘状況



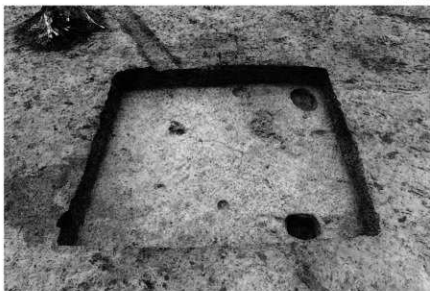
第74号住居跡
遺物出土状況(1)



第74号住居跡
遺物出土状況(2)



第75号住居跡
完掘状況



第78号住居跡
完掘状況



第78号住居跡
遺物出土状況



第80号住居跡
完掘状況



第80号住居跡
遺物出土状況



第81号住居跡
完掘状況



第81号住居跡
遺物出土状況

第 8 2 号 住 居 跡
完 堀 状 況



第 8 2 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 8 4 号 住 居 跡
完 堀 状 況





第86号住居跡
完掘状況

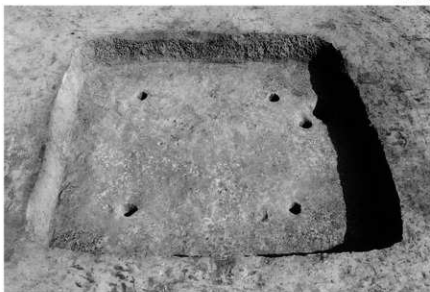


第86号住居跡
遺物出土状況



第94号住居跡
完掘状況

第96号住居跡
完掘狀況



第98号住居跡
完掘狀況



第98号住居跡
遺物出土狀況(1)





第98号住居跡
遺物出土状況(2)



第99号住居跡
完掘状況



第99号住居跡
遺物出土状況(1)

第99号住居跡
遺物出土状況(2)

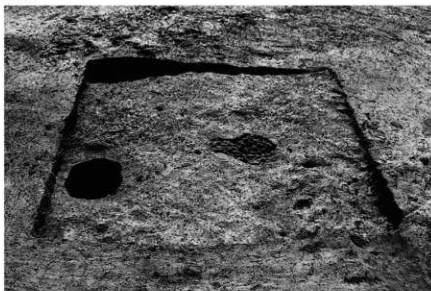


第100号住居跡
完掘状況



第101号住居跡
完掘状況

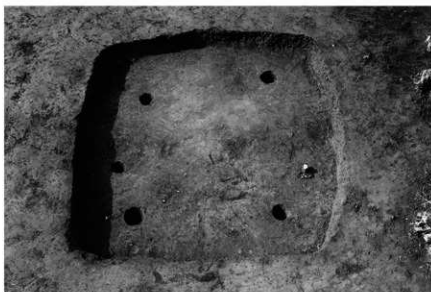




第111号住居跡
完掘状況



第113号住居跡
完掘状況



第115号住居跡
遺物出土・完掘状況

第116号住居跡
完掘状況



第121号住居跡
完掘状況



第122号住居跡
完掘状況





第132号住居跡
完掘状況



第132号住居跡
遺物出土状況



第661号土坑
遺物出土状況

第 40 号 住居 跡
遺物出土・完掘 状 況



第 89 号 住居 跡
完 掘 状 況



第 91 号 住居 跡
完 掘 状 況





第1・2・3号塚確認状況



第1号地下式坑完掘状況



第1号塚確認状況



第3号地下式坑完掘状況



第2号塚確認状況



第5号地下式坑完掘状況



第3号塚確認状況



第8号地下式坑完掘状況



第1号掘立柱建物跡完掘状況



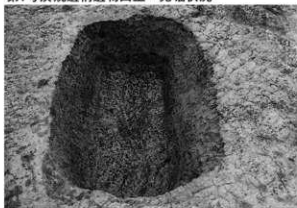
第2・3号掘立柱建物跡完掘状況



第1号炭焼遺構遺物出土・完掘状況



第2号炭焼遺構遺物出土状況



第4号炭焼遺構完掘状況



第9号炭焼遺構遺物出土状況



第10号炭焼遺構遺物出土・完掘状況



第12号炭焼遺構完掘状況



第104・107・128・131号住居跡，遺構外出土土器



第45号住居跡出土土器

















第74・78・99・106・110号住居跡出土土器













第46・47・62・63・67・104号住居跡出土土器

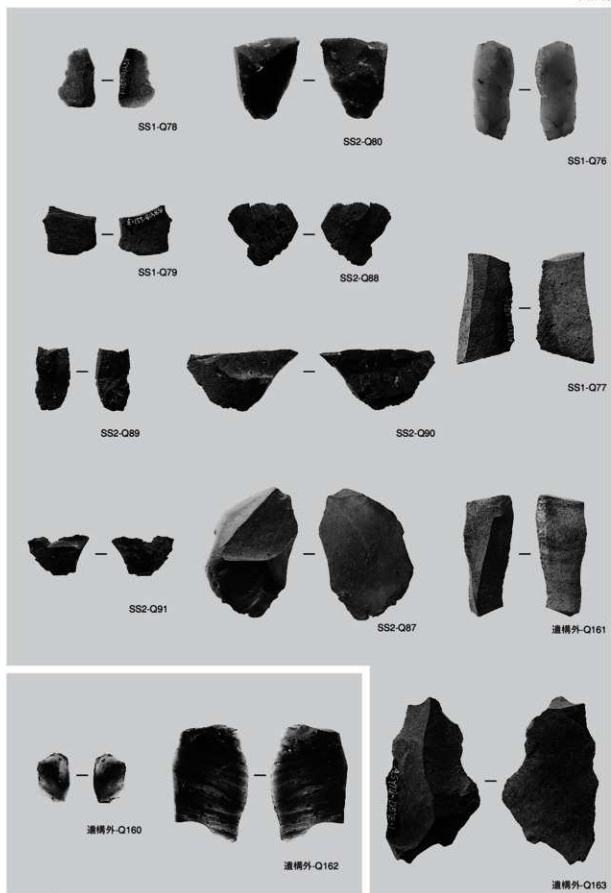




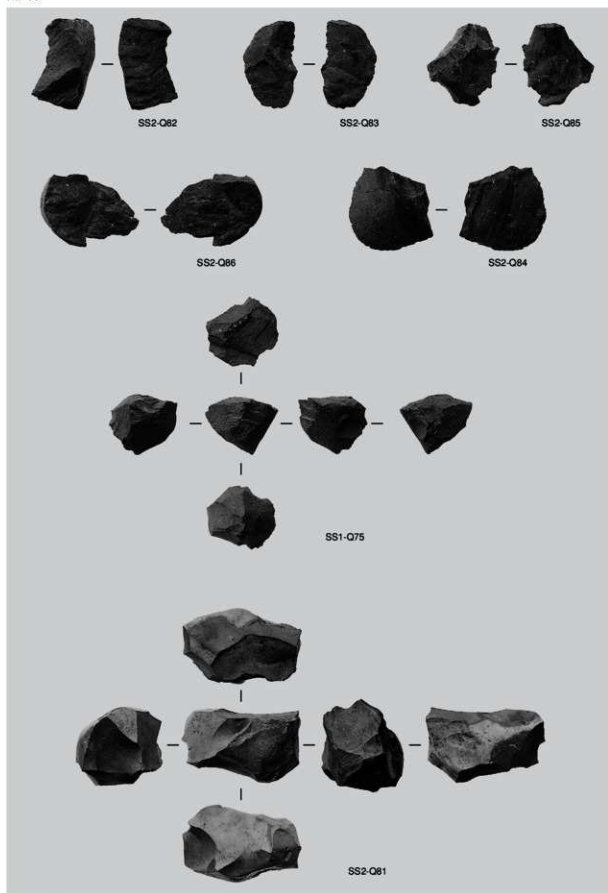
第60・74・80・87・98・116・117号住居跡，第458号土坑出土土器



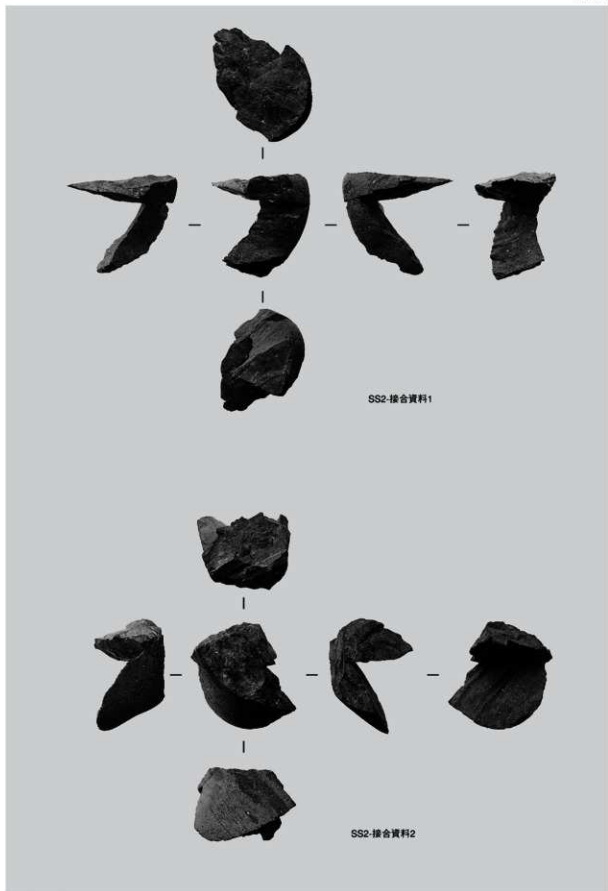
第40・57・98・117号住居跡，第2号地下式坑，遺構外出土土器



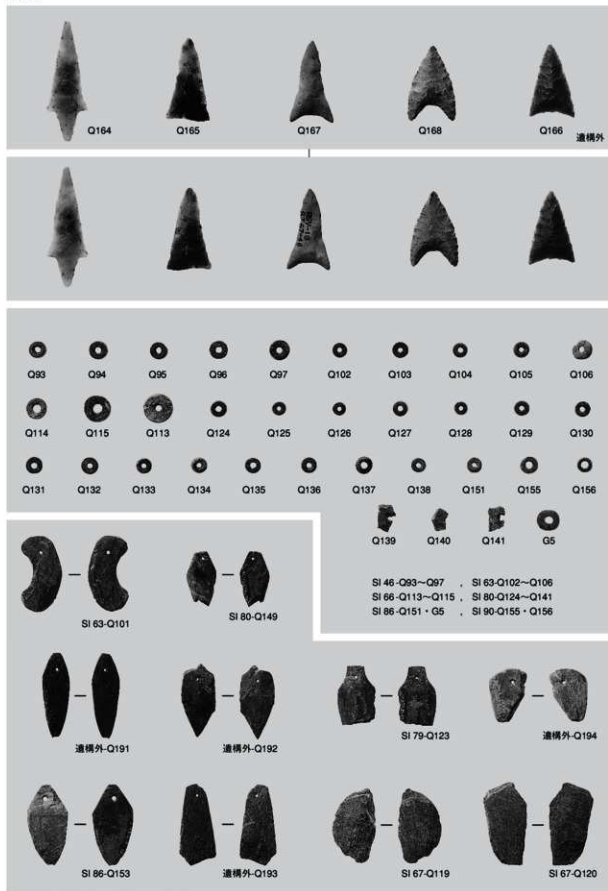
第1・2号石器集中地点，遺構外出土石器



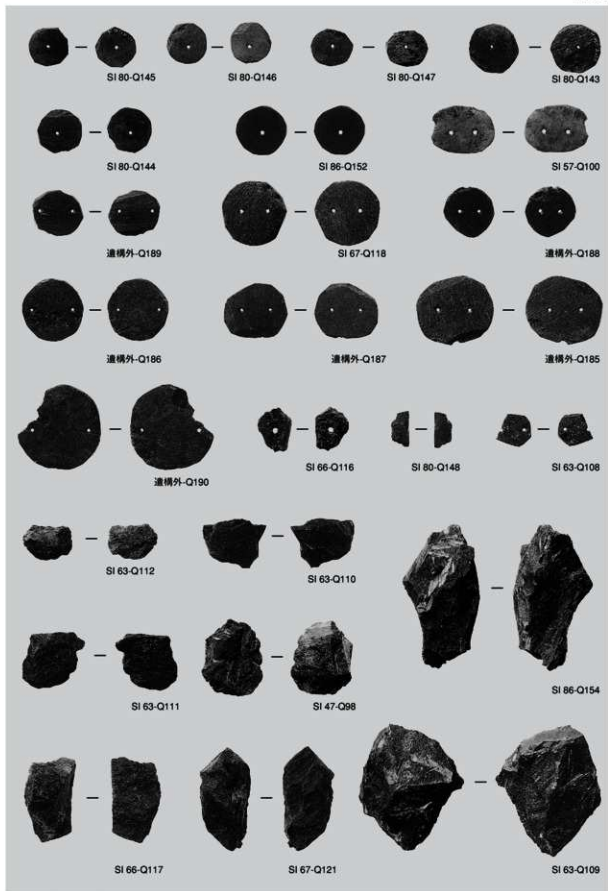
第1·2号石器集中地点出土石器



第2号石器集中地点出土石器

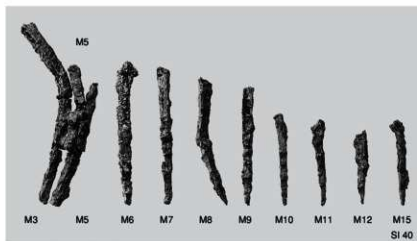
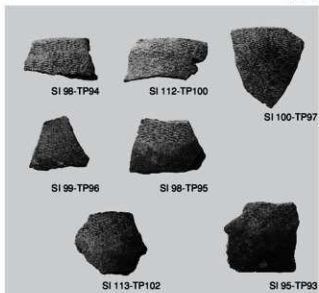
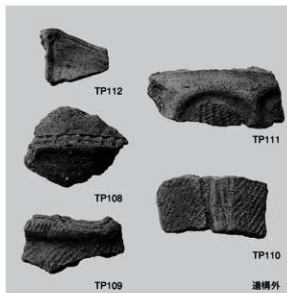


出土石器, 石製品, ガラス製品

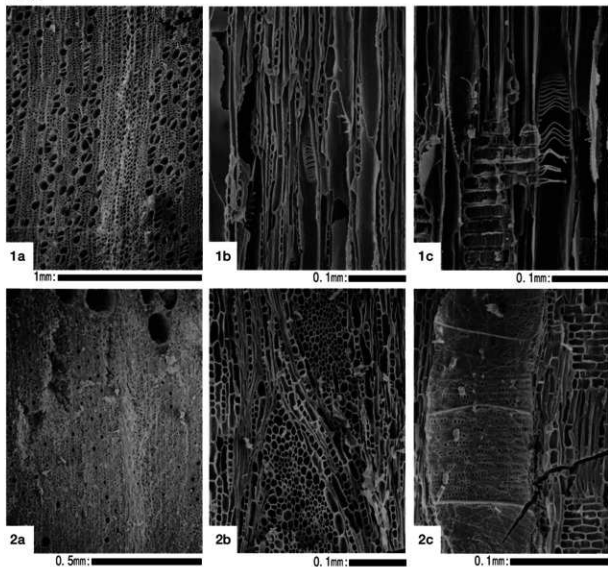


出土石器, 石製品





出土土器, 金属製品



図版1 薬師入遺跡出土炭化材の材組織の走査電子顕微鏡写真
1a-1c:ハンノキ亜属 (No.15) 2a-2c:クヌギ節 (No.2)
a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

茨城県教育財団文化財調査報告第296集

薬師入遺跡2

阿見町吉原土地区画整理事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

下巻

平成20(2008)年3月19日 印刷
平成20(2008)年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 高野高連印刷
〒310-0853 茨城県水戸市平須町1822-122
TEL 029-305-5588